

ターゲットの暗殺教室

クローバー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あることから国家から逃げることになった羽川康太は逃亡生活を行っていた。そんなある日現れたのは昔俺を殺しに来た暗殺者だった。

UA10000突破 お気に入り人数2000人突破しました。
読んでくださりありがとうございます

書いていくと神崎さんをヒロインに追加したほうが書きやすかったですので追加します

目次

始まり	1
再開	10
日本政府	16
罪悪感	21
日常	26
安全の価値	30
苦しみ	35
実力	43
参加できないんだ	47
幸せ	51
限界	57
悪夢	62
殺し屋	67
生きる	74
笑顔	82
我儘	88
中間テスト	95
マンション	104
全ての告白	115
信用	124
両親	130
やり直し	139
将来	150
夢物語	163

病院	276
欲	271
説明	265
ありがとう	255
弱み	243
限界	233
矢田 桃花	229
球技大会	223
怖い	217
関係	213
人生	208
信頼	202
過ち	195
狂気	191
完璧な人間	186
幼馴染	181
100億の価値	170

始まり

俺は貧乏だ。

お金がないし家族は夜逃げしてしまった。
家は売ったしお金は今通帳にあるお金とこの山しかない。

「……やっぱいいいなあの山。」

俺は自分で作った家に寝転ぶ俺。

洞窟の中にただ立て札を建てただけの家。

その中にあるのは学校からもらって来た壊れた椅子と机を修理して使ったものと最低限度のものだけ。

後は支給されている学校の教科書だ。

「はあ、今日の食料でもとってくるか。」

俺はため息をつく。

俺はある条件を元に中学校、高校と行けることになっている。

その先は全く未定だった。

いつまでこの生活が続くかもわからない。

今日で512日間ずっとここで暮らしてきた。この生活にもやつと慣れてきたところで食料の調達、水の確保ができるようになった。

今日は近くの沢の水を昨日貯めておいたので魚だな。うまくいけばクマが動きはじめて罨にかかっているかもしれない。

俺はそう思っ歩き出した。

……腹へった。

ため息をつく。少し前までは干し肉と魚の燻製だけで過ごしてきたから腹が減っていた。

最近やっと山菜が手に入るようになったので少しはましになっている。

帰り道に積んだ野いちごやタンポポもあるから餓死はしないとおもうけどやっぱり肉や魚はご馳走だ。

俺は野いちごをつまみ、家を出る。

もう夕方でもわりは少しだけ暗くなりはじめている。

とりあえず罨を家の近くから回る。

すると家の近くの罨を見ようとすると

ガサガサ

と揺れる音がする。

かかっているか？

俺は自分で見よう見まねで作った竹槍を構える。

そして、なるべく音を立てずにゆっくりと近づく。

狩りの基本でぎりぎりまで近づき草陰から覗き込む。

すると

「にゅや、なんでここに罨が？」

人の声らしき音がする。

俺は、ガツガリしてしまう。久しぶりに肉を食べられるかもしれないと思っただけなのに。

しかし外してやらないとずっと一生このままだろうし助けるか。

「……大丈夫ですか？助けるんでちよつとうごか。」

といったところで俺は目の前にいる生物を見る。

黄色い顔に黒い服を着込んで足は触手が多く生え、2メートルあり

そんな大きさの黄色いタコがいた。

……なんだこの生物

俺はそいつを見ると少し考える。

なにか言っているが俺は少し考え

「タコだったら食えるよな。」

「にゅや？」

竹槍を構える。黄色いし毒もあるかもしれないが、一応捉えるだけ捉えよう。

「いや、食わないでテレビ局や国に売った方がいいのか。そっちの方がお金もらえるし。」

「ひい。やめてください。私美味しくないですし珍しくもないですよ。」

「嘘つけ。それだったら一丁死んでくれないか？いい加減タンパク質と脂質とらないと栄養失調で死ぬんだよ。」

俺はもう限界だった。殺してから考えた方がいいだろう。

もう燻製も干し肉も切れて二三日たった。草ばっかり食べていたので腹も限界だった。

「ちよ、ちよっと待ってください。お、お腹が減ってるのだったら、なんでも奢りますんで。」

「……」

俺は少し考える。

学校の春休みが終わるまであと一週間。

それまでは空腹が続くだろう。

そしてこの生物何か隠している。

多分国か何かの秘匿生物が逃げ出したのであろう。

つてことは

「……一週間の間奢ってくれるのだったら。この場は放すけど。」

お金の匂いがするから捕まえておいて損はないだろう。

「は、はい。お、奢りますのでお、おろして。」

「嘘ついたらわかるよね？」

有利な条件を押し付けるのが交渉の最低条件だ。

その生物は領くしかなかった。

「うめくやっぱり焼肉さいこーだわ。」

「……」

俺たちは近所の焼肉食べ放題の店に来ていた。

今日で七日目。明日からは学校が始まる。

目の前にはたくさん積み上げられた皿、

目の前にはたくさん生物が3、俺が7の割合で食べていた。

「にゅや。計算外です。まさかあんな山に君がいるとは。」

「まあ、仕方ないさ。普通はあんなところに罠を張ってる男子中学生がいるなんて思いもしないよな。」

俺は笑い目の前のタコを励ます。

「そういえば気になっていたのですが、羽川くんはどうしてあの山にいたんですか？」

「そりや。住んでるからに決まってるだろ。」

「にゅや？一人ですか？」

「ああ。母さんと父さんが妹連れて夜逃げしたからな。もともと地主だったから地価が暴落したのか知らないけどこの山の権利書と俺の通帳以外は全部持っていきあがった。たぶん俺も売られる対象だったんだけどなんとか裏道を通って逃げ出して来た。」

俺は苦笑してしまう。

「……もしかして君はあの」

「ああ。元羽川建設の5代目だよ。」

俺は苦笑してしまう。するとその生物は下を見てしまう。

羽川建設。数年前までは大型企業だったがとある事故のおかげで借金ができてしまいそのまま社長夫妻と子供が夜逃げしたというニュースは日本中の騒ぎになっていた。

「多分うちの学校でも噂になってる。俺に直接言いにはこないけどな。ってかマスコミにバレても借金取りが追いに来る可能性があるからな。あの山を残してくれたのは唯一の温情だったんだらうよ。」

俺はギリギリまで逃げ続けた結果こうなっている。

「だから、あんたと同じ俺も逃亡者って訳だ。まあ、成績が良かったから柗ヶ丘中学校の理事長に誘われて俺の安全を保障してもらいました、学費と勉強道具を補助してもらい中学校に入学することになったんだよ。」

俺は苦笑してしまう。ある条件を守るかわりにずっと授業を受けさせてもらってる。

「まあ、結果的に超貧乏な暮らしで原始時代みたいな生活してるんだよ。風呂も週に一回の銭湯以外は川で水浴びだしな。」

「……」

タコが不思議そうな顔をしている。

「それは秘密事項じゃないのですか？」

「ん？秘密事項だけど？」

「それならなんで私に？」

「まあ、真っ白だからな。」

「はい？」

タコが不思議そうな顔をしてる。俺は苦笑してしまう。

「なんかわからないけど俺そういうのわかるんだよね。見捨てられたからか、何度も死にかけたせいかわからないけど信頼できる人は白く、逆に危ない人は真っ黒に見えるんだ。だから俺を狙っている殺し屋から逃げる事ができるって訳。あんたは真っ白だからな。安心していれるわけ。それに、」

俺は指差して

「ずっと監視している国の奴らに守ってもらおうかと思つてな。」

「にゅや？」

「さつきから私服に紛れた奴が何人か潜んでいるんだよ。視線がちよろちよろこつち見てるしうざつたるいな。」

俺が指差した先に数人の男と一人の女が座つて何かを話していた。

「多分盗聴器か何かつけられてるんだろ。俺がさつき通つたらかすかにあんたの声が聞こえたしな。一応ここは要望があれば防音にできるんだよ。それなのにあんたの声を聞こえるのはおかしい。」

盗聴器もかなりの高性能のものだろう。俺も最初は付いていることを全くわからなかった。

「それに、なんとなくだけであんたは俺のことを知っていたんだろ。多分名前が羽川康太って聞いた時には気がついてた。だからあんたはわざと盗聴器をつけられた。ちがうか？」

「……」

そのタコは何も言えずたじろぐ。沈黙は肯定と見よう

「たぶん、あの事件の真相を全部知っているんだろ。俺たちの家族は国家に騙され、借金地獄に陥つた。そのことを知ってる俺たち家族を抹消しようとした国家は世界最強の殺し屋、つまりあんたを送り出したが他の家族は知らないけど俺の暗殺に失敗。そして何度も殺し屋を送り込むがごとごとく失敗。違うか？初代死神。」

するとタコはギョツとしていた。

「……いつから気づいて。」

「ん？最初からかな？まずお前みたいな生物いないし。2代目だと思ふ死神なんかお前より爪甘かったし。」

最初の死神が現れた時は本気で死にかけて。三年前急に現れ黒だ

と気づいた体を逸らした時には殺されかけていた。しかし去年現れた死神は簡単に逃げられた。

「なんであんな甘いのかなあって思っていたらお前が現れたってわけ。だから何か任務でハマしたか2代目死神に騙されたのか知らないけどな何か原因で捕まりあの計画がまだ続いているのか知らないが実験のモルモットにされその姿になったのかな？そこはわからないけどまあその触手のエネルギーを使って研究室から逃亡。違うか？」

「だいたい合ってますが。」

俺の顔を見る死神。黄色い丸っこい顔をしながら野菜を取り皿に入れてくる。

「肉ばかり食べてたら健康に悪いですよ!!もっと野菜も食べてください。」

「お前は母さんかよ。」

はあとため息をつく。

「まあ、いい。んで俺を殺しに来たのか？正直俺はその触手から逃げることは無理だから殺されるしかないんだけど。」

俺は笑う。すると死神は首を振る。

「いや。実はですね。私はあなたに依頼しに来たのですよ。」

「依頼？」

「はい。実はですね、私来年の3月に地球と共に死にます。」

「まあ、理論的にはそうだな。」

「にゅや？驚かないんですか？」

「まあ、別に。月破壊された時点で可能性はあると考えてたからな。」
去年の3月に月破壊された時ついにやっちゃったかということさえ思った。

「それですね。私はある人との約束を守るために柵ヶ丘中学3―Eの担任をやることになったのですが」

「はあ？」

俺は訳がわからなかった。

「にゅや。そこには驚くんですね。」

「まあな。つてかあんたが約束して先生になるってどんな人だよ。」

「雪村つてきけばわかりますか？」

その一言に俺はびっくりする。

「雪村製薬の長女か。なるほど、あの天然か。」

「はい。」

「死んだのか？」

すると死神が今まで見たことがない表情をしていた。

「……悪い。不謹慎だった。」

「別にいいですよ。それで」

「好きな人と同じ教師になったか。」

「にゅや。な、何をい、言つて。」

「あんた。そんな悲しそうな顔してなにいつてんだ。後悔してるって丸分かりだぞ。」

俺は死神の顔を見る。

「あの人は可愛いし、いい人だからな。どうせあんたをかばって死んだんだろ。」

「……」

「無言は肯定と見るぞ。そっか。」

俺は少し下を向く。

「俺もあの人は好きだったよ。俺もこの学校に来て教師やってるって聞いてたからな。正直教わって見たかったよ。俺も今年からE組だったから。」

「にゅや？」

「俺が柵ヶ丘に入った条件の一つには卒業後ここの先生になるため、E組に二年生時はいるってことだったんだよ。雪村先生の監視も兼ねて。あの人のこと理事長も買ってたからさ、壊れてもらったら困るってことで。」

俺はピーマンを食って箸を置く。

「多分あの理事長も誰か自分のやり方を否定してほしいんだよ。あんたもE組がどういふところか知ってるんだろ。」

「ええ。本校舎と隔離されて設備も最悪と聞いてますが。」

「そのほかにも完全に差別されてるんだよ。なんか上司が部下をいじめてるって感じで。」

俺は少し考え

「だけど、なぜか内心後悔してるようにE組を見る時があるんだよ。多分無自覚だけど。過去に何かあるんじゃないのか。あの人も。」

俺はコーラを飲み息を吐く。

「そう言えば依頼ってなんだ？」

「にゅや？」

「いや、なんか暗い雰囲気なつたから話戻そうと思ってな。」

「えっと、いや、わたしのキャラはこんなシリアスじゃ。」

「キャラつけてるんかよ。まあいいけどさっさとしてくれないか？」

「私を殺しに私のクラスに来ませんか？」

「……」

俺は声を失ってしまう。

しばらく無言のまま時を過ごす。

「そつか。あんたはそういう人か。」

俺はやつと重い口を開いた。

「分かったと言いたいところだけでも俺はまだEクラスに入れるか分からない。順当にいけばAクラスだからな。」

「それはこつちの条件に加えましょう。銃の扱いもでき、戦闘経験もあるので暗殺者としては育てるには十分でしょう。」

「確かにな。でもE組の命はどうするんだ？俺もあの教室に関わつたら危険が増すぞ。」

「私が生徒たちを守ります。あなたもいることですし30人くらいなら余裕でしょう。なにせ私の唯一の暗殺失敗した人ですから。」

緑のシマシマが見られる。油断だろうか？まあどうでもいいが

「はあ。なら勝手にしろ。ご馳走様。」

俺は席を立つ。

「おや、賞金とか対先生用の武器はどうするんですか？」

「……そこはE組のクラスメイトとして聞くさ。まあ俺も受け入れられるかは微妙だけど。それに辺りに3〜5人いるのに持って逃げら

れねえよ。」

「……私が送りましょうか？」

「いや、大丈夫。このくらいなら油断しなければ撒けるさ。それにそのうち一人は白でかなり強い。多分俺の実力を探りに来たんだろう。」

俺は手を振る。

「じゃあ先生また明日な。」

再開

今頃学校では始業式が開かれているだろう。

俺はため息をつく。

俺はE組の校舎の屋根で寝転んでいた。

「まさか、こんな簡単に許可が出るとはな。」

俺は始業式をサボって裏山で寝転んでいた。

俺はこういうことは珍しくない

てか学校に来ることさえ珍しいのだ。

多分俺がE組行きつて言われても誰もが納得するだろう。

「3—Eか。」

俺は笑う。

この学校には階級制度がありE組は差別されている。

階級制度のお陰で柵ヶ丘中学と柵ヶ丘高校はたった数年で全国有数の進学先になった。

たしかに一つのクラスを晒し者にするることによって他のクラスは優越感と危惧感を抱かせることによって他のクラスは有名な大学に進学している。

その代わりEクラスの大学進学率はかなり低いのだが。

「まあ。俺にはぴったりのとこだよな柳沢に騙されてから借金地獄にあつた俺には。」

俺は少しだけため息をつく。

俺はターゲットだ。

死神と同じ殺される側であり殺す側じゃない。

だから思考が他の中学生とは違う。

どこから狙われているか。わからない。

警戒は寝てる時も怠ることはなく罾を仕掛け防御盾まで用意している。

それでも一度殺しにきた暗殺者がいた。

その時は気づいたからよかつたものの唯一死を覚悟した。

……まあ、そいつが今日から先生やるんだけど。

俺は苦笑してしまう。
変な付き合いだよな。

俺は校舎上から下を見ていると一人の女の子が歩いてきた。
これからクラスメイトになるやつは、始業式は始まったばかりで
帰って来るはずもない

ってか中学生にしたら小さすぎるよな

身長は多分150センチくらい？いやもっと小さいか。

その少女が一人で歩いてる。

別にそのことが気になつたわけじゃない。

首筋に根つこのような筋が見えたのだ。

旧式の触覚か。

俺はため息をつく。

少し黒くなっているからメンテナンスはしておらず多分盗んだもの
のだろう。

あのアホが。何を簡単に奪われているんだよ。

俺は校舎から飛び降りる。

「おい。そこのお前。」

「えっ？」

俺がいるのがわからなかったのか驚いたようにこつちを見る。

緑色の髪にここの制服を着た女の子が俺の方を見る。

すると、その女の子は信じられないようなものを見たようになる。

「おい、どうした？」

「もしかしてこう？」

「こう？」

どこかで聞いたことがあつたような。

「……あつ？あかりねえ。」

「本当にこうなの？」

「だから羽川康太って言ってんだろ。ってか本当にあかりねえさんか
よ。久しぶりだな。」

雪村あかり。昔、雪村製菓を援助していた時知り合った女の子でよく
遊んでいた女の子だった。歳は俺の一個上だったはずで昔、女優と

して活躍していた。

「嘘。おねえちゃんがこうちゃんは死んだって。」

「……」

そうか。何も知らない人にはこう伝わっているのか。

「死んでねえよ。ってか、俺社会的には死んだ扱いになってるのか。それ多分デマだわ。ってかそれ流したの100%柳沢だろ。」

「……」

「ってかあぐりさんのこと大丈夫か？俺はそっちのほうが。」

「うっ……ひぐっ、」

「……」

あかりねえは力が抜けたように座り込む。

大丈夫なわけなかった。

あかりねえはあぐりさんが大好きだった。

いつもべったりで俺と会うときは基本仕事かあぐりさんのことばかり話していた。

あぐりさんもそんなあかりねえのことを溺愛しており本当に姉妹っていうより恋人同士みたいだった。

たぶん誰にも相談できなかつたんだろう。

首元には触手があるんだから。

「……」

俺は少し迷ったが今は暗殺者どころか誰からの視線も感じられなかったのだ。

「……よく。頑張ったな。」

とあかりねえの頭を撫でる。昔あかりねえや俺が泣いたときあぐりさんがやってくれたように。

あかりねえが泣き止むまで俺は頭を撫で続けた。

「落ち着いたか。」

「うん。ありがと。」

あかりねえと俺は座り込む。

「とりあえず、久しぶり。五年？いや六年ぶりか。」

「うん。あの事件以来だからね。」

俺は頷く。

「つてか、一応俺って死んだことになってるの？俺数年間海外を転々としていたから全くこっちのことわからないんだよ。」

「世間では死んだことになってるよ。でも、本当にこうだよな？」

「まあ、死んだと思ってたやつが生きてたらこんな反応か。証拠はまあ昔の思い出でも話せばいいか。一応本物だよ。ちよつと国から追われてただけ。」

「……国から追われるってどんなことをしたの？」

「日本政府の研究室からの誘いを断っただけだよ。まあちよつと小二の時の自由研究テーマがちよつとな。」

あのときはまだあんなことになるとは思ってもなかった。

「まあそんなことはどうでもいいとして。」

「よくないよ。どれだけ心配したと思ってるの？」

「それについては悪いっていうか俺のせいじゃないんだけどなあ。追われるわけになったのは全部柳沢のせいだし。」

私利私欲のために俺の研究を自分の成果にしやがったからな。あいつは

「まあ。この話は後だ。それよりもあかりねえ。今すぐその首の触手外せ。」

するとあかりねえの顔色が一瞬黒に変わった。

「触手？…こう何を言ってるの？」

一瞬だけ黒ってことは侵食はまだ進んでいないのか？

「さつき上から見たときに首の根っこのような物が見えたんだよ。まあ、見間違いだと思っただけだ。どうやら見間違いないやなさそうだな。あぐりさんのこともあるし。」

「……お姉ちゃんのことについて何か知ってるの。」

「ああ。ちよつと色々あつてな。まあ説明すると。」

俺は昨日まであったことを説明する。黄色いタコのこと。そしてあぐりさんの情報も

「そつか。お姉ちゃんが死んだことはもう知ってたんだ。」

あかりねえが苦しそうに言う。

「まあな。本当なら断つてるところだけど……あの人の願いは正直叶えてあげたいんだよ。それに今回の件にその触覚が使われている以上見過ごすわけにはいかないんだ。たとえ罨でも」

このことが承認されたのは俺の暗殺も含まれているだろう。それに

多分柳沢はここに現れる。

俺はそう判断していた。

「それに多分本当のことだと思っただよ。普通世界最強の殺し屋が先生をやるわけないだろ。」

「でもそれが嘘だったら。」

「嘘じゃない。あぐりさんが死んだことの証明がつく。それに……俺は死神がみせたあんな表情を嘘だとは思いたくない。」

俺は一度人間だったころの死神にあっている。その時の死神は優しく、知識もありそれでいて安心をみせるような素振りだった。

それは本当に完璧超人みたいに。

「なあ。一度あのタコに真実を聞いてみないか？そっちの方があかりねえが納得できると思う。俺が時間とるから。もし納得がいかなかったり、嘘をついているようだったら俺に言え。俺があかりねえに仇は取らせるから。だからそれまではその触手とつてくれないか？それ以上は危険だから。」

俺が言うとおかりねえは俺を見る。そして首から触手を取り出す。黄色の触手になっているので俺でも安全にさせる

「でも、どうやってこの触手を。」

「ほら首出せ。」

あかりねえは今殺気が抜けているので多分できる。

注射器を取り出しそれを触覚に刺す。

すると黄色い触手が光に変わり消えていった。

「えっ？なんで？」

「触手の強化液として作ったんだけど、これがなぜか触手を綺麗さっぱりなくしてしまうんだよ。人体的にも異常はないし副作用もないことは自分に使った時に確かめる。」

怪我の功名ってやつだろう。条件はあるものの触覚を消し去ることが出来る。

「まあ。多分いろいろ聞きたいことはあると思うけど。それは朝のH Rの時に話すよ。どうせ言わないといけないことだからな。」

すると校舎側から騒ぎ声が聞こえる。多分もう始業式から帰って来る時間だろう。

「じゃあ。また後で、あかりねえ。」

「とも…くん…」

俺はわざとあかりねえを遠ざける。

これから起こることがわかっていたからだ

日本政府

「失礼します。」

俺が職員室に入ると黒いスーツの男が一人座っていた。

「誰だ？まだ始業式から誰も帰って来てないはずだが。」

体格からして普通の教師ではないことがよく分かるので自然と警戒するようになっていた。

そして俺は自分の記憶からその人の名前を思い出す。

「なるほど、情報部の烏間か。珍しく適任の人をよこしてきたじゃん。」

俺は口笛を吹きながら笑う。

「なんで俺の名を。」

警戒する烏間に異変を覚える。

「……お前、俺のこと知らないのか。」

「ああ。貴様は誰だ？」

俺のことを知らされてない？

「……羽川建設の羽川康太って知ってるか？」

「確か五年前に死んだ男の子だろう。それがどうかしたか？」

「……なるほど。そういうことか。」

その一言で厄介なことになったことが分かる。

「俺は羽川建設5代目羽川康太。あんたが死んだと認識している羽川康太さ。」

「はっ？」

その男性は固まってしまふ。まあ、当たり前か。

「その様子だったらなんで昨日焼肉屋で俺たちをつけてきたんですか？」

「っ!!気づいていたのか？」

「はい。ってかあの後あなたの部下らしき人からAKぶっ放されて大変だったんですよ。」

「そ、それはすまなかった、って羽川くん今なんて」

「あんたの部下からアサルトライフル撃たれました。」

あの後は大変だった。街中で躊躇なく銃を撃たれたのは初めてだった。

最初は信じてなさそうだったので、俺は撃たれた銃弾を机の上に転がす。

「……」

口をポカンと空けている鳥間。

「……ついでにあのタコから何も聞いてないって。ちよつとぶん殴るか。あいつ。」

「ちよつと待て。色々聞きたいことがあるのだが……」

「ん？別にいいけど。朝のHRまでに終わらせてくれると嬉しいんだが。」

「君は何者だ？」

鳥間が声を低くしている。

「……六年間、日本政府から隠蔽されてきた標的だよ。懸賞金は100億。」

「……すまないがもう一度言ってくれないか？」

「多分だけど日本政府に聞いた方が早いぞ。羽川康太が3―Eに来たっていえば一発で伝わるから。」

すると信じないと思っていたのだがやけに素直に対応してくれた。

「はあ。全くあのタコ。何を考えてやがる。」

「おや。やけに殺気立っていますね」

「だれのせいだあ。」

「にゅや!!」

俺は力一杯にいつのまにか入って来ていた死神を殴りつけた。

「痛いじゃないですか!!」

「はあ？てめえ防衛省に俺がこの教室に参加すること黙っていただろうが!!おかげで鳥間に何言っただこいつって思われたじゃないか。」

「それはあの後アメリカ軍の軍事ミサイルを返しにいつてまして。」

「はあ？そんなもん知るかよ。てか、てめえは携帯電話とかいうハイテクなもの知らないのか。いつも報告、連絡、相談、のほうれん草は

しつかりしろって言われて来なかったのかよ。」

「しりませんよ。そんなもの。」

「じゃあ、今覚えろ。今すぐ覚えろ。」

「ぎゃー。ぎゃーうるさいぞお前ら!!」

バンツと机を叩かれ俺と死神は黙ってしまふ。

やべえ、この人怖い人だよ。

「ところで、あの速度。まさかまたあれを。」

「……」

死神の言葉に俺は黙り込む。

「……正直あんたとの殺し合いの後結構服用した。まあ予防線にな。」

「そうですか……」

俺は苦笑してしまふ。

「ほら、先生になるんだろ？笑顔、笑顔!!」

と死神の肩を叩く。

「は、はい!!」

「それにあぐりさんの妹がいるからな。今晚空けとけ触手持ってたから抜く条件に交渉条件にあんたを使った。一回ちゃんと話せ。」

「はい。つてはい?」

「多分偽名で通っているはずだけど。」

とクラス名簿を見てあたりねえが誰かすぐにわかった。

「茅野カエデ。確か八年前に単発ドラマのボツ役の名前。カエデって言う珍しい名前はそうそう見ないし多分そいつが雪村あかりだよ。」

「それは。」

「話さないといけないぞ。一応大まかには話してあるけど、ちゃんと話せ。好きだった人の妹だろ。」

「……はい。」

「ほら、一応俺も生徒だから笑顔を忘れるな。」

俺は笑い

「でも、昔のあんたより人間らしいよ。あの時のあんたが今のあんたなら俺は死んでいたな。」

「……」

死神は悲しそうにこつちを見る。
それがIFの話だと知ってるから。

「わかりました。失礼します。」

と電話を切る烏間

「……」

烏間の顔は黄色。俺のことを聞いて驚いているのだろう。

「本当たとわかりましたか？」

「あ、ああ。」

「まあ、一応中二ですけど特別強化生徒っていう名目でここにいるんで。ついでにテストは中三の問題を受けることになってます。元々テストはほとんど入学試験時にここの高等部のテストで全部90点以上は取れていたので学力には問題ないのでご安心を。」

俺は笑う。

「後日本政府と暗殺者に警告しますが俺は一応このタコの依頼ってことでこの教室にいます。決してあなた方には協力しないのでそのところは理解しておいてください。」

「にゅや？」

「は？」

驚いたような二人が俺を見る

「いや、当たり前のことじゃないですか？だって俺は日本政府から狙われてるんですよ。もし協力なんかして殺されたら元も子もないでしょ？後口止め料はもらいますよ。別に世間に公表してもいいわけだし。」

というか

「俺は正直俺の忠告を無視してこの生物を作ったバカのいうこと聞きたくないんですよ。ってか勝手に俺の研究を自分の研究にするために俺の家族を殺した相手のいうことは。」

「はあ。とりあえず一つ資金面は当分の間は大丈夫か。」

俺は少しホッとしてしまう。

とりあえず5億円。

これが俺が手に入れた現金だ。

「国家秘密が二人か。しかも国は信用できないし。世界の殺し屋が集まるのも時間の問題だよなあ。」

今は屋根に登っている。下では朝のHRをしている途中だ。今頃あのタコに驚いているだろう。

……正直なところ俺は地球が爆破しても構わない

今のところ生きたいと思える理由もないし、国はそのことを反省するべきだと思う。

だから基本は暗殺には無関心だ。

それに俺には他にすることがある。

それまではお金にケチな男子生徒を演じ続ける。

「すべては佳奈の復讐のために。」

罪悪感

しばらく空を眺めていると誰か下から視線を感じる。

「ん？」

視線の先には死神がいた。

「どうやら俺を見ているわけじゃなく。どこか別の人を見ているよ
うな感じだ。」

「……先生、ちよつと。」

「にゅや？」

「ほら、こい。」

手を振ると死神は顔を赤くする。

「にゅやー!!授業サボってなにしてるんですか!!」

「たぶん、今のあんたと同じことだよ。ほら、座れば？」

俺が呼ぶと死神が飛んでくる。そして隣に座ると少しの時間何も話さずに空を見る。

そして数分経ってから

「知ってたのか？俺がそれを作ったこと。」

「いや、知りませんでした。」

俺たちが言っているのは触手のことだ。元々は反合成物質を使つたエネルギーをあるものに使おうと柳沢の理論を少し変化させたもの。

しかしその一つはかなり大変で見つからなかったことだった。

「馬鹿らしいよな。俺はそのたった一つで家族も、友達の姉も、自由もなくなつて、自分の命を狙われて……。本当ならもつと楽しいものを作ろうと思つてたのにな。まさか人を殺す道具として国家が使つてくると思わなかったよ。」

俺は理事長から実験のため貸し出されているPCを死神に渡す。

「この項目。反合成物質の服産品触手を利用した対人兵器の作成。日本政府の国家機密をまとめてあるUSBをパクったものだよ。」

「……どこでこれを。」

「昨日の店の帰り、アサルトライフルを撃つて来たやつが持っていた。」

あんたのことが書かれているからこここのところ1〜2年のデータなんだと思う。」

パスワードはハッキングですぐにわかった。

「なあ。なんでこうなったんだろうな。」

俺は下を向く。

「本当にどうしてこうなったんだろ？俺のせいじゃないのに後悔してる俺がいるんだよ。」

「……」

「どうしてなんだろ。俺は人殺すためにこれを作ったわけじゃないのに。」

「……」

「危険性も全部伝えたのにな。なんで」

俺は自然と拳を握って

「好きな人は俺のそばからいなくなってしまふのだろう。」

俺が教室に入ると教室は騒ついていた。

多分死神のことだろう。

俺はその隙を見てゆつくりと入る。

空いている席は2つ

さっきのHR中にこっそり確認しておいた。

多分俺か有名な赤羽先輩の席だろう。

とりあえず席は空いてあった席の一つに座る。

カバンから教科書を取り出し授業の準備をする。

しばらくしたら死神が教科書を持ってきた。

へえ〜本当に授業やるんだなあ。

烏間も監視だろうが教室の中に入って来ていた。

教科は数学

正直なところ俺は幼稚園時までに高校クラスの問題は解けるようになった。

理由としては家が厳しすぎて小学生からは習い事で忙しくなるからと理由だった。

今考えると鬼畜すぎるよな。

死神の授業を聞きながら適当に教科書を見る。
でも、やっぱりやったところなので面白くない。

「えつと、ここは？」

隣にいるポニーテールの女の子が悩んでいた。数学は苦手なのだろうか。

「そこ、最初から違う。因数分解は基本だぞ。数学が苦手なのならここは公式を記憶するのがいいぞ。」

「えつ？」

「最初と最後は二乗、中は $a + \beta$ 。難関大学を狙うならそのあと4乗までは覚えたほうがいいぞ。」

「あ、うん。ありがとう。」

俺はとりあえずノートを開くと

「「お前誰だよ!!!」」

クラスの主に男子が突っ込む。

「え？羽川康太だけど？」

「「はい？」」

「羽川康太。一応言っておくけど羽川建設五代目。まあどうやら日本では死んだ扱いになってるらしいがな。」

するとクラス中が騒めき始める。

「つてか一応去年からこの生徒だったんだけど、誰も気づいてなかったのか。まあ一応先輩方の一個下だから。一応特別教科生徒っていう名目でここにいますが、先輩方の安全を確保することが本当の目的です。まあボディガードだと思って構いません。」

「はい。質問。それって政府から雇われたってこと？」

斜め前の女の子が手を上げて質問してくる。

「違う。俺が頼まれたのはそこにいる先生だよ。つてか日本政府は敵だし。」

「えつ？」

「俺もこの先生同様にターゲットなんだよ。賞金は100億円。」
するとみんながざわめき出す。まあ当たり前だろうな。

「まあ、政府からの追われてる同士つていえばいいかなあ？つてか先

生って暗殺報酬は何円？」

「にゅや？・100億円ですがってさっきのHR屋根でサボっているから分からないですよ!!」

「別にいいじゃん。ってかそんなに安いのか。300はあるかと思っただ。まあ、俺は正直殺そうと思えばすぐに殺せるけど基本は暗殺にノータッチだから勝手に殺していいぞ。ってか殺そうとしてきたやつは手入れしてから返すっていうのが俺のやり方だから殺すことはしたくないし」

「「お前もかよ」」

えっ？なんで突っ込まれたの？

俺は死神の方を見ると顔をそらして口笛を吹いている。

よしあいつ後から殴る。

「まあ、本気で暗殺したいやつは手伝いや自主練には付き合うから。あともうひとつ。」

俺はニコリと笑いながら

「俺を殺しに来てもいいけど、多分こいつぐらい殺せないと俺は殺せないよ。経験の差が違いすぎるしな。」

「そんなわけないだろ。マツハ20だぞ。」

と金髪の男が言うが

「……実際のところそうだろう。5年前から何度も暗殺者を送り込んでいるが怪我をするどころか暗殺者をやめ、転職するやつばかりだ。おかげで殺し屋の数はこの5年間で3割にまで減っている。」

「「はっ？」」

「それにもう殺し屋の中では最も優れている人でも殺せなかった。実質ミサイルか核爆弾を使わなければ羽川くんは殺せないだろう。」

鳥間の言葉に苦笑してしまう。

「まあ、さすがにそこまでされたら無理ですけど。まあ生身ではただ。ってかなんか質問時間になってるけど数学やらんでいいの？」

「にゅや!?まあ最初の授業だからいいじゃないですか。私も皆さんのこと知りたいですし。」

「ふーん。まあいいけど他の奴にしてくれ。ってか俺、今の所、磯貝先

輩と片岡先輩しかわからないし。」

「……」

視線を感じるがそっちは見ないようにする。

見たら今すぐにも罪悪感で泣きたくなるから。

そして始まっていく中俺は罪悪感でいっぱいだった。

日常

あれから二週間がたった。

相変わらず平和だなあ。

そんなことを思いながら俺は笑う。

日本は平和な国だ。

基本的には平和な国なんだが。

「そのぶんだけあって暗殺スキルが弱すぎるんだよな。」

俺はため息をつく。正直今のままじゃあ、俺にも、あの先生にも当てることはできないだろう。

銃器は俺も専門じゃないがいくらなんでも酷すぎる。

……つてか暗殺スキルを教えられる奴がいらないんだよな。

俺はスマホを取り出す。

とりあえずでスマホを取り出す。

「やっぱり使うの難しいよな。つてか慣れねえ。」

ずっとガラケーを使っていたのでずっと四苦八苦していた。でも高性能なので使わなければならない。

まあ口止め料で買ったんだけどな。

「……はあ、まあ電気とWi-Fiあそこに通っただけですか。」

俺は屋根で寝転ぶ。

今下では銃声が聞こえる。

多分今日も殺せないだろうな。

そんなことを考えながら俺は息を吐いた。

「終わった?」

「はい。終わりました。」

緑色のしましまで俺をむかえるけど

やばい。すごくなぐりたい。

しかしこらえて自分の席に戻る。

「おはよう。羽川くん。」

「おはようございます。矢田先輩。」

どうやら隣の席は矢田という女の子でクラスの中でも一、二を争う

人気の女子らしい。

「今日もダメだったんですか？」

「うん。やっぱり速いよ。」

「まあ、マツハ20の状態になったらそりや厳しいに決まってるだろ。俺だって当てられないしな。」

さすがに最高速度マツハ20の速さになれば当てられないに決まってる。

「多分だけどみんな先生を狙って撃ってませんか？」

「えっ？そうだけど。」

「そこですね。馬鹿みたいに先生を直接狙うとその分逃げるスペースを与えることになるから狙いは先生の逃げ場を無くすように撃つといいんですよ。えつと確か速水先輩と千葉先輩がこの中だったら射的がうまいはずなんでアタッカーにして他の人が逃げ場を防げば当たる確率は上がるはずですよ。」

「えっ？？」

「簡単にいうとマツハ20になるには時間がかかるんです。最初の速さは600kmぐらいなんでマツハ20よりも当てやすいんですよ。」

どんなものでもトップスピードに入るには時間がかかる。

「まあ、動けないようにするのが理想的だけど、今の状況じゃ難しいからなるべく動けないようにすればいい。機動力さえなければ知識のあるただのしゃべる巨大なタコだ。」

「……」

絶句したようにしている矢田先輩

「えつと？詳しいね？」

「まあ。俺もあの生物について研究してたしな。」

するとへえくと周辺の奴らは声を上げる。

「つまり機動力を奪えばあの生物はかなり弱体化するぞ。まあそれでも時速600kmあるけど。」

「ふーん。なるほど。ありがとう。みんなにも伝えておくよ。」

「そうしとけ。まあ、授授業もうそろそろ始まるしこの話はラインに

あげておくから。」

俺はスマホを開く。ここはWi-Fiは通らないらしいが俺にはポケットWi-Fiを買ったのでスマホは俺だけ使用可能だ。

「さあ授業を始めますよ。」

先生は今日もいつもの通り授業を始めた。

何が起るわけもなく授業は進む。

そこは普通の中学校とは変わらずに授業を受けている。

ただ違うのは暗殺ターゲットが二人いることだった。

「……」

真剣に授業を受けている。一応受験生だけあって口出しする生徒はいない。

「……」

俺も同じようにノートを取り授業を受ける。

そしてしばらくたって。

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなり授業が終わる。

……自分が一番嫌いな時間だ。

みんなは自分の弁当やパンを食べているけど

「あれ？羽川くんお弁当は？」

「……」

矢田先輩の質問に俺は指差す。そこには茶色の塊が二つあるだけだった。

「そね、何？」

「熊肉の干し肉です。あまり美味しくないので食べない方がいいですよ。」

俺はため息をつきながら食べる。ちゃんとした干し肉なら美味しいはずなのだが自分のは生きるための干し肉なので味はクソまずい。

俺はまた一つ摘んで食べる。

「……血腥い。」

味、匂い全てにおいて最悪だった。

「えっと、コンビニでお弁当とか買わないの？」

「……買いませんよ。基本土日以外は家から出ないですし。それに装もなしで山から降りることなんて自殺行為なんで。」

前に死神と食事に行った時に分かったのだが

「多分、俺のことと先生のことを知っている人が最近市街地を徘徊してるんですよ。殺し屋が多すぎて油断できないですし。」

「俺よりも貧しい昼飯は初めて見た。」

磯貝先輩が俺の昼飯を見て驚いてる。

「仕方ないですよ。何もしなくても命がお金になるので自由なところはありませんし。」

いつ殺されるか分からない恐怖があることが追われる側の宿命だ。「殺される側で堂々としてるのはあの怪物ぐらいですよ。」

今頃中国ので麻婆豆腐を食べているころだろうあの怪物にため息をついた。

安全の価値

六時間目

死神はずつと授業を続け俺たちはずつとその授業を聞く。

「お題にそつて短歌を作ってみましょう。最後の七文字を触手なりけりで締めて下さい。書けた人は先生のところでまで持って来なさい。できたものから帰つてよし。」

時間は国語でどちらかと言うと高校の授業内容に近い。柵ヶ丘は中高一貫の進学校なので別におかしくはないのだが、それは本校舎の生徒だけだ。このE組はその過程から外され、一般受験での入試になる。だから本当は別の授業を組み入れないといけないのだが、ある条件のためにE組も本校舎の授業ペースでしないといけない。

本当に捨て駒みたいな扱い方だ。

俺はこのクラスを見てそう感じる。

だからこうなることは予想がついていた。

「その前にちよつといいか？」

「はい？なんでしようか羽川くん？」

「いや、ちよつとさつきから気になっていたんだけどさつきから火薬の匂いがして集中できないんだけど。」

「えっ？」

全員が騒めき出す。すると4人が違う反応をしているのに気づく。

「にゅや？」

「たぶんだけど、どこぞの女の子みたいな先輩が、自爆テロをどこぞの不良もどきの3人の先輩に脅されてるのか知らないけど計画してるのかなあって。」

するとクラス全員が女の子みたいな先輩を見る。

「……えつと。なんで？」

「さつきから言ってるだろ。俺は殺される側だから聴覚や嗅覚、視覚は普通の人間より優れてるんだよ。特に銃器の弾丸に含まれる火薬や薬品の匂いには特にだ。それにさつき昼休み前にはなかつた首元に何かかけてあるだろ。多分かけてある物の大きさからおもちやの

手榴弾、嗅覚からかすかに火薬の匂い、そして後ろの3人が女みたいな先輩のことをさつきから見続けている。多分その一番ボスみたいなやつが朝に隠し持っていたから昼休みに呼び出したときに渡したんだろ。よって3人が：確か潮田先輩でしたよね？潮田先輩に多分対先生特殊弾を詰めたおもちゃの手榴弾。まあ威力を火薬で底上げしてあるものを渡して自爆テロを決行するつもりだったんだらうけど。間違っていたなら、その手榴弾の使い道教えてくれませんか？」

クラスの全員が俺の方をみる。それに気にせず俺はカッターをポケットから取り出しその先輩の方にむかい、首元にかけてある糸を切るうとしたが後ろから殺気を感じる。

軽く舌打ちして潮田先輩の首元から手榴弾を取り出し自分の制服で包む。その瞬間、手榴弾が爆発した。

「こうくん!?!渚!?!」

「寺坂。お前!」

「うるせーよ。どうせそのチビも100億の賞金首だろ。そんなやつ殺したって。」

「……だれが死んだって?」

にっこりと笑うとクラス全員がこっちを見る。

「……えっ?」

「潮田先輩怪我はありませんか?」

潮田先輩の方を見ると薄い膜に覆われている。

「なるほど。余計なお世話だったかな?とりあえず、まあチビって言われたことも事実なんで何も言いませんけど、やっと本性を現しましたね。先輩。」

にっこりと笑うと腹が痛む。多分火傷を負ってるはずだ。

「いや〜先生の油断をいつてずとこのタイミングを待っていたんだと思うけど俺に怒りで使ったんだからもうこの暗殺はできないですね。」

「…羽川くん怪我は?」

「大丈夫。制服が焦げて使い物にならなくなっただけくらい。あとは軽い火傷かな。全治一週間もかからないと思う。」

死神の言葉に笑う。実際制服の下に防弾服を着ているので痛みはあるが火傷くらいで済んでいる。

「さつてと、犯人がわかったしちよつと警告でもしとこうかな。潮田先輩。」

「えっ?」

「歯を食いしばってください。」

俺は潮田先輩をその膜の上から蹴飛ばす。すると身軽な潮田先輩は簡単に吹き飛ばされて後ろの壁に衝突した。

「ちよつと羽川くん何を?」

「それ、多分先生の月一で使える脱皮の皮だろ。それが被っている以上核爆弾でも傷一つつかないよ。まあ痛みはあると思うけど自業自得だと思ってください。それで」

俺は全力で走りその勢いのまま首謀者の3人の先輩の腹をぶん殴った。するとうめき声が聞こえてくる。

死神は何も言わない。多分俺にも怒ってるのだろう。でも怒れない。なぜなら俺の境遇を知っているのだから

「とりあえず最初についておくけど別に俺を殺そうとしたことには怒ってないんだよ。まあこんなチビが100億円って言われたらあんな怪物よりも俺を狙って仕方ないだろうしな。ただな、俺が気に食わないのはためーらが他人の安全を簡単に扱ったことだよ。」

俺はうなだれているボスらしき先輩の襟元を掴む

「いいか。俺らみたいな殺し屋のターゲットになるやつらのほとんどは自分が望んでもいないのに力を手に入れ、他人の利益のために殺されるんだ。まあ本当にゲスなやつらはいるけどな。でも殺される側はずつと思ってるんだよ。死にたくないってな。だから力を使い自分の身を守ろうとする。そして、生き延びたらまた狙われる。それが死ぬまでずつと繰り返しされるんだよ。」

俺は殺される立場として何度も死地を繰り返し抜けてきた。その中で殺し屋と話し色んなことを聞いてきた。でも

「だけでも俺も、誰も死にたいと思つたらことないぞ。生きるために自分に力を使わざるを得ないんだよ。どんなに嫌なことでも。」

そして俺はがたいのでかい生徒を睨み。

「いいか。あの先生はいくつか国と条件を結んでいるらしく、生徒には手出しはできないって言うてるから、俺もなるべくは危害を加えない。だけでもお前らの命を守るってことが契約なんだ。だからてめーらが危険に陥った場合その原因は俺が潰す。」

俺先輩を投げる。すると重そうな先輩は簡単に吹っ飛ばされる。いや、多分実際は重いんだろう。

それなのに今の俺には重いという感覚は感じない。

…やっぱ俺はもう人間じゃない

「いいか？やろうと思えば俺はこの国くらいは簡単に潰せるし1年あればこのタコぐらいなら簡単に殺せる。正直、お前らの思っている以上に強いぞ。殺し屋という世界にも、殺される側にしろあのタコよりも今は詳しい。伊達に5年間ずっと逃げ回ってきたわけじゃないんだ。毎日を命がけで生きているんだ。たとえ、知り合いや家族が死んでもな。そんな中で平和な日本で自爆テロを計画して実行しようとする奴がいると、本気でむかつくんだよ。それが自分じゃなくて他人にさせようとするならなおさらだ。」

俺は先輩を睨みつけ

「あんたらは暗殺する以前に命について考えた方がいいと思うぞ。そうしないと将来絶対に後悔する羽目になるしな。もし、あの暗殺方で地球が救われたとしても多分誰もお前らを認めないだろうな。100億も実行した潮田先輩が手に入るだろうしあんたらはクラスメイトに自爆テロをやらせたことで法で裁かれるんじゃないか？」

「……」

「それに、このタコは生徒はと言ってたけど、てめーらの家族や身近な人の安全は保護してなかったぞ。多分あんなやり方で殺そうとたくらんだら…こうなると思いますよ。」

俺はカッターナイフに少しだけ力をいれる。すると粉々に砕け散る。するとひっと恐怖に怯える先輩がいた。

「まあ。最終的にどうなるうが知らないけど。こんなこと二度とすんじゃないぞ。わかったな？」

これは正直脅しに近いが仕方ないだろう。
そうしないとまた同じことを繰り返してしまう。
するとクラス中が黙りこむ。

俺は適当に短歌を書く。一応言ってあった条件は満たしてるので大丈夫だろう。

「んじや。課題終わったから帰る。多分ちゃんとしてるから。」

「ちよつと待ってください。羽川くん。」

「言いたいことなら、うちで聞く。今日の一件はあんたの依頼に反するしな。でもまずは冷静にさせてくれ。でないとあんたを殺してしまう。」

「……」

すると諦めたようにする死神。

「じゃあまた後で。先生」

内心謝りつつ俺はたった一言だけ言って去っていった。

苦しみ

今日も屋根の上で寝転がっていると磯貝先輩たちのグループが死神のところに近寄っている。

多分殺す気なんだろう。

「……でもそんなことじゃ殺せねーぞ。死神は。」

俺が呟くと案の定振りかざされたナイフは避けられている。

「……まあ、こんなもんだろ。」

俺は暗殺を見終えるとまた本に戻る。

俺は最近休み時間はこうしていることが多い。

ずっと変装して古本屋で漫画とラノベを大量に買い込むのが俺の今の生きがいである。

あの事件から俺はボツチに近かった。

まあ、これが普通なんだよな。

追われるものとして一步引いて行動する。

追われるものは極力人と関わらないようにする。

それは当たり前のことである。

死神に感覚が持つて行かれていたが元々は学校では目立たないようにならした。

今回は逆に目立つことをしていたが人から離れられたのでよしだとしてしよう。

でも、やっぱり人の繋がりは羨ましくある。

もし俺もあの事件がなかったのなら

……そんなことを考えるだけ野暮か。

「まあWi-Fiが繋がるようになったからアニメが見られるだけマシか。」

俺はそう呟く。

それ以外は時々LAIMというSNSを開きクラスのチャットを覗くぐらいしか使っていない。

まあ普通だろう。

最近は殺し屋も俺を狙うやつは減っている。

多分死神のおかげだな。

……まあそこは素直にお礼言っとくか。

俺はため息をつく。

まあ、それはそれとして

「スースー。」

この状況どうしよう。

隣ではあかりねえがぐっすり寝ていた。

あの日以来あかりねえは頻繁に話しかけて来るようになった。

今日も同じように話しかけようとして本に逃げるとついて来て余っている本をつまらなそうに読んでいていつのまにか寝てしまった。

休憩時間の間も誰も近づいてこないのにあかりねえだけは話しかけて来ていた。

元々運動神経がよくて登って来るのは簡単だろう。

俺はそれを教室内の俺として答えると少し悲しそうにしているけどメゲずに話しかけてくる。

多分俺に何があつたのか知りたいんだろう。

それを一定の距離感を保つにはかなりの苦痛だった。

辛い。

本当ならもつと話したい。

昔のように遊びたいし、もつと近くにいたい。

だってあかりねえは俺が唯一憧れた人だったから。そして昔のように優しく一途であることがわかってるから。

でもターゲットの俺にとってはもう叶わないことだった。

自分がなんでこの場所にいるのかわからなくなる時がある。

復讐のためなのに、全ては捨て駒だと思っていたのに
辛い

どれだけ殺されそうになってる時よりも辛い

あかりねえのそばで普通に過ごしたい。

青春を送ってみたい。

100億なんてどうでもいい。

地球が滅亡しようがどうでもいい。
それよりも普通の学校に行ってみたい。

俺が無理に中学に通い始めたのはそんな理由だった。

でも結局は狙われ、殺されかけ自由になれる日々を探し生き延びる
日々

もし、神様がいるのなら。それはどんなに残酷なものだろうか
普通に生きて生きたい

頭が悪くなりたい。

先生に怒られ、家族に怒られ、友達と話し、買い食いや遊びに行き
たい。

でも叶わない。

「誰か助けて」

口に漏れてしまう。

しかし誰も助けてくれる人はいない。

頼りたいのに助けてほしいのに

守りたいのにそばにいたいのに

笑いたいの

たったひとつも叶わない。

だから今だけは。

周りには俺に対する殺気も何も無い。

だからこの瞬間だけは。

たった二人きりの空間。

それが居心地が良くて

ずっとこのままでいれたらいいと思った。

「……」

「スースー。」

しばらくこの時間が続くと

「羽川くん。」

下から名前を呼ばれる。見ると鳥間が立っていた。

俺は指をさしあかりねえの方を指をさすと鳥間は手招きする。

仕方ないのでゆっくりとあかりねえを下ろし下に飛び降りる。

「どうしたんですか？」

「……ちよつと大事な話があるんだが、」

「別にここでなら話は聞きますけど。」

大体の話は読めてるけど

「じゃあ。羽川くん、奴を殺してくれないか？」

「嫌だ。」

即答だった。

「……日本政府からの依頼であつてもか。」

「もちろん。つてか日本政府からの依頼だからこそ受けない。」

「……それが地球がなくなるとしても。」

「それはあんたらの都合であつて俺には関係ないだろ。別に地球が滅びようが俺には残りの命が早まっただけだしな。つてか一年間生きれるだけでも幸せだろ。俺からみたら一年なんかすごく長いぞ。」

俺が睨む。一年。されど一年。俺からしたら十分に長い時間だ。

「正直あんたらは俺にとつて捨て駒にしか思つてないんだろ。どうせ日本政府は殺し屋か秘密兵器を用意しているんだろう。まあ俺はその件に関しては個人の意思で妨害するつもりだしな。多分俺も殺す対象になつてるだろうし。」

俺がいうとするとハツとしたようにしている鳥間

「……もし君の安全を保護するといつても。」

「それは殺した後まで継続されるとは限らないし、それは口約束や契約でも守る確証はない。それに最悪、研究室に入れと言われそうだからな。」

「……」

「それにあんたは知らないと思うが、国というものは自分の利益のために裏切り、見捨てるものだ。いつも正しいことをしてる訳じゃない。裏では俺らみたいに追われる奴もいるし、妹みたいに無残に殺されたりする。」

「君の。」

「気持ちなんかわかる訳ないだろ。好きな人を危険だからって知らないふりしたり、普通の生活をできないことがないあんたらが。」

声を低くして言い放つ。いつのまにか叫んでいた。

「ただ口で言えたとしてもどんなことをしても、辛い気持ちと苦しい気持ちなんかわかる訳ないだろ。毒や薬品に注意してコンビニやスーパーが使えなかったり、生きるためにドブ水啜って下痢をおこしても水を補給したことなんか。」

「ただやっても」

「人の苦しみが他人に理解できる訳ないだろ。ただ辛いのか、苦しいのか、悲しいのか、寂しいのかわかる訳がないんだから。家族を財産を、全てを奪われた。そんな奴らを信用できないし憎しみが消えるはずがない。それを地球を救え？ふざけんな！俺が考えたものを勝手に使って、危ないって言ってるのに実験を続け地球が滅びそうだからって頼ってくるのは都合が良すぎるんだよ。」

「羽川くん。そこまでです。」

「するといつのまにかクラスメイトが死神が全員がこつちをみていた。」

「……チツ。じやますんの？」

「冷静になってください。鳥間さんは何も知りません。ただ国から雇われた一人です。」

「……そんなんわかってる。分かってるけど…分かってるけど」

嗚咽が漏れる。

「ころせんせー。羽川くんが言っていたことは本当なの？」

ゆわふわパーマの女の子が質問する。

「それは…」

「鳥間さん、羽川くんはなんで追われているんですか？」

「……」

答えられないだろう。

先生は一度話したことがある。

鳥間は知っていても答えられないのだろう。

「真実なんて残酷でしかない。」

「残酷だから生き延びられた。」

「そうだ、信用できない人の方が多い。」

「……羽川くんはずっと一人でした。」

死神が話す。

「昔の羽川くんのことを知っている人がいます。頭が良く小学校に通う前から高校レベルの問題を解いたと聞いています。なので両親からは学校に行かず家に習い事の教師を雇っていたらしいです。なので学校に行く機会は一度もなかったそうです。」

「えっ?」

「佳奈さんという3つ下の妹がいたそうですが、世間では羽川くんも一緒になつて死んだとされている土砂崩れに巻き込まれて亡くなつたと聞いています。でもそれは本当は違います。羽川くんの妹は、国に殺されました。」

「……っ」

「羽川くんの居場所を吐けと命令した国に拷問を受け4年前に死んだそうです。」

「……俺そこまであんに話してないはずだけど。」

「…君のことについて調べさせてもらいました。」

「そうかよ。」

なるほど。調査済みってことか

「でもそれって憲法違反じゃ。」

「バレなきや罪に問われないんだよ。隠蔽してることなんていくらでもある。俺だって、この教室だってそうだろう。」

「……」

鳥間も俺をみてる。

「正直、私にも考えられないほど多くの死地を乗り越えて来たのでしよう。だから100億という懸賞金がかけられています。殺し屋の多くが羽川くんの暗殺を断っています。多分私も羽川くんのことは殺せません。」

その一言に全員が俺を見る。死神は大げさにいうが多分無理だ。ってかマツハ20にかなう訳ねえだろ。

「羽川くんはそれほどこまでにターゲットとして優れているのです。」

「買いすぎだ。俺はそこまで強くねえよ」

「……いえ。私も殺せませんよ。羽川くんは。」

死神は悲しそうに俺を見る。

「でもいつも君を心配してくれている人はいることは忘れないでください。」

「……わかってる」

その言葉には素直に頷く。

その人が誰なのかももうわかっているから。

翌日のHR前

「……」

「……」

屋根裏で俺はあかりねえと並んで座っているが無言がずっと続いていく。

正直言つて気まずい

「……ねえ、こうちゃん。」

しばらくたつてからあかりねえが話しかけてくる。

「何だ？」

「大丈夫なの？」

「……そうみえるか？」

「……」

首を振るあかりねえ。

「……今日は私を追い返したりしないんだね。」

「……あかりねえだつて泣きそうだな。あかりねえもショックだろ。自分の妹みたいに可愛がっていたから。」

「うん。でも、死んじやつたんでしょ。」

「そうだな。」

「私はいいよ。お姉ちゃんから聞いた時覚悟はしてたから。」

「……嘘つけ。」

あかりねえは顔が青色、悲しみでいっぱいだった。

「……泣いたら。」

「こうちゃんが泣いてないのにな？」

「俺は、全部終わったら泣く。それまでは泣けない。」

「なら私も泣けないよ。」

「……そっか。ありがと」

あかりねえが驚いたようにこつちを見る。

「こうちちゃん？」

「……なんでもない。」

するとキーンコーンカーンコーンとチャイムの音が聞こえる。

「行ってらっしゃい。」

「うん。行ってくる。」

あかりねえは教室に向かうため屋根から飛び降りる。

そしてまたいつもの日常が行われる。

実力

「いくち、にら、さるん、しく」

「うわあ。絶対普通の中学生じゃ見られない光景だな。」

「……羽川は見てるだけだろ。」

俺が苦笑すると前原先輩が言う。

「だって俺はどちらかというど殺される方だからな。それに半分は俺が受け持ちだし。」

「……確かにそうだけだよ。」

「まあ、ナイフがうまく使えるようになったら二刀流とか使えるようになるので結構オススメですよ。それに前原先輩は4股している最低野郎ですけど、運動神経はありますし銃が壊滅的に下手なんでナイフだけに専念した方がいいですよ。」

すると前原先輩が固まる。

「……」

「えっと、羽川？なんでそれを？」

磯貝先輩が聞いてくると

「えっと銃は見てたらわかりますし、女性関係については岡島先輩と磯貝先輩、片岡先輩に話している彼女さんの学校名が違ったので。後もう一人は3年C組の土屋先輩ですので合計4人です。」

「……」

「ついでに本命は磯貝先輩に話していた人だと。」

「…スゲエ。あつてる。」

前原先輩が驚くけど女子からの最低みたいな視線は無視なんだろうか。

あれから、俺に話しかけてくる先輩は増えていった。

一応磯貝先輩などのグループに入ることが多くなった。だけど昔のことは何も聞いてはこない。

聞くのが怖いのか気遣ってくれているのかその両方か。

でもありがたかった。

「……まあ俺も何もしいって訳にも行かないしちよつとしたゲーム

でもしようかな。」

「えっ?」

「えっと、確か今は先生だから烏間先生。模擬戦しませんか?」
するとクラス中が騒ぎ出す。

「……なんでだ?」

「いや、なんか俺だけ見てるって言うのもおかしいしその武器だったら怪我もしない。それに実力を見せるのはうってつけの機会ですし、あんたの実力を少し見せてほしいかなあって。」

「……わかった。君の実力も見てみたいしいだろう。」
すると歓声があがる。

「にゅやーじやあルールはこのインク付きの武器を使って一撃当てられたら勝利。」

「先生ノリノリじゃねーか。まあ、いいけど先生何割の力出している?」

するとみんなが凍りつく。

「……だって柔かったら殺す可能性があるし、強いのは知ってるけど……」

「……本気でやっても構いませんよ。伊達に先生の観察役を勤めてませんので。」

「……へえ〜」

俺は少し息を吐く。烏間先生を見る。
手元にはナイフを握りしめている。

……かなり強いな。

見た目以上の腕前だと俺は判断する。

暗殺には向いてないが銃、体術、ナイフ全てにおいてレベルが高い。
俺は今まで狙われた中で三番目に強いと判断する。

油断はできない。

一気に決める。

「暗殺始め。」

俺は素早く近づき牽制のナイフを一回振る。すると烏間はそれをギリギリで避けナイフを振利かかろうとするのでバックステップで

避けながら一撃目の射程外から外れる。その瞬間振りかかろうとしたナイフを諦め防御に回る烏間。その初動の速さに少し驚く

……なんで普通の人間がナイフを1秒間で5回切りかかれるんだよ。

舌打ちをしてしまう。こいつも化け物すぎるだろ。俺も得意な防御に回るしかない

「……」

「……」

足や腕、目線の向きを見て立ち位置を変え次の攻撃を備えると烏間先生3秒ほどで手を挙げた。

「……降参だ。」

「……賢明です。烏間先生。」

烏間先生の降参宣言に少し苦笑してしまう

「えっ?…どういうこと?…」

みんながポカーンとしていると。

「一切の隙が見当たらないんだ。どこから攻撃してもカウンターでナイフで刺されてしまう。」

「……ええ、羽川くんは防御に優れています。烏間先生の強さを見て攻撃から防御に回ったのでしよう。目線や少しの変化で体制を変えていました。」

「多分ナイフを振る速さは1秒に10回は振れる。どうやっても勝てる見込みがない。」

「……最初の一発かなり手加減したのになんで本当の振る回数わかるんだよ。」

1秒に5回切る速さで切りつけたのにな。

「……でもそんなに手強いのか?100億円の懸賞金をかけられるようでは。」

「ええ。ナイフ術、体術、銃でもそのレベルの人は何人もいますが、本当の凄さは気づかれないことです。」

「……どういふこと?…」

「殺し屋のほとんどは居場所がわかっているのに羽川くんを見つけれ

れないまま暗殺に失敗しています。」

「ステルス能力な。実質は、最初俺が入ってきた時先生も気づかないで教室に入って授業しただろ。自然にいてターゲットだと思わせない。それが種明かし。まあ殺気や匂いに敏感だからすぐに逃げるっていうのもそのひとつだけだな。」

すると全員がはつとする。

「他にもトラップが俺の管轄かな？睡眠取るときには必ず仕掛けるしそれに薬品や医学も詳しい方だな。」

「……烏間先生、羽川くんを舐めない方がいいですよ。単純にあなたよりもいや昔の私よりも強い。頭の良さも知恵も多分私より優れている。それに羽川くんは実力のまだ3割程度しか出してませんよ。」

「……悪いけど。先生。人との勝負にこれ以上力出すつもりはないぞ。つてかあまり使いたくない。」

「知っていますよ。それが君のいいところですから。」

「……えっ?」

「ちよつと待つてよ先生。それつて。」

「今の速さで半分も出してないつて。」

クラスメイトが騒めく。烏間先生は少し考え事をしていた。

「……それに本来は自分のことを守るために使うものだしな。それに自分の大切な人を守るときだけだよ。」

「えっ?」

「……もういいだろ。烏間先生。後お願いします。」

「ああ。」

俺はまた磯貝先輩たちのところに戻る。

もう二度と同じ間違いは繰り返さない。

それは俺と死神が誓い合ったことだった。

大切な人を守ることができなかつた苦しみ。

それは俺たちにしか分からない。

「……先生。死ぬなよ。」

俺にとつてあんたは大切な人の一人なんだから。

参加できないんだ

ブニヨンツ、ブニヨンツ

「さつきからうるさいんだけど。先生。小テスト中だぞ。」

「こ、これは失礼!!」

俺がいうとやめるけど

「何があつたんだ？壁パンばかりして。」

「実はカルマくんが殺せんせーの触手に初めてダメージを与えられたんけど…その後おちよくられて。」

「……納得です。」

矢田先輩の言葉にため息をつく。

「……しかもこの時間もう一度仕掛けるらしいですよ。」

「えっ?」

「まあ、見とけばわかりますよ。」

床には対先生BB弾がまき散らかしてあり、死神は一度敗北しており少し怒りで我を忘れてる。

誘導するなら今のうちだろう

「こら、そこ。大きな声出さない」

「お前が言うな。」

俺が冷静に突っ込む。

「おっ?羽川じゃん。久しぶり。」

「久しぶりです。」

「あれ?知り合いなの?」

「まあ、少し。」

俺が言うのと赤羽先輩がどこからかジェラートを取り出す。

「ごめん。ごめん。殺せんせー。俺もう、終わったからさジェラート食って静かにしてるわ。」

と手にしたものは昨日死神が買ってきたジェラートだった。

うまいな。

甘い物好きの死神にはうってつけのものだろう。

「そっそれは昨日イタリア行って買ったやつ!!」

案の定引つかかる。

「怒りを利用して視界を狭くさせる。暗殺にも逃走のテクニクでも使えるから。」

小声で矢田先輩に解説して指をさし

「単純なことに気づかない。」

「!!」

死神が対先生弾を踏み発砲音が聞こえる。

「はあ全くなさけねえな。あれが俺を追い詰めた殺し屋かよ。」

「えっ?」

「……なんでもないです。」

俺はあっけなくやられてる死神にため息をついた。

「んで、思う存分触手にダメージを受けておちよくられて、ジェラートを食べられ怒りに任せて近寄ろうとしたら、赤羽先輩が下に転がしたBB弾を踏みつけて舐められすぎたつと。」

俺は土下座している死神に向かって、休学していた赤羽先輩にボロボロにやられた姿を見て

「バカなの?」

一言だけ罵倒した

「俺も後半は見てたけどさ、完全に相手のツボに入ってるじゃん。そりやく赤羽先輩の思惑通りになるだろ。」

好きなものも全部知っていたのだろう。手回しをして、自分で策を練り実行する。

「……あの先輩は別格だよ。たぶん賞金が目的じゃなく純粋に教師に恨みを持っている。」

「……」

「それがE組になった理由か知らないけど、本気の殺意がある。」

「ええ。わかってます。」

「……たぶんあの先輩の中では二番目に手強いですよ。」

「にゅや?あれ以上の殺し屋がいるのですか?」

「……一番やばいのは潮田先輩ですよ。あの人殺し屋の素質があるつてどころじゃない。俺と昔のあんた以上に殺し屋の才能がある。開

花したら俺でさえ気づかれないレベルの。」

あのととき火薬の匂いがしたので気付いたが、殺気の気配は全くわからなかった。

「自分では気づいていないけど、殺し屋に向いている。天職といっていいほどにな。」

「……」

「多分あんたを単独で殺せるのはその二人だ。他は正直厳しいと思う。」

俺が言うと死神は顔を覗かせる。

「……なんだよ?」

「いえ。正直なところ、あまり羽川くんがそこまでクラスのみんなのことを見ているとは思いませんでした。」

そんな訳ないじゃねえか

「あの人が残っていた生徒だぞ。それにあいつもいるしな。」

「……茅野さんのことですか?」

「まあな。」

俺が言うと死神はどこか不思議そうにこつちを見る。

「そういえば、茅野さんと羽川くんはどのような関係なんですか?」

「俺が好きで女の子。」

「……えっ?」

「正しくは好きだった女の子かな?まだ逃げ始める前だったから。」

あのころはまわりにいた女の子が少なかったけど、かつこよくて、かわいくて、一途でとても姉思いだった。

「……逃げていたことも全部知ってるんだろ。あんたのことだし。つまりはそういうことだよ。」

「……」

「この話はまた今度してやる。まずは赤羽先輩だ。言いたいことはわかってるんだろ。」

「ええ、これは羽川くんは介入しないってことですね。」

そう今回の件は死神がなんとかしないとイケない。

「ああ。今回の件は先生であるあんたでしか解決できないし、俺は

ちよつと調べないといけないことがあつてな。」

「にゅや?」

「明日調理実習あるだろ。俺料理できないし。」

少し本で予習しとかないと。まあ料理が苦手じゃなくて料理する機会がないからレシピとか調べないと。

「……羽川くんにも弱点があつたんですね。」

「俺結構あるぞ。些細なことが多いけど。なあ昔は泣き虫だったりな。今もそうだけど。」

「……」

「臆病だし、怖がりだし、だから生き残れた。俺がその中の一つでもなかつたならもう死んでいる。今でも警戒は怠ってないしな。でも」

だからこそ俺は

「暗殺教室には参加できないんだ。」

幸せ

「おはよー。こうちゃん。」

いつも通り屋根上に来るあかりねえ。

「よう。」

俺は読みかけのラノベを閉じてあかりねえの方を見る。

「そういえば、昨日のカルマくん凄かったね。」

「ってかああ言う暗殺が基本なんだよ。馬鹿正直な暗殺方があるかよ。」

俺が言うとするときあかりねえはクスリと笑う。

「やっぱり、こうちゃんは厳しいね。」

「……厳しいも何も事実だしな。精神的に追い詰めて殺すんだろ。じっくりじっくり痛めつけて少しずつ追い詰める。殺し方としては間違ってるねえよ。」

殺し方としては正しいだろう。怒りは我を忘れさせることにもつてこいだし。

「でも、無理だろうな。死神は殺せない。」

「えっ?」

「多分今日は終始警戒すると思うしな…。殺せるはずないだろうな。」

元々殺し屋だった死神なら気付いてるだろう
痛めつけられるのが嫌なら回避すること。

たったそれだけで対策は練れるのだ。

「……よかった。」

「…えっ?」

「殺せんせーが死なないでよかった。」

すると安心するあかりねえ。

「あかりねえ?」

「……前にこうちゃんから聞いたこと、殺せんせーから言ってたんだ。

お姉ちゃんと殺せんせーのこと」

「そっか。」

俺は大体気付いてしまった。

「……似てるよな今の死神とあぐりさん。」

「うん。おせっかいなところも優しいところもお姉ちゃんそっくりだね。」

「そりや、死神の先生だからな。教師を受け継いだってことは、死神はあぐりさんの魅力に気づいたんだろ。」

「……ねえ。殺せんせーを誰かが殺した時、こうちゃんはどうするの？」

あかりねえの言葉に俺は少し考える。

「多分だけでも海外に逃げるかな。居場所がバレてるわけだし。」

「……そっか。」

心配してくれているのがよく分かる。でもそれが生き残るたった一つの道。

後一年未満

俺が普通に学校に通える時間だ。

「……」

「……」

無言が続く。気まずいってもんじゃない。

「……嫌だ。」

「……」

あかりねえの言葉に戸惑ってしまう。

聞こえてしまった。

するとあかりねえはこっちを見る。

「……こうちゃんといられるのが後一年だなんて嫌だ。」

今にも泣き出しそうなあかりねえに、俺はどうしていいかわからなくなる。

「……」

目を合わせられない。俺だって嫌に決まってる。

でもお互いに分かっているのだろう

それが叶うことがないってことが。

「ほら、くくくをくくれば。」

「あっ!!本当だ。」

「……すげえ。分かりやすい。」

「こうちゃん凄い!!」

「倉橋先輩。その呼び方恥ずかしいのでやめてください。」

俺の周りではこんな形だった。なぜか先輩に勉強を教えることが多くなり、わかりやすいと評判だった。

「でも、よく分かるね。まだ、習ってないところでしょう?」

「まあ、幼稚園の時に全部解きましたから。」

「……やっぱり羽川くんおかしいよ。」

「……まあ、自覚はしてますが。」

家の事情であったが、よく幼稚園児の時解けたのか今でも不明だった。

「でもこれ殺せんせーより分かりやすいかも。」

「にゅや!」

「しかもノートも分かりやすいし、……羽川コピーとってもいいか?」

「別にいいですけど……木村先輩、ノートは自分でとった方がいいですよ。数学は答えが分かる場所で繰り返し解くことで成績が上がることに繋がるんで。」

「こうちゃん、ここ教えて。」

「……もういいや。えつとここは。」

と教えようとした時死神の触手が伸びる。

「…カルマくん銃を抜いて撃つまでが遅すぎますよ。ヒマだったのでネイルアートを入れとききました。」

「……」

「まあ、そうなるよなあ。」

俺は少しだけ苦笑してしまう。

「やつと目が覚めたらしいな。」

死神も目が覚めたらしく油断もしていない。

簡単に死なれてもらったら困るんだよ。

「……えつとこれはどうすればいいんですか?」

「えつとねこれは。」

四時間目の調理実習は完全にお荷物状態となっていた。

班ごとにするのだが、倉橋先輩と矢田先輩は手際よく進める中、俺は全く調理器具の使い方も何も使えなかった。

しかも矢田先輩に調理器具の使い方を教わりながらやっているの
で完全に足手まといだった。

「すみません。迷惑をかけてしまつて。」

「ううん。大丈夫だよ。でも本当に一人暮らししてるんだよね？いつ
もごはんどろしてるの？」

「えっと、罨で動物を狩って血抜きしたやつを丸焼きにしたり、山菜を
焼いて食べたり、川魚を焼いて食べてますね。」

「……」

クラス中が静寂につつまれる。

鍋からグツグツと煮込む音が大きくなる。

「あれ？おかしなこと言ってますか？」

「えっと、お風呂とかはどうしてるの？」

「基本は隣の銭湯を使ってますけど……」

「…洗濯は？」

「基本コインランドリーですかね。」

「……ねえ。羽川くんの家ってどこ？」

「ありませんけど……。せめていうんだつたらその裏山です。」

すると班の全員が黙り込む。

「……別におかしなことではないと思いますが？ターゲットとしては
家だと逃げ場の確保が難しいので。それにトラップも仕掛けられま
せんし。」

「かわいそう。」

「あの憐れむのだけは本当にやめてください。結構辛いので。」

矢田先輩の言葉に突っ込んでしまう。

「でも、生き残るにはそうするしかないんですから。」

俺はこの瞬間を生きている。

今こうして話をしている。

それだけで生きていることが実感できる。

「今を生きている。俺にとつたらこれが一番の幸せですから。」

「……」

「でも欲張りをいうのなら普通の生活を送りたかったですね。貧乏でもいい。借金があってもいい。俺だって普通に学校行って、友達と話して、勉強して、家に帰って、母さんの手料理を食べて、父さんと遊んだり、怒られたりしたかったです。そして、佳奈が誰かと結婚するのを見届けたかった。でも叶わないことって知ってますから。もうそんな夢は抱くのも間違っていることぐらい分かってます。」

両親は行方不明、佳奈は死んで、俺は政府に狙われている。

「もう、生きるのも辛いのですが。佳奈よりも少しでも長く生きていられることを幸せに思わないと死んだ佳奈に失礼ですから。」

そう。生きているこの時間をどのように使うか。

「だから先輩たちは本当に大切なものを見極めてください。敗北、挫折を皆さんは一度味わっています。理不尽にE組に落とされた人だっていると思います。でも人生は今まで生きた時間よりも長いです。その時間の中で自分にとって大切なものを探し続けて下さい。そして幸せを見つけてください。それはもう俺にも佳奈にも叶わないことだから。」

多分それはどんな些細なことでもいい。

小さな幸せ。

そのありがたみを知っている俺が伝えたかったこと。

人生はまだここからだ。

「羽川くん。違いますよ。君にだって幸せを掴むことができますよ。」

死神は肩を叩いてくる。

「幸せだよ。だって俺にとって生きることが幸せなのだから。」

「……もし私が殺されたら羽川くんはどうするんですか?」

「海外に逃げる。」

「……そのあとは。」

「生きている間ずっと逃げ続けるさ。それがどれだけ辛いことだろうと生きている間は。」

「……でも羽川くんはいつか。」

「死ぬだろうな。」

俺がきっぱり答える。すると死神は戸惑った。

「てか、死にたいんだよ。俺は。逃亡生活なんて苦しいし辛いし嫌なことばっかだし。でも、生きなくちゃいけない。どんだけ辛いことだろうと苦しくても佳奈の分まで生きていかないといけない。」

俺はそれが正しいのかは分からない。でも

「それが俺が決めた人生だから。殺してくれるか寿命が切れるそれか先生が殺せず地球がきえても。俺にとって苦しく辛い。どうせ俺はそれしかできないんだから。」

「……」

「だから、あんたには生きていてほしい、生きて俺を殺して欲しいんだ。地球が滅びるのは一番手っ取り早い死に方だしな。だからあと一年それがあんたの寿命。俺はそれまで生きる。それで死んだらやっとな死ねるし、生きたら悪運が強かったと思っておくさ。」

「君は心配してくれる人がいるとしてもですか？」

「……心配してくれる人がいるからこそ俺は早く死にたいんだよ。」

「……」

「だってこの教室が終わったら俺はまた逃げないといけないし。それにもうその人と会えることは二度とないんだから。」

限界

「……はあ。」

俺はいつも通り屋根の上で寝転がる。
行きたくねえなあ

昨日あんなことあったばかりの教室に行きたくなかった。

あの後、予想通り赤羽先輩も暗殺に失敗したと、潮田先輩がL A I
Mで送ってきた。

それは死神の手柄だろう。俺は何もしていない。
でも、多分死神にも伝わったのだろう。

誰も信用せず。物として人を見ていた俺に呆れてるだろうか？
失望するだろうか

知っているのに答えを濁してしまう。

助けようとするだろうか。

あぐりさんもそうだったから

ちゃんと見てくれる

それだけだ。

いつからこんな生活を送ってきたのだろう。

知っているのに覚えてるのに気持ちが悪くなってくる。

自分の中で拒絶し無意識に助けを求めている。

だから、自分が嫌い。

たった一言言えればいいのに

その一言が言えなくて

自分で自分を傷つける。

そんな俺が嫌いだ。

「……羽川くん。ちよつといいか？」

「……なんですか？」

朝のH R中屋根上にいると烏間先生に話しかけられる。

「……ひどいな。」

「そりゃ。自己嫌悪中ですから。」

「そうか。」

鳥間先生が辛そうにこつちを見る。

「すまない。」

「…は？」

「国も、仕事も関係ない。鳥間惟臣として謝罪させてもらう。すまなかった。」

頭をさげる鳥間先生に少し驚くが

「……今更何言ってるんですか。謝罪も過去のことだし気にしてねえよ。」

本音を言う。

「……それに謝るんだつたらあかりねえに謝れ。あいつもねえさんを国に囚にされた挙句、殺されたんだ。あいつも少なからず、国に恨みを持つているはずだ。」

冷たい言葉に鳥間先生は少し納得がいったように頷く。

「なんだよ。」

「いや。もう少し早く気づいておけばよかった。」

「……」

俺は殺意がないかだけ調べてみると真っ白。本心で話していることが分かった。

「あかりねえはあんたが守ってくれ。俺はあいつを守れる自信がない。」

「……それは君がこの国を去った後もか？」

「もちろん。これはあんたにしか頼めない。俺にも、死神でもな。」

「……君はやっぱり。」

すると何か言いたげだったが

「ああ。分かった。」

あつさり了承してくれた

「……ごめん。本当なら俺が守りたかった。でもいつ殺されても仕方がない。だからあんたにしか頼むしかないんだ。」

「……」

「死神も殺されてしまったら、俺も多分追われて二度と日本に来ることはない。第一俺は日本以外は追われていないしな。」

「……なら、なんで君は日本に戻ってきたんだ。」

鳥間先生の言う通りだ。

日本よりも海外にいた方が安全なのに俺は日本に戻ってきた。

そんなのはわかりきっていた

「あかりねえとめぐりさんに会いたかったから。」

好きな人がどうしているか

自分を弟のように一人の小学生として見てくれた人に会いたかったから

俺が大好きだった二人に会いたかったのだ。

「……だけでも結局めぐりさんにはあえず。あかりねえは一番会いたくない場所で会ってしまった。」

しかも一目見た時にあかりねえは気づいてしまった。

俺が生きていることを

「会いたかったけど、こんなことになるんだったら会いたくなかった。死んだことになってるんだったら戻って来るんじゃないかった。地球を滅びる物を作ってまたあかりねえを悲しませるんだったら俺なんか。」

「……それ以上はダメだ。」

「産まれてこなければよかった。」

俺が鳥間先生に止められることも知っていたが口に出してしまっ

た。
「鳥間先生、俺が生きっているってそんなにダメなことなんですか？何もしないのに、ただ俺は好きなことを調べていただけなのに。危険だと忠告していたのに勝手に人の研究を使われて、国から裏切られ、家族は全員殺された。俺ってなんで死なないといけないんですか？なんで佳奈は、めぐりさんは死なないといけなかったんですか？」

「すまない。」

「……あかりねえにも久しぶりに会えたのに。会えなくなるなんて嫌だよ。」

「……」

「なんで。」

目が熱く水滴が流れる。

「なんで生きているんだろう。」

「……」

目がさめると木の天井が見える。

「……起きましたか？」

そして黄色いタコが目に入る。そっかあんたそんな姿になってたんだな。

「……ここは？」

「学校の職員室です。」

すると鳥間先生が目に入る。

「……そっか。またいつものか。」

「……やっぱり初めてではないんですね。」

「……ああ。」

俺は頷く。

「4年前、佳奈が死んでからは薬を飲まないと定期的に発作が起きている。」

「……すまない。本当にすまない。」

鳥間先生が悪いわけじゃないのに謝って来る。

「……病院には？」

「行ってない。一度睡眠障害で毒を薬と言って渡してきたのがトラウマになって。」

すると二人の動きが止まる。

「……ごめん。黙っていて。」

「先生は君のことを強い人だと思っていました。でも間違っていたんですね。」

「中は普通だよ。もともと体だってそんなに強くないし精神だって強くない。力とかはドーピングで強くなるけど精神的は強くなれない。」

「ドーピングってどう言うことだ？」

「俺が作った薬で筋肉や皮膚などを強化しているんです。異次元みたいな身体能力は模擬戦で戦ったあなたならわかると思います。」

「……。」

鳥間先生は言葉を失いかけている。それも当たり前だろう。

「でも、薬なんて飲むそぶりはしてなかったぞ。」

「……簡単ですよ。効果は永続。飲んだ数だけ強くなれる。……これが俺が追われている理由の一つです。」

「……確かにその薬があれば今の戦争は一気に変わるな。」

「でも大量摂取を続けると血管が血圧に耐えきれなくなつて内出血を起こし最悪死にます。それに、反対の薬がないんで一度飲んでしまえば後には引けません。」

「羽川くんは今20錠近く飲んでいらっしゃるらしいです。彼曰く15錠以上飲めば命の保証はないらしいです。」

「……それはつまり」

「今後その薬を飲む時は羽川くんは死ぬ可能性があります。」

「もしレシピが奪われようならその国は大きな利益を生みます。多分殺し屋を雇うってことは他国に漏れるのを阻止したかっただと思えます。」

すると今の日本の現状に驚いているのだろうか

「……そして、二つ目は反物質生体内によるエネルギーの生成方法。

鳥間先生も死神も知っていると思いますが」

俺は息を吸い

「触手を生み出した最初の人間です。」

悪夢

「……」

自分は時々現れるパニック障害。
泣けないからずっとストレスが溜まっていく。
ターゲットをしていると休まる時間がない。
ずっと命を狙われるという緊張感

そんなの耐えられるはずがなかった。

吐き気、寒気、精神的に不安定な状態が続きその後五時間ほど寝て
しまう。

そしていつも起きてから知ってしまうのだ。

また死ねなかつたんだと。

いつも一ヶ月から二ヶ月の頻度で起こる。

全てを失い、希望も何も見えず

目の先が真っ暗になる。

ドーピング薬はもう使えない。

これ以上飲んでも自殺してしまう。

臆病だから自殺もできない。

ただずっと苦しみ続けるだけ

誰も助けてはくれないし

暗闇の中でたった一人

そして声が聴こえて来る。

誰の声だかわからない。

でも怖い。

それが救いの手なのか何もわからない。でもわからないことが怖い。
い。

「来るな。」

だから拒絶してしまう。

「?#\$#」

「来ないで」

「#\$\$*#\$\$」

「くるなあ!!」

「羽川くん!!」

気がつくとその頃は

「……羽川くん大丈夫? 顔色悪いけど。」

矢田先輩が話しかけて来る。えっと確か烏間先生が担当の体育の授業だったからすることもないので木陰で休んでいたんだっけ。

そしたら眠気が襲ってきて

「……またこの夢か。」

俺は何があつたのか知ってしまう。

「怖い夢でも見たの。」

「……まあ。そんなところですよ。」

いつものことだった。

精神的にも追い詰められている時に起こる悪夢。

これを見るってことは

やっぱり昨日のことが原因か。

「……」

不安そうにこつちを見てくる矢田先輩

少したつてから

「すいません。迷惑をかけてしまつて。」

「ううん。大丈夫。でも殺せんせーを呼んでこようか?」

「…大丈夫です。」

さすがに死神に心配かけるわけにはいかないだろう。

「でも、さっきの羽川くん」

「大丈夫ですよ。いつものことなんで。」

俺が強引に締める。

「それでなんですか?」

「えっ? 授業が終わつたから呼びに来ただけで、うなされていたから。」

「……本当にすいません。」

「謝ることじゃないと思うけど。」

……違う。謝ることなんだ。

ましたから。」

「……ちよつと待つて。睡眠薬つて。」

「睡眠障害は逃亡を始めた時からずっとあつたんですよ。勉強や習い事で夜遅くまでずっと習つていましたから。」

寝たのに疲れが溜まつて過労になり、休むと両親に怒られる。だから休めないし休ませてはくれなかった。

するといつの間にか寝れなくなったり急に倒れて寝てしまうことが多々あつた。

「ストレスばかりかかってきたのでいつの間になれるもんだと思つていたんですが、ダメですね。もう体がどんどん壊れていくのがわかるんですよ。」

「……」

「鳥間先生には言つたと思いますが、多分この病気はもう治りません。一生ついて回ります。だからもういつ死んでもおかしくないんです。」

暗殺者に殺されるか、精神病で自殺か発狂するかどつちにしろもう限界に近い。

それは2年前からもうわかつていた。

最後の何をしたいか考えた結果

大好きだつた二人に会いたいと願う学校に行くことだつた。

「だから生きれても後2〜3年。それが生きていられる最後の時間。」だから無茶言つてこの学校に入学した。

理事長先生も俺の願いを聞き入れてくれたので本当に感謝している。

「そして話せるのは後半年持つかわからない。」

「えっ?」

「最近時々声が出なくなる時がある。それがいつになるかはわからないけど……多分早かつたら明日にも声が出せなくなるかもしれない。」

「……」

「矢田先輩。鳥間先生。狙われるつてこう言うことです。殺されるつ

ていうのは。あの先生がおかしいだけで、俺にとつたら地獄でしかありません。」

苦しくて、悲しくて死ぬ覚悟もしないといけない。

「生きたる時間が本当に俺にとつたら貴重なんです。」

1秒、たった1秒

これはとても重い。

だからこの一年だけはせめて学校を楽しみたい

去年は初めての学校だったからあまり戸惑っていたけど

死神の授業を受ける。

それだけでも…

「矢田先輩、心配してくれてありがとうございます。でももうどうしようもないんですよ。」

バチバチ

焚き火に火花が散る。

…：今日も迷惑かけちゃったな。

俺はため息をつき、いつも通り体調と何があつたのか日記に書く。そして眠りにつく前に睡眠薬を飲む。

睡眠薬も最近は販売に出してたら危ないものだ。

どんどん耐性がついてしまい、少しでも弱かったら眠れない明日殺されるかもしれない

でも起きても同じ苦しみにもがき苦しむんだろう。

次起きるのは二日後。

晩飯も残ってる物を食べ、適当な石に寝転がる。

そして睡眠薬が効き始めるのを感じる。

「……」

こんな生活が死ぬまで続くとなると気が重くなる。

でも次目が覚めた時

俺は元気なふりができると思って。

殺し屋

いつから俺は笑えなくなってしまったのだろうか？

いつから俺は人を信じられなかったか？
人は醜いと思うようになったのはいつからだろう？

そんな日々を暮らしている。

誰からも逃げ距離感を保ち、人を怖がり自分を隠している。

元々復讐のためにきたはずなのに

自分の本心が出てしまっている。

俺は一体何がしたいんだろう？

俺はどうしていけばいいんだろう？

俺は一体何者なんだ？

五月

死神の暗殺期限まで後11か月

今日は新任教師がくるらしい。

まあ十中八九殺し屋だろう。

つまり俺にも安全な場所がなくなった訳だ。

どんどん精神をえぐってくる。

「……学校も安全な場所がないってことか。」

今までは学校にいる時は殺し屋に狙われなかった。

銭湯とか必要最低限の行動をした時もなぜか減っている。

先週までは増えていたはずなのに

なんでだ？

……死神のせいでもない。

多分国家の仕業でもない。

っていうことはまたあいつが仕向けて来るのか。

多分リベンジしにきたんだろう。

俺の情報を探り。

俺の位置を特定し

殺し屋に聞き出すやつは一人しかいない

少しだけため息をつく。

まずは今日やってくる殺し屋だ。

油断しては殺される。

すると黄色いタコみたいな生物と金髪の女の人歩いて来る。

そして脳内の中から一人だけ候補を見つける。

死神にベタベタしたことから、接近または色仕掛けに優れて最近成果を上げているのは

「イリーナ・イエラビッチか。」

「おはよう。羽川くん。」

俺がHR終わって教室に入ると矢田先輩が話しかけてくる。

先週あんなことあったから話しづらいんだけど

「おはようございます。」

「そういえば今日あたらしい先生がきたんだけど。」

「イリーナ・イエラビッチだろ？さつき屋上で見えたし。」

するとクラス全員が反応する。

「羽川知ってるのか？」

「もちろん。殺し屋の多くは頭の中に入ってる。色仕掛けのスペシャリスト。過去に11件の仕事の実績を持つプロの殺し屋。」

その一言に全員が息を飲む。

「ついにきたか殺し屋の先生。」

「……ああ。」

「ついでに色仕掛けを受けた先生どうなっていた？俺はその一点が知りたいんだけど。」

「えっと。普通にデレデレだったよ。」

その一言に少し考える。

へえ、めぐりさんがいるのにデレデレだったのか

あかりねえはあるところがまな板みたいにペタンコだけど、あのめぐりさんはメロンみたいだからな。

そこに惹かれたんだったら

「羽川くん？」

「ちよつとあの発情エロダコちよつくら殴ってくるわ。」

「えっ？」

「矢田。エロダコどこだ？」

「えっ？」

「一時間目始めますよ。席についてください。」
するとちよūdいところに来たのでステルスモードに入る。

「あれ？矢田さん羽川くんは？今日も欠席ですか？」

「誰が欠席だって？エロダコ？」

後ろから回り込み触手を踏み込む

触手は速いだけなので初速がなければ俺でも抑え込むことができる。

「は、羽川くん？な、なんで怒っているんですか？」

「自分で考えろ。さて歯を食いしばれ。」

「……にゅやー!!」

そして5分間殴る蹴るを繰り返す。そして

「……まあ、これくらいでいいか。」

サンドバッグ状態だった死神はもうボロボロだった。

「……………」

クラス中が無言になる。

「……羽川くん何するんですか!!」

「何？エロダコ？お前巨乳だったら誰でもいいの？」

「……えっ？」

「あんた、あの人に対してもそう見てたのかって言いたいんだよ。」
すると死神は黙り込む

「もし、そんな目であの人を好きになつたんなら、あんた本気で殺すよ。」

「ち、違います。羽川くんその殺気抑えてください。」

「……それ本当か？もし嘘ついてるんだったら。」

「本当に違いますから。にゅやく誰か助けてください!!」

「……はあ、ならいいけど。」

俺は触手を踏みつけている足をどかす

「はあ。まったく。発情するんじゃないよ。」

「……………」

俺が言うところクラス全員が俺を見てくる。

「羽川、今殺せんせーのこと殴ったよな？」

「おかしいことじゃないですよね？」

「「いや!!なんでだよ!!」」

「……油断してたし、殺気を完全に隠していたそりや気づきませんよ。つてか賞金と同じくらいなので実力もほぼ同じですし。それにこのエロダコからスピードを抜けばただのタコだし。動けなくしたらいいだけだろ。ほらせんせー授業始めて。」

「は、はい。」

俺が席に着くと何もなかったのように授業が始まった。

俺が昼休憩にいつもの位置でラノベを読んでいると、サッカーをしているクラスメイトと死神の姿がいた。

「……」

正直羨ましいと感じる。

殺される可能性があるのに楽しめる余裕がある。

俺にはないのに

生きるのに必死な俺はため息をつく。するとスマホからバイブが

三回

……奥に3人いるな

多分殺し屋の仲間に近い。

しかも全員男性だろう。

別にほつともいいけど生徒を脅しつける可能性が高い。

よし、殲滅しようか。

するとイリーナが出てきた。

このチャンスは見逃したらダメだろう。

とりあえずミツシヨン開始。

素早く校舎を抜け俺は山道へ向かう。

すると1分もせずその3人は見えてきた

ヒゴ、ウエシマ、テラカド

……別に今の所何もしてないけど眠らせるか
あらゆる気配を消し普通に歩く。

自然に

後ろから

そして特製の薬品をウエシマに吸わせる。
すると効いたのか膝をつくウエシマ

「おい。どうした。」

次にヒゴ、テラカドの口にハンカチに含ませた薬品を吸わせる。

「おやすみ。そしてさようなら。」

俺が言った途端意識を失う。

象でも倒れる眠り薬だ。

今日一日は眠ったままだろう。

これでミツシヨンコンプリート。

縄で3人を縛り片手で持ち上げる。

そしてまた学校に向かう。

全くあいつは何を考えてるのかわからない。

そしてグラウンドにつくと潮田先輩とイリーナがキスをしている。

……

俺はゆっくり後ろから近づき潮田先輩を離れた瞬間に口にハンカチを当てる。

「ふぐ!!」

「気づかなかったね。イリーナ・イエラビツチ。」

口を塞がれもがくイリーナ・イエラビツチ。

「……えっ?」

「羽川くん?」

「潮田先輩大丈夫ですか?」

俺が言うと潮田先輩は頷く。よかった。気絶はしてないらしい。
するとイリーナは前方に倒れる。

多分もう一日は起きてられない。

「……ふう。」

「……羽川、一体何を。」

「気配を感じさせないように近づいて、睡眠薬を吸わせたんだよ。その3人も同じようにな。なんか嫌な予感してたから、監視カメラが

人を見かけたら俺に伝わるようにしてたんだよ。一応理事長からも学校の関係者以外は排除してもいいっていわれてるし。」

するとみんなが納得している。

「でもビッチ姉さんは？」

「一日寝てるけどその程度。俺は殺すことだけは絶対にしないから。」

「……そうなの？」

「殺さないよ。相手が俺を殺しにこようとも、どんだけ悪いことをしようとも殺さない。てか今まででも殺したことは一度もないぞ。」

するとみんながホッとしている。そりやうちのクラスに人を殺したひとがいるのは誰でも嫌だろう。

でもいくら死地に陥ろうが一人も殺したことはないけど

「でも、自分の知らないところで自分の大好きだった人が、政府が悪用した俺の研究で殺されたことはある。」

するとみんながこつちを見る。

「えっ？」

「それは殺したことになるんだったら。俺の技術によって何人もの命がなくなってるさ。俺が知らないところで。」

「……」

それは現実だ。

死神はこのスキルで人を殺している。

別にそれは責めない。

せめてはいけないのだ。

自分が作った触手で人を殺す。

兵器として使われたのだ。

「……」

ダメだ。これ以上は。

「……悪い。忘れてくれ。」

俺は後ろを向ける

話したらダメだ

甘えたらダメだ

逃げることになる

これは俺が受け止めないといけない

「……ちよつとこいつら職員室で烏間先生に届けてくる。」

だから逃げた

この状況から

それが最悪の選択肢だとわかっているのに

生きる

「あくもう。」

さつきからタブレットをバンバンしてるけど

「ププ。」

「イラっ」

「イラついてるなあ。ビッチ姉さん。」

「先輩イラつかせてるんですよ。」

「……羽川くん一応聞くけどなんで？」

「暇つぶし。」

するとプツとクラスの誰かが笑う。

そしたら矢田先輩に睨まれる。

「羽川くん？真剣に答えて。」

「真剣に答えてますよ。…イラつかせることに効果があるんですよ。」

「……どういうこと？」

「赤羽先輩の暗殺覚えてますか？」

「う、うん。たしか殺せんせーにダメージを与えた。」

すると言葉を止める。

「もしかして羽川くん、わざと怒らせているの？」

「もちろんですよ。」

俺が笑う。

「えっと、なんで？」

「殺す方も殺される方も自分のペースを崩したらダメなんですよ。あのババアの取り柄は色気、美貌。でも先生に通用しても俺と烏間先生には通用してないでしょう。ってか元々は男を殺す暗殺者。どうやったら自分を美しく、綺麗に見せるのかも。ババアもその部類に入りますが…暗殺者の中で一番綺麗だったのはマナファイーさんでしたね。」

「マナファイー？」

「ちよつとあんたマナファイーに会ったことあるの？」

ガタツとババアが少したじろぐ。

「ビッチ姉さん？有名な人なの？」

「ビッチ姉さんいうな!!元接近暗殺者の一人で私たちの業界では有名な人よ。暗殺成功人数は150人を越えているわ。」

「「えっ?」」

「はい。つてか基本俺が相手してきた殺し屋は数100人以上暗殺成功したところあるビッグネームばかりですよ。マナフィーさんもその一人です。……つてか子供に色仕掛けに優れている暗殺者を送り込むつて。」

「……マナフィーさんつて暗殺失敗したことが二度しかないつていつてたけど……そのうち一人はあんたなの?」

「二度とも俺ですよ。あの俺の暗殺二度失敗してますから。」

「……」

イリーナは少しありえないような顔をしていた。

「そういうえば、授業しないんだつたら先生と変わつてくれませんか? あいにく自習つていうのも暇なんですよ。」

「はあ?」

「羽川くんは少し黙つてて。でも私たち今年受験なので。」

「あんたたちあの凶悪生物に教わりたいの?」

ゴトつとイリーナはタブレットを置くけど

「それがここじゃあ普通なんですよ。文句があるんだつたら出ていつてくれませんか?」

「……あんたもあの怪物の方なのね。」

「そうですね。政府から追われてるので。」

「へえ。じゃあその落ちこぼれたちの味方なんだ。地球の危機つていうのにガキたちは平和でいいわね。」

あつこいつ簡単に地雷踏み込んだ。

周囲の温度が下がっていく。

……はあ仕方ないか

教室を見回すと冷静な先輩が一人いた。

その先輩は怒つた様子はなく

ただ周りの様子に困っている

……ちよūdいいい機会か

俺はこつそりその先輩に近づくと

「潮田先輩。ここは危険です。少しの間教室から出ましょう。」

「……えっ?」

「鳥間先生がいるのでそこまで。後ろのドアは開けとくので後ろから出てくたさい。」

俺は気配を消しこつそり素早く出ようとす。怒りの矛先はイリーナに向いているから気づかれないうらう。

こつそりと外に出ると鳥間先生は気づいたらしい。

「羽川くんどうした?」

「いや、大事になつてきたから逃げ出してきたんですけど……」

「そうだな。」

すると消しゴムを投げ込まれて一斉に殺気は強くなる。

「こりや、ダメだ。学級崩壊しますよ。」

「……全くなにやつてるんだあいつは。」

「まあ、まだ20歳の殺し屋ならあんなこと起こりますよ。失敗経験が少ないのもそうですが、プロとしてのプライドが邪魔をす。」

「……君はこうなるのがわかつていたのか?」

「はい。わかつてました。」

教室ではついに文房具などが投げ込まれ始めている

「確かにイリーナはプロの殺し屋。だけどプロなだけで一流ではないです。一流の暗殺者ならこんなこと起こりませんので。」

「……」

「たぶんそこを理解してないと、この教室にはいられない。認めたくないですがあなたは立派な教師であり、一流の軍人です。でも、最後の教室にあなたがいてくれてよかつた。最初で最後の先生が死神と鳥間先生で、俺は幸せですよ。」

「まだ始まったばかりなのにいいのか?」

「もう言葉をかけることなんてもう半年もないんですから。いいんですよ。だから先生があつたイリーナを先生にしてやつてくたさい。多分あつた人はこの教室で多くのことを教えてくれます。」

「……そうか、なら出来る限り善処する。」

「相変わらず堅苦しいですね。」

俺は苦笑してしまう。でも照れていることは分かっている。信頼している。烏間先生は俺の中で信頼していいと思ってしまった。すべてを受け入れてくれて羽川康太っていう一人を見てくれる。純粋な優しさが嬉しかった。

でも俺は少しだけ意地悪を言ってみる。

「俺もこの立場じゃなければ暗殺教室に参加できたのかなあ？」

「……」

昼休み

矢田先輩にご飯を誘われたが断りを入れ、俺はいつもの場所で食べようとすると先客がいた。

「死神？」

「羽川くん。」

黄色いタコをした死神が屋根で座っていた。

「はいこれ。」

そこには黒の丸いものが二つ渡される。

「……これ何？」

「……おにぎりというものです。さっき作ってきました。」

「そうなんだ。……で？」

「にゅや？」

「これは俺が食べたらいいの？」

おにぎりは名前は知っていたが俺は食べたことがなかった。

昔は高級店、今は肉や魚主体の生活をしてきた。

一応俺も生徒だ。死神は手出しができないので差し入れたとわかる。

「はい。毒とかは入っていないので。」

「……ならもう。」

俺は少し遠慮しながらもおにぎりを一つだけとる。

「にゅや？もう一つもどうぞ。」

「なら一緒に食ってくれ。一人で食うのも味気ないしな。」

「……矢田さんの誘いを断ったのにはですか？」

「ああ。頼む死神。」

「……わかりました。」

俺の隣に座る死神。

俺は一口おにぎりを食べる。

粘り気があり塩気が含まれた甘味のある米に味付け海苔がしつとり付いている。

「これって関西の方で食べられてるおにぎりだよな。」

「おや？知っていましたか？」

「ああ。少しおにぎりに付いては子供の頃調べたことがあったから。」

一口、一口大事に食べる。

甘くてしょっぱくて美味しい。

そしてしばらく食べ進めると赤い丸いものが置かれてある。

一口食べると口の中が酸味で覆われる。

酸っぱい。

多分これが梅干なんだろう。

「美味しい。」

一言呟く。

「よかったです。もう一つ食べますか？」

「……いい。死神が食べて。」

すると死神は俺の方を見る。

「……何かありましたか？」

「まあな。ただちよつとみんなが羨ましく思っただけ。」

「はい？」

俺はため息をつく

「矢田先輩に自分の本当の姿を見られたんだ。」

「……」

「四月最後の登校日、ちよつと烏間先生の授業が終わった直後にな。」

俺が言うと少しだけ死神が下を向く。

「……最近矢田さんが積極的に話しかけようとしてたのは。」

「多分そのせいだと思う。でも俺は突き放した。」

俺は少しだけため息をつく。

「あのさ。俺は来年以降日本にはいないつもりって言っただろ。最近どんどん嫌になってきているんだ。」

「…」

「最初はあかりねえが離れたくないって言ってきたことがきっかけだった。だから思ってもいない言葉であかりねえを突き放そうとした。」

「やっぱり死にたいだなんて思ってたんですけどね。」

「もちろん。命の重さなんて誰よりも知っている自身がある。その重さがどれだけ大切なのかは知ってるさ。」

でも

「……自分の弱さがこんなことだとは思わなかった。」

「……どう言うことですか？」

「あかりねえがすごく悲しんでたんだ。表情には出してないけど顔が真っ青になってた。俺は人の感情が色でわかるって言っただろ。」

「ええ。確か信用できるのかその顔の色で判断しているんですよ。」

よく覚えてたな。一ヶ月前に話した内容なのに

「……ああ。その中でほとんどの人間は無関心。それか怖がっていることが多かった。今だってクラスの大半が恐怖って感情を抱えている。でもあかりねえは俺のことをずっと心配してくれた。今でも知らないふりをしてるだけでずっと心配してくれる。それは矢田先輩も同じ俺のことを恐れずに心配してくれる。……それが嬉しかった。」

「……」

「家族からも心配されたことがなかった。心配してくれたのは佳奈とあぐりさん。昔よくあかりねえとやんちゃして二人で怒られていたんだ。夜遅くまで遊ぶこともあった。階段で遊んでいたことも。心配したんだよという一言が聞きたくて。」

親から甘えることは幼稚園に入ってから全く出来なくなった。家の世間帯だけ気にして。俺のことは子供じゃなくものとしてみていた。

「自分の弱さ。俺を心配してくれる人を傷つけない。」
すると死神がこつちを見る

「生きたい。この先もずっと生きていたい。二人が幸せになるところを見ていたい。心配してくれた人を守りたい。幸せになりたい。」

俺は叫ぶ。聞いて欲しかった。

「……欲張りだよ。俺。一つも叶えられないのに。欲しいものばかりあって。」

弱い。何一つ手に入らない。

「……生きることしか考えて来なかったのに。」

「羽川くん。」

触手が頭の上に置かれる。

「欲張りなのは悪いことではないです。……君のことは鳥間先生と話しています。」

すると触手で頭を撫でられる。

「でも、君は自分で思ってるよりも強い。…君が生きていた数年間は多分私たちが思っている以上に辛くて厳しいものだったでしょう。でもそれを乗り越えるだけの力がある。多分君なら自分の力を正しいことに使えるでしょう。」

「…」

「私も一度はこの触手の使い方間違えました。今度は二度と間違えません。大切な生徒を守るために。」

「そうしてくれ。俺はあんたを信じるから。」

「はい。」

それならもう少し生きようか。辛いことばかりだけどきつと笑いあえる日が来ると思ってる。

「羽川。」

「……」

俺が教室から出るとイリーナに話しかけられる。

「なんですか？イリーナ。いやビッチ先生って言った方がいいですか？」

さつき普通の授業をして先生として生徒に認められたイリーナを

見る。

「……イリーナでいいわ。少し聞きたいことがあるんだけど。あなた
逃走術にトラップを仕掛けるって鳥間から聞いたのだけど。」

「……逃走術ではないですがトラップは結構仕掛けます。寝るとこの
確保や拠点の確保に防衛施設の周りに仕掛けないといけませんし。」

「それって私でもできるものはある？」

「今すぐには無理です。何度も練習すればいくらかは使えるようになる
なると思いますが。」

「それってどんなもの？」

色仕掛けだったぶん

「寝具にネットトラップを仕掛けたり、服に紛れさせたワイヤート
ラップくらいですかね。manaファイアの方が詳しいと思います
が。」

「……manaファイアと知り合いなの？」

「はい。でも今はアメリカでモデルとして活躍していますが。時々連
絡がきますよ？」

「……そういえばあんたを殺しに行った殺し屋の多くはやめているっ
て鳥間が言っていたけど……あんた一体何してるの？」

イリーナの言葉に少しだけため息をつく。そして俺はイリーナの
方を向き

「……聞きたいですか？政府が裏で何をしてきたか？」

爆弾を落とした。

笑顔

「さて、始めましょうか」

分身した死神を見て全員が思った。

……何を？

「学校の中間テストが近づいてきました。」

「そうそう」

「こんなわけでこの時間は。」

「高速強化テスト勉強をおこないます。」

「……」

そういえば中間テストが近かったな。

俺は少しため息をつく。苦手科目はほとんどないのであまり関係のない。

適当にすませるか。

「羽川くんは矢田さんを教えてください。」

「……」

俺は少し固まる。

「……なんで？」

「羽川くんにはこの程度の問題油断しなければ大丈夫でしょう。最近羽川くんと矢田さんは仲がいいので。」

「……」

確かにそうなのだが。

「矢田先輩は先生じゃなくていいのかわ？」

「えっ？大丈夫だと思う。羽川くん教えるの上手いから。」

「……ならいいけど。俺やりたいことあるんだけど同時進行でいいかわ？」

「やりたいことですか？」

「ああ。少し久しぶりに研究するから。」

すると死神は少し驚いたような顔をしてる。

それもそのはず

「……何をやるつもりですか？」

「大丈夫。今のところは何も作らないから。化学式を弄るだけ。」
「……」

「つてか多分これから必要になる。多分この教室にとつてもこの選択をする人は少なからずいるはずだから。」

すると死神はハツとする。俺が言ったことがわかったのだろう。

「……わかりました。それが君の選択ですね。」

「ああ。俺しかできないし、これは俺のけじめだ。元の薬はできてるんだ。使っちゃったけど。」

「……」

あかりねえに使った薬、あれを改良したら
もしかしたら

「……しかし今回はテスト勉強に集中してくれませんか？」

「……」

しかし答えは否だった。

多分色々な感情があるのだろう。先生としての責任。

色々考えた結果そういう選択になった。

「……」

信用できるし信頼できる。

そんな死神からの言葉だ。

俺は先生として死神を見ていない。

ターゲットとターゲットの関係。同じ立場を体験し、殺し屋とターゲットの関係、あんに殺されそうになったこともある。

あなたはどう思ってるかわからない。だけど俺はできることなら
一年後、二人とも生きていたい。

俺があんたを救いたい。

これが償いになるとは思わない

でももう大切な人を失うのは嫌だ。

自分の技術でもう人を傷つけるのは嫌なんだ。

「……了解。」

だからあんたを信じる。

後一週間じっくり考えろ

自分のやれることを全てこの教室に

「……えつと結局何が言いたかったんだ？」

「磯貝くんはわからないでいいですよ。」

「え、羽川くん。」

「先輩には多分わかりません。」

死神と顔をあわせるとくすりと笑ってしまふ。

するとみんながこつちを見る。

あれ？

「……なんですか？」

「いや、今笑ったよな？」

「……まるで俺が笑わないみたいな。」

「だって羽川が笑ったとこなんて見たことがないぞ。」

岡島先輩が言うともみんなが頷く。

そういえば俺最後に笑ったのっていつだっけ？

……辛いことばかりでずっと苦しんでいた思いしかないな

「まあ。さすがに笑うこともありますよ。」

「そ、そうだよな。ご、ごめん。」

そっか。笑ってたのか。

笑わないのが普通の生活に慣れてたことにすら気づいてなかったんだな。

「そっか。笑ってたのか。」

ちよつとだけ嬉しくなってしまう。

「……羽川くん？」

「なんでもない。」

「……」

死神が笑う。でもわかっていた。こんな幸せが続かないことは。

帰る直前異変に気付く

バタバタと鳥が飛び立ち木がいつもよりしなっている。

「……」

「羽川くんどうしましたか？」

「……そっか。今日は俺か。」

「どうしたの？」

「先生。今すぐ全員を帰らせてくれないか？多分スナイパーが山にいる。持つてるのが実銃だしあんたが狙われてるわけじゃなさそうだな。」

少し目を凝らすと俺の方に銃口が向かっている。そして微かながら赤い髪とスナイパーライフル

「……スカイだな。最近この街に来てることは知ってたけど俺目当てだとは思わなかった。」

「……殺し屋ですか？」

「ああ。日本政府が俺目当てで雇ったな。仕事実績は105人。多分イリーナ・イエラビッチと関連づけるとログログが推薦した可能性が高いな。」

日本政府はロヴロを味方につけたのか。

「仕方ないか。ちよつと制圧してくる。」

「……気をつけて。」

「ああ。」

そっか。久しぶりだから忘れてた。

命懸けでこの教室に参加したんだった。

楽しかったからすっかり忘れてた。

忘れたままなら良かった。

でもあんな分かりやすいやつに殺されるのはごめんだ。

ここじゃ逃げるよりも制圧したほうがいい。

経験からそうわかった。

校舎の裏に周り気配を薄くする。

んじゃ行こうか。

「……羽川くん久しぶりだね。」

戻ってきたら浅野理事長がいた。

「お久しぶりです。理事長先生。」

「……とここでその引きづられてる男性は？」

「俺を狙った殺し屋ですよ。政府への脅しになるので引き渡しましよ
うか？」

「ええ。いいんですか?」

「もちろん。俺が入学した経緯にそういうことも含まれてるしな。ちやんと証拠もあるし。」

スナイパーライフルのバレットM82を渡す。

「……」

「どうした?」

「いえ。体調面は大丈夫ですか?」

俺は少し戸惑ってしまふ。

唯一俺の体調について知っていた人だ。

「なんとも言えないって感じです。去年は一度も狙われませんでした。が今年はどう場所が露見してしまってるので。」

「ではこの学校には今年で最後になりますか?」

「……はい。」

「そうですか。」

少し悲しそうな顔をしている理事長に戸惑う。

「……なにかあつたんですか?」

「いえ。私じゃあ君を守れないのかつて思いました。」

「……気持ちはありがたいですが。正直なところ無理ですね。あんたまで巻き込んでしまふことになってしまふ。」

「そうですか。」

すると悔しき、後悔、寂しさが浅野理事長に含まれる。

顔は笑顔だからこそ

「本当に何があつたんですか?」

心配してしまふ。

悲しそうな笑顔。

孤独でどこか辛そうな笑顔

俺と似ている

俺の絶望していた時と似ている。

「……まあ、話すことはないと思いますが。あなたも俺の恩人の一人です。巻き込まれてほしくありません。生きていて欲しいんです。」

「……まあ私は益のために君を通わせているんですよ。でも、君なら

いい教師になれたと思います。」

最初は嘘で最後のは本当のことだな。

この人は感情が伝わりにくい。

でも確かに明確な強さがあり、それを守り抜くことができている

「……もし君が生きていたらこの学校で先生として働いてくれませんか？」

「懐かしいですね。」

「……ああ。最初にあんたが言ってくれたよな。」

少し笑って

「何年かかるかわからないけどもし生きてたらここで働きますよ。雑用でもなんでも。」

「それは楽しみですね。」

「ああ。」

「生きてください、羽川くん。」

すると浅野理事長は帰っていく。

本当理事長先生には感謝し尽くせないな。

そして教員室に入ると

「死神何やってるの？」

小さな鉄の輪っかに絡まっている死神がいた。

我儘

「さらに頑張つて増えてみました。さあ授業開始です。」
「……増えすぎだろ」

死神は一人につき一体だったのが一人につき五体まで増やせるようになっていた。

「……なんか気合い入りすぎてるね。」

「そうだな。」

普通に勉強していた俺と矢田は試験範囲が終わりちよつと先まで進んでいた。

「……まあ理事長がきてたからなんか言われたんだろ。」

「理事長先生？」

「ああ。先生に挨拶しにきたとか言ってた。」

俺はため息をつく

「でもどんなにスピードがあつても解決できない問題はあるんだよなあ。」

「えっ?」

不思議そうにしている矢田先輩に言う。

「スピードがあつてもそのスピードが出せなかつたら意味がないんだよ。前にも言ったろ。勉強だつてどんなに勉強してもどんだけやつても覚えてなければ意味がないんだ。みんなは 時間Ⅱでできる だと思つてるけど本当は 理解するⅡでできる なんだ。」

「えつと、どういうこと。」

「まあ時間がかかってもいいから理解するまで解けばできるし、理解しようとしなければ解けないんだよ。だから根気強くやってたらいつかはできるつてこと。まあ当たり前のことだけだ。」

「それは羽川くんにも言えることだよね?」

「えっ?」

「だって羽川くん前に死にたいって言つてたでしょ。でも本当に死にたいと思つてるんなら今まで生きてないんじゃない?」

「……そうですね。」

痛いところを突いてきた。矢田先輩は俺の方を見る。

「ねえ。一応私は羽川くんよりも一つ年上なんだよ。だからもし困った時があったら何か言ってるね。私じゃ力不足だと思うけどでも少しは羽川くんの力になりたいから。」

矢田先輩は笑う。なんか

「カッコいい。」

誰かが言う。全くその通りだった

「矢田先輩なんか変わりました？」

はじめてこの教室にいた時は、あまり目立たなくて自己主張も弱めの人だと思ってた。でも今俺の目の前にいる矢田先輩は全く別人だろう。

「うん。そうかも。でも守りたい人ができたからじゃないかな？」

「……そうですか。」

誰かは聞かない方がいいか。

自分のためにも、矢田先輩のためにも

「……それだったらとりあえず数学もうちよつと頑張ってください。学生の本分は勉強ですよ。」

「うん。」

すると矢田先輩はノートに集中する。

……守りたいものか。

俺の守りたいものはなんだろうか？

最初に浮かんできたのは3人

あかりねえ、そして死神。そして矢田先輩

いつの間にか大切な人になっていた。

知ってるこの感情は

あかりねえの時は離れてから気づいてしまった。

海外の船に乗った時。日本から離れる時あかりねえのことを考えると胸が痛んだ。

大切だった。

俺にとって一番大切だった。

守りたかった。

ずっとそばに居たかった。

そのことで最初に泣いた。どれだけ苦しくても我慢して居たのに逃亡生活で初めて泣いた。

正直今でも気持ちは変わらない。

最初はわからなかった。

あかりねえが姿も雰囲気も変わって居たから

でも中身は変わらなかった

だから好きになった

遠ざけて嫌いにならせようとした

近づけないようにした。

結果は一番辛い選択をさせてしまった。

近づかないようになったが時々こつちを見ていた。

心配そうに、でも拒絶されてしまった。

しかもバレていた俺が本心で拒絶していなかったことも

一緒にいたい

その気持ちはお互いにわかっていた

危険が及ぶとわかっていたから

迷惑になるってわかっていただろうから

お互いに離れる選択をとってしまった。

もし俺から歩み寄れば許してくれるだろうか

近づいてもいいだろうか？

めぐりさん、佳奈

俺はこつちでもう少し生きたいです。

好きな人ができたから

守りたい人ができたから

守ってくれる人ができたから

でも、奪った命から背けません

精神的な辛さは消えません

でも親友と好きな人を守るためもう少しだけこつちにいさせてく

ださい。

「……羽川くん。」

「……えっ?」

「えっと、大丈夫?上の空だったけど。」

矢田先輩はこつちを見てくる。

「……すいません。ちよっとお願ひ事をしてました。」

「えっ?」

周りを見ると教室にはあかりねえと矢田先輩しか残っていない。

「……他の先輩と先生は?」

「えっと、殺せんせーが校庭に連れて行ったよ。でも私と茅野ちゃんは大丈夫だつて。二本目の刃がきちんと持っているって。」

「そっか。」

少しだけ考える。どう話そうか。でもやっぱり素直にいった方がいいだろう。それが一番自分の気持ち伝わると思うから。

「あかりねえ、矢田先輩。二人に助けてほしいことがあります。」
すると二人がこつちを見る。

「正直俺は生きることを諦めていました。あかりねえと5年ぶりにあつても、矢田先輩が話しかけてきても一定の距離を保とうとしてました。どうせ自分は死ぬのだから。そんな風に後ろ向きに考えてしまっていました。」

俺は本当に最低な行為をしていた。ずつと目を背けていた。

「本当は怖かった。ずつと生きたいと願っていたのに、後一年しかいられない人と仲良くなるのが。それ以上の関係になるのがずつと怖かったんです。だから一ヶ月ずつと避け続けてきた。俺は心配してくれたのを知っていながら目を背けてきました。この教室に参加したのも、せめても自分が残りわずかしかない命を他の人に命の大切さを、生きるっていうことを教えたかったから。それができればもう悔いはないと思ってました。でもあかりねえは俺と一緒にいたいって言うってくれて。矢田先輩は俺のことを守りたいと言ってくれて。心配してくれて。それが嬉しかった。」

ずつと俺のことは見てくれて。弱いところを受け止めてくれて。

「…嬉しかった。ずつと会いたかった人も一緒の気持ちだったことが。でも知らないふりをして、全部はあかりねえのためになると思っ

ていた。ただのクラスメイトって役を演じるのが。矢田先輩も席が隣の少し変わった人程度に思ってくれたら。でも辛かった。好きな人から逃げたり、好きになっていくことが。そして生きたいって思ってしまった。一緒に学校生活を過ごしたいって。それに守りたいって。正直今まで避けていて、遠ざけようとして本当に何様だよって思っても構いません。でも、俺は二人と一緒に生きて生きたいです。」

涙が流れてくる。苦しくて辛い。どれだけ迷惑をかけたのか。どれだけ心配をかけていたのか分からない。責められても仕方ない。でもただ汚くても、泥水を啜ってるまで生きてきたのも、

「…生きたいです。どんなに辛くてもいいから生きたい。もう二度と同じ間違いだけは繰り返したくない。もう誰も失うのは嫌なんです。だけど、たぶん俺一人じゃ何もどれ一つも叶えられません。だからお願いします。助けてください。」

自然と頭が下がった。でもどうしても欲しかった。

繋がりがかった。

近づきたかった

二人と一緒に歩いて生きたい

たったそれだけだった

「……ずるいよ。」

あかりねえがつぶやく

「……ずるいよ。ずっと避けてたのに、ずっと話しかけないようにしてたのに。今更助けてほしいって。」

……本当にごめん。

「……こうちゃんは分かったんでしょ。ずっと私がこうちゃんのこと好きだったの。」

「うん。知ってた。でもあかりねえも知ってたんだろ。」

「うん。」

何がとは言わなかった。自分でも最低だとは思っていたから

「……謝るのは私のほうだよ。ずっと我儘ばかり言っけこうちゃんを困らせて。でも結局は付き合ってくれる。そんなこうちゃんが好き

だった。忘れようとした。でも忘れなくなかった。会いたかった。ずっと会いたかった。」

「ごめん。」

「謝らないで。知ってるから。」

「……ねえ。二人はどう言う関係なの?」

「大切な人です。矢田先輩には話しておかないといけません。全てのことを。」

俺は少し前を向く。

「雪村あかり。それが本当の名前。元3年E組のめぐりさんの妹です。」

「……えっ?」

もしかしたら辛い思いをするかもしれない。でも

「ここからは多分聞いていい思いはしないです。でも事実です。でも聞いてほしい。この教室が始まった経緯をそして俺が追われることになった理由も。」

すると矢田先輩は息を飲む。

「すいません。わがままで。でもまだ矢田先輩は引き返すことができません。これ以上踏み込んだらもうこの教室に参加できないかもしれません。返事は今すぐじゃなくても」

「教えて。」

言い終わる前に矢田先輩が呟く

「……えっ?」

「いいの。私は全部知りたい。君がどんなことにあつたのか。どんなことをしたのか。多分私じゃ全部は理解はできないと思う。でも聞きたい。少しでもいいから君のことを知りたい。だから聞かせて羽川くん。」

胸が熱くなる。矢田先輩はまだ出会って一ヶ月。たった一ヶ月。

本当に無茶苦茶なことを言っていると思ってる

普通なら信じられないこと

俺じゃ絶対に信じられなかっただろう

でも信じてくれた

俺が言ったことを受け止めてくれた
だから俺も信じよう

俺のことを、全部話そう

嫌われてもいい

甘えてることも分かってる

わがまま言ってることも分かってる

でも真実を話したい

自分のことを知ってほしい

だからこう言う時は

「ありがとうございませう。信じてくれて。」

ちゃんとお礼を言おう。

中間テスト

テスト当日

「……本校舎とか久しぶりだなあ。」

「そういえば集会には羽川くんは来ていなかったよね。」

「だって面倒くさいし。サボっても罰食らっても痛くないし。」

「こうちゃん。サボりつながりでカルマくんと仲良くなっただよ
ね。」

俺たちは本校舎に行く道を歩いていた。でもいつもとは違うのは
3人で歩いていることだった。

「……」

「どうしたの？」

「いや。見られてるなあって。」

周りの人からの視線が痛い。ってか

「これはどう見られてるんだろうなあ？」

「……普通に友達通しじゃないかなあ。」

「いや。おかしいでしょ。なんで二人に手を繋がれて行かないといけ
ないんですか？」

左手にはあかりねえ右手には矢田先輩が手を繋いで来ていた。

「あはは。」

「茅野先輩も笑ってないでなんとか言ってください。」

「別にいいじゃん。」

「よくねーよ。」

でも昔あぐりさんとあかりねえと一緒によく遊園地や動物園に
いったよな。

すごく昔のように感じる。

「……でも昔こうちゃんとお姉ちゃんできうやうて遊びに行つたよ
ね。」

「……なんで同じタイミングで思い出すんだよ。」

あの時はあかりねえがやいやい言つてたけど今思い返してみたら
あぐりさんは気を利かせてくれて俺とあかりねえを隣にしていたんだ

よなあ。

「とりあえず離れて。真面目にあのエロダコに見つかったらめんどくさいことになるから。」

「え〜」

「まあ仕方ないよカエデちゃん。だって今日の試験次第では殺せんせーが出ていちやうんでしょ?」

「……確かクラス全員学年50位以内だったよな。俺と茅野先輩、赤羽先輩は100%入るけど他のみんなは微妙だろうな。矢田先輩も正直ちゃんと教えられてるか。」

「大丈夫だよ。羽川くんの教え方わかりやすかったし。」

「まあ、昨日もこうちゃんにつきっきりで教えてもらったし大丈夫だよ。」

「……おかげで思った以上に疲れたけどな。なんで女子の家に泊まってるまで教えないといけないんだよ。」

「……まあよかったじゃん。お母さんとお父さんが出払っていて。」

「それ以前の問題じゃないのか?」

俺はため息をつく。

「とりあえずどっちにしろ今日のテストで決まるんじゃないのか。」

「……俺も今回はまともに受けるか。」

「……そういえば羽川くんはどこでテスト受けるの?」

「理事長室。」

「……大丈夫なの?」

「たぶんな。」

「……でもいいの?私にだけ羽川くとカエデちゃんの過去を教えてください。」

するとあたりねえと目を見合わせる。

結局全員が50位以内で入ることを条件に出された矢田先輩はテストが終わった後教えてほしいと答えた。

「……本当なら全員が知らないといけないことです。でも、話せないのは自分の心の整理ができていないからだと思います。それに多分みんなはこのことを受け止められないと思います。あたりねえにも

隠していることもありますし。」

「……正直あれは私もきつかったからカエデちゃんは覚悟しといたほうがいいと思う。」

死神でさえ引いてたし烏間先生はかなりショックをうけていたからな。

「多分二人のことは何も知らないけど。私でよかったら相談にのるか。」

「……巨乳だけど惚れざるを得ない。」

「お前相変わらず幼児体型だもんな。」

「こうちゃん!!」

「わりいわりい。」

「クスクス」

「あれ？茅野と矢田じゃん。」

「おはよう。矢田、茅野。」

「あつ？磯貝さんと前原くんおはよう。」

「おはよう。二人とも。」

「珍しいな。二人で登校か？」

「それに男連れ？やるじゃん」

「……やっぱりそんなに印象変わるのかなあ？」

「……えっ？もしかして羽川？」

ウィッグと伊達眼鏡つけたただけなんだけど全く別人として扱われるんだけど。

「羽川くん準備はいいかい？」

「いつでも」

「じゃあ開始。」

俺は解き始める。結構難しそうだが俺にとってはかなり昔に解いたのを思い出すだけなので一回思い出せたら後はスラスラ解ける。英語はアメリカに身を潜めたり殺し屋と話したりするとき覚えたし数学、化学に限ったら自分の得意分野だ。そして解き始めてから20分ほどで全教科のテスト問題を解き終わる。

「……」

「大丈夫。全問正解だよ。」

理事長先生の言葉にホッとする。

ペンを置き息を吐く

「相変わらず君は素晴らしい。」

「そりやどーも。」

テストに浅野理事長は丸をつけて行く

「でもこれはさすがにまずいでしょ。試験範囲と全く違うじゃねーか」

俺が解いていてすぐに気づいた

全くやってないところだと。

「よく見てください羽川くん。試験範囲は二日前に追加されただけですよ。ちゃんと本校舎の生徒には私が教えましたし。」

「……へえく。」

「なんですか?」

「いや。案外教師としての腕を勝っているんだなって思ってた。」

俺は少しだけ笑う。

「俺だったら復習だからって前回のテストの応用問題をだしてあんたは次の期末まで待機していたな。」

「……」

「そうした方が確実に2回A組や本校舎組が勝てる。そして2学期のプレッシャーもかけられる。」

浅野理事長は凄腕の教師だ。なんでもできるが。直前の勝負に凝りすぎて次回のことを考えてない。

「……本当に君はすごい。私の足りないところは全部持つてる。」

「そりやどーも。」

「確かにそれでもよかったかもね。でも確実に勝てるとは言い切れない。」

「まあ、そうだろうな。でも今回こんな問題にしたら次回が苦しくなるだけだ。それなら美味しい蜜を吸わせておいて最後に逆襲したほうが面白いだろ。」

浅野理事長はキョトンとする。

「それに今のやり方だったらいつかは破産するどこかではたんする。強者が強者でいられるのが難しいってあんたならわかるんじゃないの?」

「……」

「速さは完璧な教師も、殺し屋からどれだけ逃げられた実績のある生徒も弱点は必ず存在する。絶対完璧なんてないんだから。完璧に見せるしかない。ただだけ弱いことも隠し続けるしかない。あんたの弱さはそのことがわかってないんだ。理解してるつもりでも、理解できていない。」

「……私にここまで言った生徒は初めてですよ。」

「まあ理事長に刃向かう生徒いや先生でもないだろうな。でも」

「だからこそ面白い。」

浅野理事長に先に言われてしまう

「でしょう?」

「正解です。あなたと俺は敵同士だからこそ面白い。そして強くなれる。違いますか?」

「……味方通しでも面白いとは思いますが。」

「そうかもな。でも今の関係も嫌いじゃないだろ。」

「そうですね。」

浅野理事長が笑う。

「まあ。こういった会話が楽しいから時々遊びに来るんだよなあ。」

「私も嫌いじゃないですが……だからこそ君には生きてもらいたいですよ。」

「まあ善処する。」

「そこで素直にわかりましたって言わないところが羽川くんらしいですね。」

「そうだな。」

でも生きたいとは思うようになった。

生きたいと思えるようになった教室で

少し恩返しをすることにしますか。

「……」

教室内が静寂に包まれている。
それもそのはず。

中間テストの結果は惨敗だったからだ。
俺はため息をつく。

やっぱり妨害が効いた。その一言。

「……見事にやられたね。」

「……」

「まあ、元々あんたが入ってきてから理事長先生は気づいてた。このクラスが変わってきてることに。それに理事長先生の言うことだって正直正論だ。追いつけなくて必要ときだってあるし、試験範囲が変わることも事例があった。」

「羽川くん何が言いたいんですか？」

「……あんたはこの学校を、理事長を舐めてたんだ。甘く見すぎいた。違うか？」

「……」

反論も言い訳もしてこない。

「無言は肯定とみなすぞ。普通敵として同程度だと思っていたんじゃないやねーの？ 違う。スペックは確かにあんたの方が上だ。でも実績と経歴は明らかにあっちの方が上だった。総合力であんたは負けてたんだ。」

先生として、まだ始めて数ヶ月

「お前はなんで理事長に勝てると思っていたんだ？ あんたは教師という仕事を舐めすぎだよ。スピードさえあれば、触手さえあればこのシステムに勝てると思ったのか？」

「羽川！」

「事実だろ。事実でその結果がこれだよ。全ては結果が全てだ。どれだけ汚いことをしようが、卑怯なことをしようが全てはこの5枚の紙切れ。たった五時間で決まるんだ。それであんたは負けた。よかつたな。これがテストで。自分のことじゃなくて。もし見限った相手が暗殺者だったら。あんた死んでるぞ。」

ギリギリと歯ぎしりの音が聞こえる。悔しいだろう。そうその悔

しさを次に活かせばいいんだよ。

「……まあ、説教はこれくらいにして逃げるのも立ち去るのもてめえの勝手だけだよ。まだやることは残ってるからそれが終わってからにしてくれるか?」

「やることは?」

「……頑張ったやつもいるから褒めてやれよ。赤羽先輩と茅野先輩の点数を見てみたら。」

「……はあ。なんか羽川に全て計算されてるようで嫌だけど。」

赤羽先輩とあかりねえがテストの答案を持ってくる。

赤羽業 合計点数 494点 学年5位

茅野カエデ 合計点数 445点 学年25位

「うお…すげえ。」

「ついでに矢田先輩も」

「うん。羽川くんもでしょ」

羽川康太 合計点数 500点 学年1位

矢田桃花 合計点数 435点 学年29位

「「はあ?」」

「どう。ちゃんとあんな不利な中でもクリアしたやつはいるんだよ。」

「俺の成績に合わせてさあんたが余計な範囲まで教えたからだよ。」

「私もそんな感じかな?」

「矢田先輩も基礎がほとんどできてたから万が一のためにやってもらってたんだよ。さすがにこんなに増やしてくるとは思わなかったけど。」

「でも羽川くん全部満点だよね。」

「だから幼少期のときにやった問題なんか油断しなきゃまちがえねえよ。」

俺はため息をつく

「……それで俺はまあいいとしてこんな不利な状況でもちゃんと条件をクリアした三人。それに得意教科に限った話Aクラス並のテスト結果のとったやつだっている。それに去年のEクラスの平均より40点ほど高くなっている。……それがあんたの実績だよ。」

「それだけの実績があつて、全員が50位に入らなかつたつて言い訳つけてここからシッポ巻いて逃げちやうの？それつて結局さあ殺されるのが怖いだけじゃないの。」

赤羽先輩が死神に挑発する。するとそれをいい機会だと知った言いたいことは言つたしもういいだろう。

俺は自分の席に戻る。

自分は最低であつてもいい。

卑屈で最低だけど

理解してくれる人がいれば

それを認める人がいればそれでいいじゃないか

敗北は糧になる

失敗は成功の元

よくそういうじゃないか。

俺だつて間違える。

でもあんたも俺も見してくれる人はいるんだぞ。

間違つてたらそれを指摘する仲間がいる。

自分だけで抱え込むな

俺だつてそれが最良の選択肢だと思つていた。

でも違つたんだ

抱え込んだから、相談できなかつたから

最悪の結果になつた

辛いことがあつたなら誰かに聞いてもらう。

いい結果を得たんだつたら褒めてあげる。

それが俺が求めていたものだから

あきらめたら何も手に入らない

なんでそんな単純なことを忘れてたんだろう

少し優しくされただけで好きになつたり、単純なことを忘れてたり

そんなちよろい俺がなんで考えていたのだろうか

そうだ簡単な話だ。

怖いなら怖い。

そういえばよかつた。

そうだ。頼って知り合いを傷つけるのが怖かった。
自分が傷ついている姿を見られるのが嫌だったんだ。
あんたもそうだろう。

でも逃げたらダメなんだ。

見ろよ。死神。

このクラスが変わりつつある。

最初は暗かったのがどんどん明るくなっていく。

俺だって少しどころかかなり変わった。

でも、いつかは俺の過去にもあんたの過去を話さないといけない時がある。

その時

このクラスは一つでいられるのか？

マンシヨン

「羽川くん。荷物これだけなの？」

「あっはい。最低限度のもの以外は全部置いてきました」

「こうちゃん。こっち手伝って。」

「あかりねえの荷物を持つてるんだけど。死神に頼め。」

「なんでですか!!」

「誰のせいであんなったと思ってるんだよ。さっさと働け。」

「にゅー。」

今、予定では矢田先輩の家で全ての真相について話すはずだったのだが何故か普通のマンシヨンに自分の荷物を入れていた。

「なんでこんなことになったんだろ。」

こうなつた経緯は約三時間前に戻る。

「はあ。今日も殺せなかったか。」

「仕方ないだろ。速すぎるし。」

「あはは。やっぱり暗殺のことばかりだね。」

あかりねえが珍しく俺の机にくる。

「どうした？」

「羽川くんは修学旅行に行けるの？」

「いけるってさ。一応お金も払ってるし。」

「それなら、同じ班にならないかな？」

「……えっ？」

「えっと、ダメかな？」

同じ班か。でも

「俺、矢田先輩に先誘われてるんだよ。班は決まってるけど多分磯貝先輩たちとなるだろうし。」

「あっ。そうなんだ。」

「……でも、一人多いしそっちにいくかもしれない。こっち側八人いるし。」

「羽川くんはいるか？」

鳥間先生が呼んでいる。

「なんですか？」

「ちよつとこの施設を授業に取り入れたいんだが。」

「もうちよつと受け身をしっかりと習ってからの方がいいと思います。ロープ30mは落下してるさい打ち所悪いと死にますし。それに取り入れるんだつたら少し感覚を開けた方が安全面には。」

「ちよつと羽川はいる？」

するとイリーナが呼んでる。

「イリーナ少し待ってくれませんか？後から確認しますので。」

「いいけど。何してるわけ？」

「ああ、鳥間先生と一緒に訓練施設の安全性を見てるんですよ。一応実家建設業でしたし。」

「へえ。」

「うわゝ興味なさそう。」

「とりあえず。ここは。」

「羽川くんはいますか？」

すると全速力で走ってくる死神がいた。

「なんですか？テスト終わったばかりなのになんか忙しいんですが。」

「す、すみません。あと鳥間先生と矢田さんも来てください。」

「なんだ？」

「……詳しいことは教員室で話しますので。」

「ここじゃ話せないの？」

「……ちよつと羽川くんのこと話しておきたいことがあります。」

俺のことで矢田先輩も呼ばれるなんてどう言うことだ？

「……ああそう言うことか。」

しかしすぐに納得できた。矢田先輩の方を見ると頷いている。

パニック障害についてだ

「……イリーナ。明日見ますので今日は失礼します。」

「えっ？ちよつと。」

俺はスマホを取り出しあかりねえに後から話すって連絡する。

するとスマホを見たあかりねえはそれを見て驚いたようにしてた

がその後頷いた。

教員室に入ると緑茶とお茶請けの和菓子が置かれている。

「……長くなるのか？」

「はい。少し矢田さんにも協力してほしいので。」

「協力ってどういうこと？」

すると矢田先輩と鳥間先生。そして呼んでいないイリーナが入って来る。

「……これで全員ですね。ですが」

「イリーナは呼んでないだが。」

「何よ。私が聞いたらダメって言うの？」

「……正直殺し屋には聞いて欲しくありません。自分の弱点について話すことになるので。」

「はあ？」

「すみません。出ていってください。まだイリーナのことは信じきれないのです。」

「……」

イリーナは不満そうに見ているが仕方ない。

正直俺は信用できる人だけにしか話したくない。

「……イリーナ。すまないがこれは本当に羽川くん自身の命に関わることだ。俺もこの案件については防衛省ではなく個人的に彼に協力している。」

「……わかったわ。つまり聞かせられないことなの？」

「ああ。」

「……すみません」

「謝ることないわ。でももし私が信用できると思ってくれたとき教えてくれないかしら。」

イリーナが言う。

「そうします。」

「そう。なら、桃花。大切な人ならきちんと守ってあげなさい。」

するとイリーナは教室のドアを開けて出ていく。

「……」

「ニヤニヤしてないで話してくれないか？」

「はい。羽川くんのことなんですけど思っていたよりも軽いです。」

「二は（えっ）？」

死神の言葉に少し呆気にとられる。

「軽いうつ状態になってるだけで後ろ向きになってるだけです。ちゃんと治療を受ければ治ります。」

「本当ー殺せんせー。」

「はい。」

「……治療をうければか。」

「……」

鳥間先生の言葉に黙り込んでしまう。

「えっ？」

「病院に行かないといけないんだよな。」

すると死神が黙り込む。

「……」

「ちよつと待つて。病院に通えば治るんだよね。」

「……矢田先輩俺は病院で一度殺されかけています。」

「……えっ？」

「薬は最初は普通の睡眠薬でしたが。一月ぐらい通った後睡眠薬のイソミタールを渡されました。副作用が強いので普通の病院では軽度の睡眠障害ではまず渡されません。つまり医療としてではなく殺すつもりで。」

「……ついでにその病院は？」

鳥間先生が聞いてくる。

「潰れました。どうやら不祥事で病院が潰れかけていたらしく。殺し屋に共同暗殺を持ちかけられていたらしいです。」

「……でも日本じゃ。」

「日本政府に狙われているのですか？」

すると矢田先輩が黙り込む。

「あ、ごめんなさい。矢田先輩を攻めてしまつて。矢田先輩が悪いわけじゃ」

「ううん。こつちこそごめん。羽川くんのこと。」

「……しかしこのままでは悪化をたどる一方です。なので学校以外の間は私が羽川くんの面倒を見ようと思います。」

「えっ?」

「羽川くんの作った罫はほぼ完璧っていうほどの出来です。誰にも近づけないでしょう。私以外には。」

……ほう

「……なんかムカつくけど。」

「でも事実でしょう。」

「……」

「なので私も一緒に住めばもし暴れても抑えられますし何よりも私も安全性を確保できる。一石二鳥です。」

「……なんかムカつくけど俺はいいけど。」

「……確かに羽川くんの安全性は確保できるが……」

「……でも今考えられる中では一番いいでしょう。」

するとしばらく考えてから

「わかった。」

「それで矢田さんは羽川くんの監視役をしてくれませんか? なにかあったらすぐ私が駆けつけられるように」

「……うんいいけど。」

「……とりあえず今日から拠点にあんたが住むってことでいいな。」

「はい。」

「なら、わかった。俺は今日会議があるから先に戻るぞ。」

「さようなら。烏間先生。」

「ああ。」

烏間先生が教室からでていく。

それを教室から見送ると死神に聞いただいたいことがあった。

「……どこからだ?」

「……えっ?」

「……盗聴器だろ。小型の。」

俺が言うと死神は頷く。

「ええ。多分放課後につけられたのでしよう。」

「まああんな嘘つかれたらわかるよな。」

「嘘？」

「ああ。先生は必ずっていいほど俺の仕掛けた罠に引っかかるんだよ。ってか絶対に普通の道じやいけないようになってる。隙を全く与えずに蟻一匹も入れないような地下道通らないといけないし。」

「ちよつと待つてくださいい羽川くんそれ飛んできたらいっていったじやあないですか？」

「……だから前に鳥を捕まえる用の罠に引っかかっていたのか。それでどこから。最初からではないんだろ。」

「……私と一緒に羽川くんが住むってところからです。」

「……それは軽い鬱ってことには変わりはないのか」

「……そっか。よかった。」

「えっ？」

「軽い鬱なら治る可能性があるんだろ。……少し安心したよ。」

「まだ、生きていられる。そのことがとてもうれしく感じる。」

「……羽川くん変わりましたね。」

「……そりゃ女子から守りたいって言われて簡単に死ねるかよ。しかもビッチ先生のさっきの言葉聞く限り鈍感じやないから流石に矢田先輩の気持ちに気づいたし。」

「えっ？」

「驚かれてるけど」

「気づいてなかったとでも思ってるんですか？あかりねえとやけに張り合っていました。まあ後からその話についてはちゃんとしませうけど……。まあ、俺にとっても先輩は特別な人の一人なんで嬉しいんです。」

「それって。」

「明るいや顔してる矢田先輩。あってるんだけどさすがにこっちも恥ずかしいんだが。」

「まあその話は後にして。なら、俺が住む場所は？って矢田先輩をよ

んだってことはそういうことだよな。」

「……えっ？もしかして殺せんせー。」

「……はい。羽川くんを卒業まで匿ってくれませんか？」

　　だろうな。相変わらず結構危険な賭けに出たな。

「候補は2つあったはずだ。なんで矢田先輩を選んだんだ？」

「……ふたっ？」

「あかりねえの家だよ。俺が信頼している二人だから自然とその二つに絞られるんだよ」

「……羽川くん。もしかして矢田さんに私たちの過去について話したんですか？」

　　死神は俺に聞いてくる。

「いや。今日話すつもりだったんだよ。つてか俺と関わっていくのに避けては通れないだろ。あんたと俺がどんな関係で…俺が何を作ったのかは。」

「……そうですね。でも茅野さんの家はあり得ませんよ。」

「……なんでだ？」

「あぐりさんの家だからです。」

　　意味が分からない。

「なんであぐりさんの家ならダメなんだ？」

「……もしかして知らないんですか？」

「なにを？」

「…あぐりさんが柳沢の婚約者だったこと。」

　　一瞬思考が止まる。

　　信じられなかった。

「……それ、本当か？」

「もしかして雪村製薬が営業破綻になったことも。」

「……知らない。つてか俺アメリカに亡命したから日本の情報がほとんど入ってきてないんだよ。」

「そうですね。でも今の状態だと羽川くんだと。」

「会わない方がいいな。もしあつたら抑えが効かなくなりそうだし」
　　殺意が湧いてくる。

そんな屑は真面目に殺したくなる

「……」

「あの矢田さんが震えてるので殺意をしまってください。」

「あ、悪い怖がらせちゃったか？」

「う、うん。」

「……」

「……でも俺のことバレたら色々まずくないか？ 矢田先輩の安全は保証できないし最悪矢田先輩の家族にも。」

「あつー！」

「……こいつ

「考えてなかったの？」

矢田先輩の言葉に頷く死神

「……俺が言える立場じゃないけどそれは…ひでえな。」

「最低。」

「……すみません。」

つてか

「……これ絶対どちらかの危険を侵さないといけないんだよな。 矢田

先輩か俺か。」

「う、うん。でも烏間先生に言ったことは。」

「二人合わせて200億の賞金首だぞ。最悪核爆弾落とされて俺だけ死ぬだろ。こいつは逃げられるけど。」

「羽川くんも逃げられそうな」

「先生」

「すみませんでした!!」

流石にキレているらしく矢田先輩も先生のことを睨みつける。

「あくどうすんだよ。流石に手詰まりにもいいところだぞ。こればかりは烏間先生もイリーナも頼れないし。」

「……どうするの？」

「少し考える。あかりねえにも事情聞かせて。……いや、イリーナにも事情を話そうこれはさすがに俺らでも無理だ。さすがに追い詰められてるのに誰構わず。」

……さてよ

「……いた。あの人なら。」

「……えっ？」

「ちよつと連絡する。多分助けになってくれるはず。リスクも大きいと思うけど。なんとかなるはず。」

「……えつと誰にですか」

「浅野先生。」

すると俺はスマホを取り出す。

あの人ならきつといい案を出してくれるはずだ。

「羽川くん荷物は入れ終わりましたか？」

理事長先生がこっちにくる。

「ええ。流石に助かりました。あのバカがやらかしまして。生徒の安全を考えてくれたのはいいんですが、他のことに目が回ってなく。」

「本来なら解雇すべしなんでしょうが。」

「いた方が国から情報を得れるので一年間の減給ぐらいでいいんじゃないでしょうか。それに俺でもお金儲けできるじゃないですか。」

「そうですね。使えるものはなんでも使いますし、今回はちゃんと羽川くんからちゃんと謝礼も受け取りましたので不問とさせていただきます。」

「そうしてください。」

でも、

「こないいいとこ使わせてもらっていいんですか？……ここ都内の一等地です。さつき確認したんですが防音や防犯施設もしっかりしてる。しかも国が対応できない有名人までいるじゃないですか？」

「ええ。ですが君にはちょうどいいと思ったのですが……なぜ彼女たちも住むことになってるんですか？」

「さあ？あかりねえはまだわかるんですが。死神が男女二人だと不健全とか言って矢田先輩まで巻き込んだんですよ。」

「しかもさつきから私を避けているのですが？」

「……本当にすいません。」

でも気持ちはわかるなあ。最初あったとき結構怖かったし

「でも少し安心しました。君は私生活に関してだけはひどいですから。家庭科のテストだけ全て0点ですし。」

「……本当にすみません。」

「まあ、ちゃんと節度のあるお付き合いをしてくださいね。」

「当たり前です。つてかまだ付き合ってますね。」

「まだと言う限り理解はしてるんですね。」

「まあ。あのふたり結構分かりやすいですね。」

まあそのことに気づいてる浅野理事長もさすがとしかいいようがない。

「じゃあ、私は帰ります。矢田さんのご両親にも話は通しておいたほうがいいので。」

「本当に迷惑をおかけしてすみませんでした。お礼に今度美味しそうな情報があったらまた連絡しますよ。」

「ええ。その時はA5ランクのステーキでもご馳走しますね。」

「いや、普通のステーキでいいですよ。流石にA5ランクステーキをガツガツ食べるのは気がひけますし。」

「ええ。そうしましょう。ならまた。」

「ええまた。」

浅野理事長はさっさといくのを見送ってから、俺は少しため息をつく。

「さすがだな。あの人。」

「えっと、羽川くんってもしかして理事長先生と仲いいの？」

「まあ、一応俺も学年主席だし離れたくないんだろうな。ここ一ヶ月で家賃普通なら何百万はするぞ。多分一月の先生の給料より高いんじゃないのか？」

「うそ。」

「いや。マジで。しかもこう言うマンションは信用が大切だから簡単にはプライバシーは明かさない。……俺でも安心して暮らせるくらいに。」

本当にありえないくらいにいい物件だ。金があったのならこう言う物件にすんでいる。

「まあ一番怖いのは殺し屋だけどさすがにここを追い出されると世界中の施設に追放されるだろうし、すぐに警察に売られる。逆にいえば何もしなかったら安心して暮らせるって。」

ガタンつと音がなる。

「……………」

「な、な、なんであんたたちが」

金髪の女の人が俺たちの方を見ていた。

「あ、ビッチ先生。」

「……………」

殺し屋が国から借りるくらいの物件。

正直やりすぎだと思っていた。

全ての告白

「つてことがあったんですよ。」

「……あのタコ何してんのよ。」

「本当ですね。」

イリーナと少しリビングに招き少し談笑していた。

「ビッチ先生お茶どうぞ。」

「ありがとう。でも中学生三人にこの物件を与える理事長もすごいわね。」

「本当にありがたいです。おかげでこの部屋は電波を弄れるようにしたのとGPS情報を混乱させるようにしたくらいですみましたし。」

「あんたまた防犯を強くしたの?」

「命がけですからやれることはなんでもやりますよ。それに矢田先輩とあかりねえの安全性も確保しないといけないので。」

すると意外そうにこつちを見る。

「なんですか?」

「いや、あんたつてもっと非常なんだと思ってたわ。賞金100億の賞金首でほとんどの殺し屋があんたの依頼を気にやめていくのに。」

その言葉に笑う。

「いや、殺し屋が辞めていくのは基本は別の職業につくようになったからですよ。マナフィーさんみたいにモデルをやったり腕っ節が強い暗殺者なら大統領の護衛など。多くの殺し屋をちゃんとした世の中に立てるようにしただけです。だからロヴロさんみたいに未だに暗殺業についている人とかいますしね。それに100億は最初からではないんです。俺が最初の命の値段はたったの100万円今の1000分の一です。しかし俺がアメリカ政府とロシア政府を味方につけた時には50億円になってたはずですよ。」

「……ちょっと待って。アメリカ政府とロシア政府を味方につけたってどう言うこと。」

「3年間海外にいたって言いましたよね?その間俺はアメリカ政府とロシア政府に戦争に使わないことを条件に反合成物質の危険性まあ

今の触手です。その危険性と解決策。つまり対先生ナイフと対先生弾。そして新型インフルエンザワクチンやいろんなものを提供してきましたんです。その結果アメリカ、ロシア、また内密に中国、韓国、イタリア、フランス、ドイツ、オーストラリアなど多くの政府から支援や保護を受けられるようになりました。まあ、全部の国が軍事的に利用しようとしていたので断りましたけど。」

「……ちよつと待ってそれじゃああなたを暗殺したときは世界各国から狙われるってこと？」

「はい。でもどうしても殺したい日本政府は80億円値段をつけた。だからそのことを知りながら暗殺に来るのは殺せない暗殺者つまり世界各国が利用している暗殺者。もう分かりますよね。仕事実績があり世界中の政府なら誰でも知っているような殺し屋に限定されることになります。まあアメリカ軍やFBIの訓練を2年間くらい受けていたので絶対に殺されないように訓練されました。トラップ、薬品、銃の取り扱いなど軍隊のトップでもしないような訓練を受けさせられました。全てを生き残れるようにと。」

生き残られるようにずっと無茶苦茶な訓練を受けさせられた。

「ちよつと待ってじゃああともう20億はどうやって上がったの？これ以上の上がる要因がわからないんだけど」

「初代死神の暗殺失敗。」

するとイリーナは反応する。

「たった一回それだけのことで20億円上がりました。まあ死にかけましたけど。」

「ちよつと待って。あなたあの死神を退けたの？」

「初代は一回ですが二代目は三回は退けてますよ。まあ初代死神は今の先生ですが。」

「……」

イリーナは訳がわからなくなっているらしい。当たり前だ。

でもその前に

「えつとツツコミどころが多いんだけど。その前になんで羽川くんが触手について知ってたの？対先生BB弾も対先生ナイフも全部羽川

くんが作ったっていつてたけど」

矢田先輩の言葉に俺は下を向く

「それは俺が触手の元となった生物エネルギーを使った無限エネルギーの原案を作ったからだよ。」

「……どういうこと？」

「まず最初に先生のことについて説明しないとな。なあまずおかしいと思わないか？先生は俺のことを最初から知っていたことがすでに。」

「うん。多分一番みんなが不思議なことだと思うけど。」

「そうだな。そして確か地球生まれってことは知ってるよな。」

「うん。」

「でも、みんなが一番不思議に思っでなくちやいけなかったのはその先生のことをなんで俺が一番知っていたかかってことだよ。」

そう。本来矢田先輩が不思議に思わないといけない場所はそこだった。

「だつて普通本人でもないのに初速600kmつてわかるんだ？しかも俺研究してたつて言つてるんだぞ。矢田先輩はスルーしてたけど。それに弱点だつてこのクラスに入ってきたときから知つている。暗殺対象のあのタコが教えてくらないのになんで知つてるのか疑問に思わなかつたのか？」

「…そういうえば。」

「……ちよつと待つて私の触手を外せたのも。」

「ああ。あの時は強化薬を作るためつていつただろ。あれはエネルギーが膨大させるつもりで子供の頃の俺が考えたものつまりだったんだけど」

「ちよつと待つてカエデちゃん触手をつけてたの。」

「うん。でも」

するとあかりねえが固まる。

「ちよつとこうちゃん。もしかして奪われた技術つて」

「ああ。その触手の元々の原案だよ。元々はネズミとかそう言う生物に打ち込むはずだったんだけどすぐに危険だつて気づいた。その生

物が死ぬと細胞分裂はとまるだろ。でもそのエネルギーは周辺つまり地球や空気をそのエネルギーに変えていく。月が三日月になっただろ？あれは規模的に多分ネズミじゃないのかな？打ち込まれたネズミの細胞周期が終わってそれが外に移転した。つまりは月をそのエネルギーに変えたってこと。」

「……えつとごめん意味がわからない。」

まあ当たり前か。

「なんていえばいいんだろう。簡単にいえば火事かな？物質が建物でエネルギーが火。ネズミという建物が火事になって全焼する。すると火は他の燃やすものを探す。そしたら月という建物がありそれに燃え移ったって訳。」

「んじゃ次はあのタコという火が地球に燃え移るってこと？」

イリーナの意見に頷く。

「そういうことですね。まあそれで水となっているのが今やってる暗殺ってこと火は消してしまえば燃え移らない。つまり先生を殺してしまえば。」

「地球に燃え移らないですむ。」

「そういうことです。そして全焼して地球に移る前の期間があと一年ってこと。」

まあこうしておこう。わかりにくかったが伝わったのでいいや。

「それって結構まずいんじゃない？」

矢田先輩はいうが実際のところそうでもない

「って言っても実際完全燃焼しきれないときもあるんだけどな。例えばデパートがあるだろ。でもまあ言った施設って防火シャッターとか結構備えてあるだろ。」

「うん。あるけど。」

「確実に止められる訳じゃないけど火は弱まっていく。つまりは大きな施設ほど完全燃焼する前に消える可能性が高いつてわけ。それが人間の場合70%つまり燃え移る確率は30%しかないんだ実際。」

「えっ？」

「まあそのほかにもあかりねえに渡した薬あるだろ？あれは触手を液化させる物質んだけどあれは大きなふただと考えていい。」

「えっ?」

「油に燃え移った火を消すときふたを閉めるのが消す方法があるだろ?あれの原理ってなんだと思う?」

「確か酸素を失わせて燃やすものをなくすんだよね。」

「そうだな。…でも消すのには時間がかかる。それが小さい火ならすぐに消える。あかりねえみたいにな。」

多分あれ一日か二日しかたつてなかったな。多分だけど

「ちよつとそれじゃあ。」

「正直な話もう1%もないんだよ。地球が燃える確率は。100万分の3くらいしか。死神には強化薬って言ってレシピは渡してるしアメリカ政府が今宇宙国際ステーションで実験している。」

「……嘘。」

「本当だよ。まあ違うのはその建物が燃えたままの状態で生き残るっただけだ。つまり。」

「殺せんせーを殺せないでも。」

「地球は破壊されないってこと。」

「ああ。そういうこと。」

俺がいうと二人は少し嬉しそうにする

「でも、あなたよくそれを黙ってたわね。」

「まあ、いくつかやりたいことがあったのとそれに死神がそれを望んでいなかったからですな。」

「どういうこと?」

不思議そうにしていると俺はちよつと厳しい顔になる。これをおかりねえの前で言わないといけないのか

「矢田先輩は落ち着いて聞いてください。」

「えっ?」

「雪村あぐりさんの遺言が柵ヶ丘中学3-E組の先生になってほし
いってことだったそうです。」

「……えっ?」

「……誰？」

「わたしのお姉ちゃんです。去年まで先生をしていたんです。」

あかりねえが話す。

「そして俺と死神の恩人。死神にとったら好きだったらしいです。でも」

すると目元が熱くなる。そしてかすかに水滴が流れる。

「あれ？」

「……こうちゃん。」

あかりねえがぼやけて見える。そしてうしろから抱きしめられた。

「もう無理しないでいいよ。」

「えっ？」

「ずっと我慢してたんだよね。知ってるよこうちゃんがうつ状態だったの。」

「えっ？」

「殺せんせーから聞いてたんだ。全部それで矢田さんに全部見られたんでしょ。」

「……本当なの？」

「…はい。」

イリーナの問いに矢田先輩は答える。

「私は体験したことがないし安全なところにいたけど殺されるのも佳奈ちゃんが死んだのもこうちゃんにとったら辛かったんだよね。」

すると声が震えてるのが分かる。

「私も辛かった。こうちゃんが死んでいるって聞いたとき泣いちゃった。私はこうちゃんのことを好きだったから。昔から泣き虫で臆病だったけど困ったときがあったらなりふり構わず助けにきてくれて。なりたいて言ってた女優の応援もしてくれた。でも、最初に主演が決まって喜んでくれるって思った時には。」

「あかりねえ。」

「もういいから。私ももう我慢しないから。だから」

我慢しないでいいよ

そう言われて先は泣いた。あかりねえも矢田先輩もイリーナもい

ることを忘れるくらいに泣いた。

しばらく泣いたあと何か優しく暖かいものに包まれたが何構わず時間を忘れるくらいに泣いた。

そう泣いた。

涙が出続け声がかれ

そして次第に意識は闇の中へ落ちていった。

「……」

目がさめると背中にかすかに暖かいが取れ冷気が体を包む

そして見回すとフローリングのリビングにいるのがわかった。

「あれ?」

いかにも高級そうなリビングにびっくりしてしまう

「……あれ?どこどこ?」

「羽川くん起きた?」

すると目線の先にエプロンをきた矢田先輩が立って、

「えっ?」

目をこすろうとすると目が痛い。なんか膨らんでいるし

「……昨日大変だったんだよ。カエデちゃんは羽川くんを抱きしめて

立ったまま寝ちゃうし羽川くんはずっと泣いてるし」

「……そっか。昨日泣いちゃったのか。」

「うん。」

……そういえばあのバカのせいで矢田先輩とあかりねえと同棲す

るんだっけ。

「……矢田先輩。」

「……何?」

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げる。

「多分矢田先輩の言葉がなかったらあかりねえと昔みたいな関係に戻れてなかったですし。」

「ううん。気にしないでいいよ。私は何もしてないから。」

「……」

俺はあることを思い出す

あの時の返事まだしてなかったな。

「すみません。ちよつと最低なこと言ってもいいですか？」

「……うん。何？」

「俺、矢田先輩とあかりねえの二人が好きです。」

「……えっ？」

「ずるいとは思いますがでも優しくしてしつかりものでかっこいい矢田先輩が好きです。」

すると呆気にとられているのかずつと俺を見てくる

「……それでなんですけど。」

俺が言おうとするのとくすりと笑う。

「……えっ？」

「カエデちゃんが言った通りだったよ。ぜったいに羽川くんならそうするって。」

「……」

読まれてた。あかりねえに

「でも、ちよつとカエデちゃんが羨ましい。逃亡生活の前からずつと仲よかつたんでしょ。」

「はい。そうですね。」

「……ねえ。羽川くんはずるいね。私の気持ちを知ってるんでしょ。殺せんせーから聞いてるよ。他の人の気持ちがわかるって。」

「……はい。」

「じゃあ私の今の気持ち分かる？」

矢田先輩の顔を見ると青よりの紫確か

「……嫉妬してるんですか？」

「うん。だから。」

すると首元を引っ張られ矢田先輩が顔と顔がひつつきそうなくらい近づき口に柔らかいものが触れる。

「だいたいま。ビッチ先生よ」

「どうしたのよ。かや」

そして後ろの二人と目が合う。

すると矢田先輩は離れていく。えつと今のつて

「……じゃあ朝ごはん持ってくるね。」

「……」

「ちよつと桃花ちゃん」

あかりねえと矢田先輩がキッチンへ向かっていく。

「……あの、羽川。あなた大変ね。」

「同情だけはマジでやめてください。」

これから始まる生活に真面目に不安がしかなかった。

信用

「……」

「おはよう羽川ってなんだその目。すごく腫れてるじゃねーか。」
「あつ。おはようございます。前原先輩。」

「ちよつと本当にどうした？」

「いや少し色々ありました。」

「そうだ。この先輩なら」

「前原先輩助けてほしいことがあるんですけど。」

「……ああ。悩み事なら聞いてやるけど本当に大丈夫か？」

「……あの、悩み事なら私たちも聞こうか？」

「今日の羽川なんかいつもよりも元気がないし。」

「大丈夫です。多分これから毎日こうなってますので。」

「『本当に何があったの』」

「みんなが心配してくるけど」

「本当に気にしないでください。本当の屑になってしまったので。」

「おはよ〜」

「おはよう。茅野。あれ？なんかいいことあった？」

「うん実は」

「おはよう。みんな。あれどうしたの？」

「おはよう。桃花ちゃん？あれ？嬉しそうだね？」

「うん実は」

「『康太くん（こうちゃん）と付き合うことになったの。』」

「『『えっ？』』」

「うん。こうなることはわかってたよ。」

「……つまり殺せんせーの失態から高級マンションがよいになって、その後二人と同棲することになった後、成り行きでその二人と付き合い合うことになった。」

「羽川？それなんていうエロゲー？」

「知りませんよ。」

もう真面目に疲れた。

「でもよ。俺も四人彼女いるけど普通に楽しいぞ。」

「……前原先輩ならわかってくれると思ってるんですけど……俺全く料理できないことって知ってますよね。」

「ああ。知ってる。確か調理器具の使い方が全くわからないんだっけ。」

イトコ育ちでしかもずっと隠蔽生活で洞窟や野宿をしていたので全く

「はい。それ同様に掃除とか色々なことができないんですよ。そうしたら全部私たちがやるからっていうんです。」

「でもそれっていいことじゃないのか？」

「……たしかに嬉しいんですけど、なんかどんどん自分がダメ人間になっていくみたいで。」

「……」

全員がここで黙り込む。

「だから、でも洗濯は。いつもコインランドリーとかで。」

「あの、女子の洗濯物を洗えって本気でいってますか？」

「でも自分の分は洗えば。」

「……理事長先生に生活費を負担してもらってるのでさすがに無駄遣いは。」

「……ああ。」

「それにゴミ出しや買出しは危ないって理由で反対されるし、それなら料理や掃除を覚えようとする担当が矢田先輩なのでどうやっても……」

「完全に尻にしかれてるな。」

磯貝先輩に頷く

「で、でも二人とも仲が悪いわけじゃないんだろ。今だって仲よさそうに話してるし」

三村先輩がいうけど

「そうですね。でも仲が良すぎるのも問題で。」

「……どうして？」

「あの、今日の朝に矢田先輩にキスされました。」

「「えっ?」」

「でもそれを同じマンションに住んでいるイリーナと茅野先輩に見られたんです。」

「うわゝそれは。」

「でも責められたりするんならまだマシなんですよ。」

「……えっ?」

「その後朝食だったんですけど先生がいるなかで俺の好きどころや出来事を自慢し合っんです。」

「「……」」

「あの時の俺とイリーナの気まずさ。そしてイリーナに同情されたよ
うな目で見られ、氣遣われるおれの気持ちが変わりますか?」

「……」

「あく仕事したい。」

「それ完全末期だな。」

うん。自分でもそう思う。

「おはようございます。みなさん。」

「おはよう。殺せんせー」

「あゝ羽川くん。」

斜め横の倉橋さんが話しかけてくる。

「なんですか?」

「……さつきは最低だなんて思ってごめんね。」

「……」

何話したんだあいつら

「……あの、さつきからなんで羽川くんに同情の目線を送ってるん
ですか?」

「……いや。さすがになんていうか。」

「なんか。愛が重すぎるのも問題じゃないかなって」

「にゅや? そういえば羽川くんイリーナ先生が呼んでましたよ。どう
やらてつづだ」

「本当!!」

言い終わる前に返事をしてしまう。

「ええ。本当ですが…」

「よっしゃ。仕事だ。」

マジでうれしいってか働きたかったし丁度いい。

「……どうしたんですか？」

「……正直殺せんせーは羽川くんに殺されてもいいわけはできないと思うよ。」

「「うん」」

俺と矢田先輩とあかりねえ以外が同時に頷く。

そんなことどうでもいいから仕事をしたかった。

その後みんなの説得のおかげで皿洗いと風呂掃除をすることになった。

「そーいや修学旅行の班どうするの？」

すると片岡先輩に聞かれる。

「はい？」

「だって茅野さんの班と矢田さんの班とどっちの班に入るの？」

「さあ？基本俺決定権ないので」

「……なんかごめん。」

「いいんですよ。俺ああ見えて結構うれしいんですよ。」

「嬉しい？」

少し考えてから

「俺幼少期のころから心配されたことがほとんどないんですよ。親が成績重視、才能重視だったんで。」

「でも羽川くんってなんでもできそうだけどってそういえば家事や道具に弱かったんだっけ？」

「はい。自分で作るものはちゃんと使えるんですが。あとパソコンぐらいですかね。ハッキングやGPSいじるのに使っていましたから。」

「あの〜今聞こえてはいけないうようなダメなものが聞こえたんだけど」

「気にしないでください。でも今までなら全部覚えなといけなかったんです。全部自分でやるしかいけなかったから。何かあっても助けてくれる人がいなかったから。」

「でも、それが普通で。」

「その普通のことのできないのが俺だったんです。」

助けてもらう、それさえができなかった

「知ってますか？子供の言うこと信用されないものなんですよ。」

「…」

「いつかはみなさんにもわかります。証拠がないと世間は信用してくれない。でも逆に言う証拠さえあれば信用してもらえます。片岡先輩は今の先生のことどう思いますか？」

「えっ？いい先生だと思うけど？」

「はい。俺たちから見たらいい先生です。でも世間から見たら来年地球が爆破させるただの怪物。俺はみなさんから見たらただのクラスメイトだと思ってくれてたらいいいんですが。」

「なんでそこに不安になるの？」

すると片岡先輩が笑う。

「大丈夫。クラスのみんなも多分クラスメイトの一員として思ってるよ。」

「なら、いいんですけど、でも世間から見たら？」

「……犯罪者の子供。」

「はい。もしあなたが世間なら地球を破壊する生物と犯罪者の子供が国家どつちを信用しますか？」

すると黙り込む。そう実際そうだ。

今の世間だったら俺たちは誰にも信頼されない

「でも、ここには信用してくれる人がいる。ちゃんと見てくれる人がいる。それがとても嬉しいんです。」

クスリと笑う。

「だから茅野先輩と矢田先輩。ちゃんと俺のことを心配してくれてるし実際、事実なんですよ。俺が危険で何もできないのが。まあ少し過保護ですが。」

「少しではないけどね。」

「後少しくらい発言権がほしいです。」

「うん。私かなんとかするね。」

本当に頼みます。

「てなわけで茅野先輩か矢田先輩に聞いてください。」

「うん。そうする。」

「はあ。でも楽しみですね。修学旅行。」

少し浮かれてしまってるけど実際楽しみだった。

まあどちらかの暗殺を含まれていることはわかっていたけど

両親

修学旅行当日

「おはよう。」

「おはよう。康太くん。」

「矢田先輩おはようございます。」

「おはよう。羽川。」

「……なんか。もうイリーナがうちに来るのが当たり前になって来てるな。」

俺がため息をつく。

「まあ、保護者みたいなものだからいいじゃない。」

「まあそうですけど。」

実際監視役を任されてるのだろう。烏間先生にも一応メールで用件を送って事情を伝えたら、やっぱり死神がかなり送られていた。

「でも実際こんなマンションよく用意してくれたわね。」

「まあ山一つあげたんでそりやこのマンションは安いでしょうけど。」

「……えっ?」

「元々俺が暮らしてた山、家のものだったんですよ。でも安全性を考えると山をあげるしか方法はなかった。……自分の土地じゃなければ買なんか仕掛けませんよ普通。まあこれで本当に一文無しになっただんで結構まずいですが。」

「あんだ。すごいわね。」

「そんなことないですけど。…そういえばあんだその服で行くつもりですか?」

「何が?」

「いや、それどう見たってハリウッドスターみたいなカッコでしょ。普通の先生みたいなカッコじゃないですって。」

「まあそうだね。」

確かに綺麗なんだけど

「でもバカンスとか誘われた時とか。」

「……それは大金持ち限定です。知ってますか? 100人以上の殺し

「屋はほとんど安物の服を着てるんですよ。」

「……そうなの？」

「はい。何故ならばターゲットに近寄りやすくなるんです。」

矢田先輩の方を向く。

「例えば矢田先輩。こんな人が歩いてきたら羨ましいとか綺麗だとか思うけど。話掛けようとは思わないだろ。」

「……まあ。遠目で見るくらいかな？」

「まあ、そうですね。それに庶民は基本露出した服装は正直言って引きます。」

「えっ？」

「正直言って自意識過剰気味に見られることが多いんですよ。痴女とかビッチだと思われても文句はいけません。」

「じゃあどうするのよ。」

「だからここで安物の出番なんですよ。正直な話イリーナの武器はその胸ですよ。だから正直露出が低くてガードが固そうな女子を演じて、少し仲良くなつて気を許したようになつたら家やホテルにでも呼んで少し露出度が高めな服で誘う。それが本当にすごい暗殺者です。」

「……」

「まあそれに関したらうちにプロがいますんで、今度一緒に買い物にでもいってください。伊達に女優やってきたわけじゃないですよ。あかりねえは。」

暇さえあれば演劇の稽古やファッション雑誌を読んでいたしな。今でも時々読んでいるのを見ることがあるし、なじみやすさに関してが一番すごいと言える。

「そういえば、なんて名前の女優さんだったの？」

「ああ、知らなかったか？磨瀬榛名だよ。」

「えっ？」

「……だって俺が最近借りてきたDVD全部あかりねえの作品だぞ。元々映画なんか興味ないし」

少し見たかったからこそっさり見てたけど。あかりねえにバレた時、

ちよつと恥ずかしそうにしてたけど嬉しそうだったしな。

「……あれ？」

「おはよう。みんな。」

「ちよつとカエデちゃん磨瀬榛名って本当なの？」

「……あれ？言つてなかった？」

「らしいな。言わなかったほうがよかったか？」

「ううん。大丈夫。いつかはわかることだし。」

「……」

二人は固まる。

「…それでなんだけど、イリーナってどうやったら服装を日本人らしくできるか？」

「……えっ？」

「こいつ流石に修学旅行に行く服装じゃないだろ。烏間先生にイリーナのこと頼まれてるんだよ。」

「でも今からじゃあ遅いんじゃない？」

「だよなあ。烏間先生なんで昨日言つて来るかなあ？」

昨日は用事があつて結構帰りも遅かつたのだ。

「……そういえばなんで昨日遅かつたの？」

「ん？浅野理事長と飯食つてた。次の球技大会は俺をどうするのか話し合うために」

「…ちよつと待つて。理事長先生と？」

「まあ色々な。俺も案外大変なんだぞ。烏間先生から今回の暗殺計画の案をもらつては訂正しては、浅野理事長と会食にいたり、それに次の暗殺者も調べたりな。」

まあこつそり実銃の訓練をしたりしてるんだけど、こいつらには見せられないしなあ。

「修学旅行が終わつたらここに一人の暗殺者生徒が送り込まれるはずなんだけど……ちよつと烏間先生がさすがにかわいそうになつてきた。」

「……何があつたの？」

「人工知能の教室参加。」

「えっ？」

「つまりはロボットの暗殺教室参加だな。」

自律思考固定砲台

どう見たって人工知能のロボットだ。

「……なんか鳥間先生も大変だね。」

「そうだな。ってか飯食ってさっさと行こうぜ。矢田先輩、イリーナ飯食ったら行くぞ。準備しろ。」

「あっ。うん。」

「わ、わかったわ。」

「……なんか、楽しみのことが絡んだこうちゃん怖いね。」

「そうか？普通だろ？」

するとあかりねえがくすりと笑う

「なんだよ。」

「ううん。なんでもないよ。」

「はあ。まあいいけど。」

すると家がばたつき始める。

俺は先に着替えておかないと皿洗いした後大変だし、少しだけしおりをまとめておくか。

「それで、羽川はこっちの班になったんだ？」

「そうですね。」

俺は溜息をつく。新幹線に乗ってから俺たちは結構まずい空気になっていた。

「本当に羨ましいなあ。なんで羽川ばかり。」

「……あはは。しょうがないよ杉野。」

「……」

結局俺はあかりねえの班に入った。

なので今男子陣で集まっているのだが
すげえ気まずい

ってか特に潮田先輩とやっぱり少しだけ距離があり、杉野先輩もそれに伴っている感じだ。

やっぱり軽い恐怖はあるよなあ

「俺は少しだけ反省する

元々はクラスメイトと距離を離そうとしていたので尚更である。

しかも一番の厄介な点は謝罪の意思があることだ。

なにかに怯えるような。ただ自分を隠しているような。

……あれ？

やばい。この人俺に本当に似ている。

「あの潮田先輩失礼ですが、家族や誰かの機嫌を失わないようにしていることがありますか？」

「……えっ？」

なぜ言葉にしたのかわからない。

でもこの先輩が抱えているものはそれだと思った。

「なんでそんなことを？」

潮田先輩は俺を見てくる。不思議そうにただ純粹に

……これは結構まずい

直感がささやいていた

「……先輩が昔の俺を見ているようで。」

だから素直に言った。

「えっ？」

「多分ですが感情を色で判断してるんじゃないでしょうか？ 明るい時なら機嫌がいいとか暗い時は危ない時とか。」

「……」

すると潮田先輩は黙り込む

「……うん。」

そして小さくながら頷いた。

だから分かる。なんで潮田先輩をこんなにも警戒していたのか

ああこの人は俺と同じタイプの人間だ。

「……そうですか。」

「……どうしてわかったの？」

「だから俺と似てるんですよ。自暴自棄だった子供の時の俺に。」

「……えっ？」

「俺、最近はまだ彼女がいるので克服してませんが、結構自己犠牲にする

ことが多かったんですよ。自分の考えを隠し相手に合わせる。自分を否定的に見て自分の命を軽く見ていたんですよ。……たぶんだからそこそんなにイラついたんだと思います。あなたが自爆テロを起こしそうになったときは。でも多分昔の俺も同じ状況だったら同じことを起こしています」

「……」

「修学旅行に言うべきじゃなかったですね。すいません重い空気にしてしまつて。」

「……ううん。いいんだけど……でも羽川くんもなにかあつたの？」

すると意外にも深く切り込んできた

「まあDVですかね。家庭内暴力をうけていました。今でも痣や火傷痕が残るくらいに……でもやっぱり先輩もなにかあつたんですね。」

「うんちよつと母さんがヒステリック気味で僕を理想の子供にしようとしてるんだ。」

「親の鎖は怖いですね。もしかして髪型とかから思っていたんですが、潮田先輩を自分の人生の二周目だと思つてませんか？」

「うん。なんで分かるの？」

「だから自分と似てるんですつて。家の場合父さんでしたが。」

「そうなんだ。」

「はい。なんでも自分が大切だったそうで世間帯とかすぐ気にしてきたんですよ。例えば俺が幼稚園児の時に高校までの勉強を終わらせていたのも、自分の家は優秀じゃないとダメとか色々言ってきたり、小学校に行こうもんなら煙草を押し付けられたり殴られたりして」

「……さすがにそこまでは酷くないけど。」

「まあうちは一流企業の社長でしたしね。今は何してるか知らないけど俺を見捨て、妹連れて逃げていったくらいですから。」

……でも

「慣れていくんですよ。そういう扱いに。だから親相手にご機嫌取らないといけなくなる。」

「…そうだね。」

俺も潮田先輩もその経験があるのか少し気分が悪くなる

「でも痛いなら痛いって言わないといけなかったんですよ。慣れないうちに。大事なものを失わないように。」

「……」

「潮田先輩はどうですか？今大事なものは今ありますか？」

俺は潮田先輩に聞いてみる。

「俺は一度は見失いましたがまた見つけました。自分が何をしたいのか。多分それを両親に伝えておけばよかったと今となっては思いますが……まあ俺は気づかせてくれたっていう方がいいですかね？」

あかりねえから、矢田先輩から死神から多くのことを教わり多くのことを学んだ。

「……俺は最低でもこの一年間はこの学校にいます。だから潮田先輩の選択をいつか聞かせてください。自分がなりたいものを考えて、もしちゃんと意思を伝えたいと思ったときは俺も手伝わせて下さい。もう俺みたいに後悔ばかり残る人を見て行くのは結構辛いので。」

だから今度は助けたい。俺みたいな人間を救いたい。それが俺の夢だ。

「……すごいね。羽川くんは」

「すごくないですよ。まあ精神的に強くなっただけです。」

「……渚くん、羽川、俺らのこと忘れてない？」

「あっ!!」

完全忘れてたな

「ご、ごめんカルマくん。」

「すみません。ちよつと暗いことで盛り上がっちゃって。」

「いいんだけど……渚くんあんま家のこと話してくれないからちよつと意外だった。」

「羽川も色々あったんだなあ。」

「結構どころじゃないですよ!!実際自殺未遂とかしたこととかあるんですよ。家が辛すぎて。」

「……それは笑って言えることなの？結構深刻だと思っけど？」

「過去は笑ってすごせばいいんですよ。どんなに辛いことがあっても

今が大切ですから。生きてたらいつかはいいことありますって。」

「……なんだろう。羽川が言うところごく説得力があるよな。」

「うん。」

すると苦笑してしまう

「あの、一応俺一個年下ですからね。」

「……」

「杉野先輩驚かないでください。はあ俺のこと一体どう思ってるんですか?」

「女たらし」

「ひどくね? 否定できないけど。」

「自覚はあるんだね。」

すると一気に空気が変わる。まあこれでこの先輩たちとはちゃんと話せるようになったかな。

ホテルのロビーにみんながもう集まっている頃。

「……はあ。」

「なんで君が教員室にいるんだ?」

鳥間先生から聞かれる。

「まあなんか嫌な情報を手にしたので報告をと思ひまして。」

「嫌な情報?」

「はい。」

俺は少し息を吐き

「今日一緒に乗ってた高校生が、神崎さんのしおりをパクってました。」

「……何?」

「どうやら女子目当てなんですけど、窓越しに京都で勉強を教えるとか言ってたんで、多分さうなのが目的かと。」

すると鳥間先生は悩む

「なんで俺に報告した?」

「死神に報告したら絶対に出てはいけませんとかそんな風に言いだすと思ひまして。スケジュール変更をすればなんとかなると思ひますが。」

「……そうだな。しかし暗殺の計画は。」

「中止しないでしょう。それよりも生徒の安全が大事だと判断するべきですが。」

「……そうだな。上層部に掛け合ってみよう。」

するとどこかに電話し始める。

さすがに地球の危機とはいえ生徒の安全は確保するだろうと思っ
ていた。

しかし予想は大きく裏切られた。

「ちよつと待って下さい。それじゃあ生徒が。」

「……」

……こりや本当にひどいな

俺は溜息をつく

国家ってどうやったらここまでひどくなるんだろう

自分の保安がどうして大事なんだろうか

そんなに公開したくないのだろうか

多分死神をこのクラスの誰かが殺せた場合、この情報を世界各国の
政府は隠蔽するだろう。

そして逆に死神を殺せなかった場合、死神が悪く言われるだけで政
府は何も文句は言われないだろう

すると烏間先生が帰ってくる。

「……すまない。」

「……」

「……羽川くん。一つ依頼がある。」

「分かってます。」

俺は少し怒りを抑える。

この人はやっぱりいい人だ。

少しホツとする

生徒の安全も考え、熱心に指導してくれる。

この先生なら力になれる

「イリーナ、死神をよんできて下さい。作戦会議を始めます。」

やり直し

……夢を見た

何か失う夢を

誰か大事なものを失う夢を

夢の内容は思い出せない

でも、悲しい

でも、怖い

大事なものを失くしたから？

前まではなかったもの

それは弱くて、儂い

それでも俺にはない強さを意思を持っていた

もし俺が今それをなくしたのなら

俺は生きることができののだろうか

「……」

起きるといつもとは違う部屋に起きたのが分かる

ぼやけたボロボロの屋根が修学旅行に来ていたことを思い出させる

「あれ？」

そして俺が泣いていることも。

なんでだかわからない

でもなぜか悲しかった

寂しかった

でも周りは寝ている

ここはで出るのが得策だろう。

俺は寢室から出ると誰もいない。

朝早いし当たり前前といったら当たり前なのだがなぜか寂しい

そして気づく

一人きりになるのが久しぶりだったのだ。

「……そっか。」

いつのまにか帰る場所ができ朝起きると挨拶が来る場所ができた

んだった。

それが嬉しくて、楽しくて

そして失いたくないものだった

イリーナとあかりねえが盛り上げ

俺が突っ込み

矢田先輩が落ち着かせる

その場所が恋しかったのだ

でも夢とは違う

暗闇の中

たった一人

そして誰かの鳴く声

聞いているとどこか懐かしく感じる

そうだ

自分が恐れてたものだ

悪夢は終わったと思つたとたん声が聞こえたような気がした

周りを見回すけれど誰もいない

「……」

気のせいかと思つていと

また聞き覚えのある声が聞こえる

それだけだった

二回呼ばれただけだったのだろうか？

離れていったただけだろうか？

違う。その人を失ったのだ

確かに大切な人だった。

でもなくしたのだ

失っただから悲しい

それは誰のせいか？

多分誰のせいでもない

しかし自分が悪い気がして来る

どこが悪いのか、

それを探しているんじゃないのか？

わからない

わからないからこそ俺は怖いのだろう。

「……ってなわけでこの班は暗殺を行わず別ルートに行く方がいいんだけど。」

とりあえず昨日俺と死神イリーナと話し合った結果俺たちの班のみ別行動をとるといったものなんだが

「なんで、分かってたら返り討ちにすればいいじゃん。」

「はい。そういうと思いました。」

俺はため息をつく

「あつ。予想はついてたんだ。」

「はい。だけでもうそろそろ烏間先生のストレスがちよつと。」

「ああ。」

「それにちよつと面倒臭いんですよ。襲われるところが襲われるとこな
んで。」

「…襲われるところに検討ついているんですか？」

「ああ、祇園だと思います。確か神崎先輩が行きたいっていったところですよね？」

「うん。そうだけど。」

「よく調べましたね。でもあそこは細い路地が多くてスナイパーの位置が少しわかりやすいんですよ。だからどちらかといえば赤羽先輩が茅野先輩、杉野先輩の近接タイプな暗殺者は得意なコースなんですがちよつと先生の性能上向いてないんですよ。」

「あつ？ そうなんだ？」

「えつとどういうこと？」

「スナイパーライフルって基本は一発しか撃てないんだよ。さらにロードがしにくいし。そのぶん遠くから狙えたり速度や威力は桁違いだけど。でも基本的にそんなに先生の暗殺にはむいてないんだ。一発だけだったら八つ橋でつつんで取られかねない。」

「ありそう。」

潮田先輩が納得している

「まあ援護射撃や周りが先生の苦手なものがあったりなど条件はあり

ますが。正直どこの班も暗殺はできないと烏間先生に言っています。つてか単独暗殺だとスナイパーライフルは俺と先生にはあまり向いてないんです。てか単独だったら俺すら殺せない。」

「……そうなんだ。」

「はい。でもどうしますか？」

「ごめんね。わたしが。」

「盗まれたんだから仕方ないですよ。」

「でも羽川。なんで言わなかったんだ？新幹線の時に言えばよかったですよ。」

確かにそうだろうけど

「ちよつと理由があったんです。一応揉め事になるので先輩たちの内申点にも響くのが一点。そして妙にスリに慣れてたつてことがもう一つの理由ですね。」

「どういふこと？」

「……一度じゃないつてことでしょ。」

赤羽先輩の言葉に頷く。

「多分犯罪行為に慣れている集団ですよ。つてことは多分言い訳は考えてあるだろうし俺たちの中学校は有名なので報復行為がある可能性が。」

するとみんなが固まる。

「それに名前を見られているのが致命的ですね。だから本当はしおりを取り戻したいんですが手の打ちようがないんですよ。」

「どうして？」

「最初はわざと騙されたふりをして奪い返そうと考えましたが戦力が俺と赤羽先輩しかいないので七人以上で来られたら人質取られる可能性が高いのでアウト。烏間先生やイリーナについて来たもたら簡単にはバレたり他の班に影響するのでアウト。俺と赤羽先輩だけでその取りに拠点に行くと思っただけ……それも女子たちを別行動にってしまうのでアウト。」

「……ねえそれ羽川くんが全部考えたの？」

「いや。基本先生で反論するのが俺。相手は高校生つて情報だけで幾

ら何でも武道があれば俺でも細い路地で相手にするのは厳しい。わからない敵との戦いは基本こういう相手を少し過大評価していかないと痛い目にあう。つてか先生が一番やばい案だしてるけど。」

「……そっか。羽川の話聞く限りそうだね。でも一つだけ例外があるんだけど。」

「……なんですか？」

「羽川が取りに行つて俺がみんなを守るつていうのは。」

「なしです。そっちに五人以上いかれた場合結構厳しいんです。」

人質とかの問題で

「……でも一つだけ方法があるんですがあまり使いたくないんですよ。一人を危険になるし俺がちよつと。」

「……どんな方法なんだ？」

杉野先輩は悩みながら

「俺と誰かがさらわれて内部から殲滅するつて方法です。」

「……ここからちよつと危険です。気を引き締めてください。」

「うん。」

……でもやっぱ潜入捜査といえ女子の制服着るの恥ずかしいんだけど。

元々女顔だから女装はしやすいんだけど

「……やっぱり恥ずかしいんだ。」

「誰が好きで女装しないとイケないんですか？」

「でも、すげえな。本当に羽川かよ。」

「……あの、ウィッグとメガネつけてと女子の制服に着替えただけですから。」

「でもなんで女子の制服もつてたの？」

「先生がなぜかもつてた。しかも俺のサイズぴったりのを。」

なんでバレてたんだろう先生と烏間先生に作戦を伝えるとするとやっぱりそうしますかと死神に言われた。

そしてすぐに女子の制服を持って来たのだ

「でも本当にうまくいくの？」

「多分。大丈夫、あのエロダコが花魁とかに見とれてなければ。」

「……ありそうだな。」

「まあ責任は取ってくれるらしいしとりあえず茅野先輩のこと頼みます。赤羽先輩、杉野先輩、潮田先輩。」

「ああ、任せておけ。」

「なら作戦はさつき伝えたとおりで。おねがいします。」

そして祇園の最深部に入って行く。

「でもよく調べましたね。祇園の奥がこんなに静かだなんて。普通知りませんよ。」

「あ、うんー見さんお断りの店ばかりだから暗殺にはうってつけの場所だと思っただけけど」

視線を感じる。

……数は5人くらいか

「……来ます、気を引き締めてください。」

すると全員が頷く。

「ホントうってつけだ。なんでこんな拉致りやすいところ歩くかねえ。」

「……えっ?」

変声期で女の子に声を変えている。多分これなら気づかれないはずだ。

俺は少し分析する

体型からして喧嘩するための体に拳は殴り慣れている様子

奥田先輩以外は逃げられるんだが

逃げるのは無理だ。

「潮田先輩、奥田先輩と茅野先輩を連れて隠れて下さい。」

「う、うん。」

そしてすぐに逃げて行く三人。

「……」

そしてすぐに気づいた

「赤羽先輩後ろ。」

「えっ?」

すると鉄パイプで殴られる赤羽先輩がいた。だけど受け身をとれていたので多分大丈夫だろう

「……」

すると口を抑えられる。

睡眠薬は入っていないのでなんとかかなりそうだ。
軽く抵抗し動く。

するとなんにも抵抗ない縄で占められる

どうやら思ったとおりそこまで警戒してないな

「わははやっぱりたいしたことないなこいつら。」

すると慣れているのかすぐに引つ張られなすままになる。

すると車に連れていかれる。その隙に車のナンバーを見ようとするがやっぱり隠されていた。

車に投げ入れられると

……今だな。

その隙に俺は尻ポケットに入れてある発信機の電源をいれる。

これで位置は死神と烏間先生に伝わるだろう。

すると神崎先輩と目が合う。

一度俺が頷くとすると少しホッとする。

とりあえずは計画通りだ。

「何するんですか？犯罪ですよね。」

俺が威圧しながら言うと

「人聞き悪いなく修学旅行なんてお互い退屈だろ？楽しくやろうって心遣いじゃん。」

「な、カラオケ行こうぜカラオケ。」

「……」

やっぱりレイプ狙いか。

ってことになるると一旦拠点の前に車から降りる時に油断と隙がうまれる。

狙うんならそこだな。とりあえず神崎先輩に連絡しとこう。」

「……神崎先輩降りる時反撃する。多分カラオケとか言ってるがこの方向から攫われた付近の廃墟に向かっている。」

「……えっ?」

俺は少し準備をする。

「……これから何するんですか？」

「言っただろお前らを台無しにするんだよ。台無しは楽しいぞ。そっちの彼女ならわかるだろう？」

するとリーダー格の人が携帯をさわりこつちに一枚の写真を見せてくる。

そこには茶髪でパーマをあてたゲームセンターにいる神崎先輩の姿がいた。

「……」

なるほどそういうことか。

「拐おうと計画してたら逃しっちゃまった。随分入り浸ってたんだなあつて。まさかあの柵ヶ丘の生徒だったなんて。」

「……やっぱり神崎さん目当てで昨日しおりを……」

「今更気付いてもおせえよ。その彼女にも教えてやるよ。台無しの楽しさを。堕ち方なら俺等全部知ってる。これから夜まで台無しの先生が何から何まで教えてやるよ。」

すると高校生たちはこれからのことを話し始めた。

気づかれないように俺は小声で質問した。

「……神崎先輩もああいう時期あったんですね。」

小声で話すと小さく頷く。

「うん。うちは父親が厳しくてね。よい学歴、良い職業ばかり求めてくるの。そんな肩書き生活から離れたくて名門の制服を脱ぎたくて知ってる人がいない場所で格好を変えて遊んでいたの。バカだよね遊んで結果得た肩書きはエンドのE組。」

「先輩違いますよ。」

「……えっ？」

「……神崎先輩。大切なのは、それが本当に自分のやりたかったことなのかが問題なんです。」

俺はため息をつく。

「学歴だって家柄なんて関係ありませんよ。俺だって父親が厳しかったです。家のこと自分のことばかり考えていた。だから最初は頑張りました、それが褒めてもらえる、自分のためになると信じて。でもその

先にあつたのはさらに高い目標と暴力でした。」

俺はため息をつく

「間違えてもいい。失敗しても何度でも立ち直れます。俺も一度大切なものを失いました。家族も財産も、大切な人を失いました。」

佳奈もあぐりさんも失った。でも俺にはまた大切な人ができた。

あかりねえもいる。矢田先輩もいる。死神も、烏間先生も、三年E組のみんなも

「でももう同じことは繰り返さない。今度は絶対に全部守ってみせる。一度間違えたならまた同じ失敗を繰り返さなければいいんです。」

俺は笑う。すると車が減速していく。目的地に着いたのだろうか？でももう関係ない。

「……だからまずは神崎先輩を守ります。嫌な思いはさせません。だから少し待ってて下さい。すぐに終わります。」

車が止まった瞬間俺はこっそり隠しておいた煙玉をのピンを引き抜く。するとともくもくと煙が充満して行く。

「な、なんだ。」

「神崎先輩ごめん。」

俺は神崎先輩の方に体を寄せ俺側の車の扉を蹴り破る。そして自分の縄は話しているうちに軽く切れ目を入れておいたのですぐにほだけそして座ったままの神崎先輩を持ち上げる。そして壊した窓から急いで神崎先輩を傷つけないように飛び降りる。

「羽川くん、神崎さん大丈夫ですか？」

すると死神がすぐに駆け寄る。発信機の中に盗聴器も含めてあつたので出るタイミングも全部知らせていた。

「俺は大丈夫神崎さんは？」

「うん。大丈夫だけど。」

「なら先生神崎さんのことお願いします。」

俺は神崎さんを離し女子の制服を脱ぎ下に着てあつた学校のジャージになる。すると同時に車からリーダーらしき高校生が出てきた。

「……お前何を。」

「最初から全部わかっていたさ。計画された犯行っていうのは。」

変声期を吐き出し高校生に話しかける。

すると高校生はフラフラになっていた。そりやそうだろう。弱い睡眠薬を煙玉に仕込んであったのだからもう少したてばもう意識を失い倒れるはずだ。

「だからわざと計画どおりにさせてあげたんだよ。泳がせておけばいつか隙がうまれる。まあ今回の件は赤羽先輩が後ろから殴られたことぐらいしか変更点がなかったから楽だったけど。」

「テメーよくも。」

「それにあんたは肩書き肩書きっていうけどうちのクラスは学校内でも落ちこぼれ扱いされてる。でもあんたのように人を底に沈めるようなことは決してしない。」

俺は睨みつけ

「学歴も肩書きも関係ない。ちゃんと前に進めれば人は美しくそして強くなるのだから。」

すると高校生はガクツと膝を折り前に倒れて行く。

「まあ、あんたもやり直せると思うぞ。ちゃんと理解してればだけど。」

すると完全に倒れる高校生を見る。ちゃんとこいつもやり直してくれるといいんだけど。

まあとりあえず目的の物は消しておくか、

俺は高校生のポケットから携帯をいじり神崎先輩の写真を消しておく。ついでに一応ロープで高校生全員を縛っておくか。

「神崎先輩例の写真は消しておいたので安心して下さい。」

「うん。ありがとう羽川くん。」

「先生。茅野先輩の方はどうなりました?」

「さつき見てきましたが全員無事でした。怪我もなかったですし。」

「なら良かった。これで怪我されたら鳥間先生と先生の責任になるし本当に良かった。」

これでとりあえずは一件落着か。あとしおりも回収してっつ

「神崎先輩怖い目に合わせてすいませんでした。多分これでこいつらからは完全に縁が切れると思うので安心して下さい。」

「う、うん。」

「あと自分のやりたいことを見つけた時はいつだって俺とそのタコが力になります。なので気軽に相談して下さい。そのためにこの教室に来たんですから。」

俺は腕を伸ばし少し力を抜く。

「さてと旅行に戻るか。先生今先輩たちどこにいるんだ？」

「さあ？」

「……そういえば待ち合わせ場所きめるの忘れてたな。電話するか。」

「羽川くんはどこか抜けてますね。」

「うるせえよ。」

まあトラブルはあったけどなんか神崎先輩はすつきりしたらしいしいいや。

でもゲームセンター一度行ってみたいなあ。

そんなこと考えながらあかねねえの電話番号へかけるのだった。

将来

G A V E O V E R

目の前の画面にその文字が写る。

「……」

「またステージ1で失敗かよ。羽川。」

「……うう。」

「機械が苦手ってゲームも苦手なんだね。」

「えっとこれで何回連続ステージ1で敗退してるんだ？」

「…5回です。」

「easyモードでこれって。」

俺はさすがに席を立つ。さすがに操作方法がわからないって言えば俺は席を立つ。

今は旅館のゲームコーナーにいるのだがゲームをやってみたのはいいものの全くうまくいかない。

「パソコンのゲームはうまいのになんでだろうね？」

「……パソコンは使い慣れてるからだろうな。パソコンも何度か青い画面のエラーで何台潰したことだかわからないし。」

「じゃあ太鼓○達人やってみたら？リズムゲームなら叩くだけだし。」

「いや。やめときます。これ以上やると…ちよつと凹むんで。」

これまで弾幕ゲームなど色々やってきたが下手すぎてほとんどお金の無駄だった。

てか矢田先輩俺が操作方法いないってわかっていたんなら教えてください
ください

「でも神崎先輩は凄すぎると思うんですが。」

「おしとやかに微笑みながら手つきはプロだ!!」

「恥ずかしいなんだか。」

ちよつと照れながらも手つきはよくさつき俺がやられまくった弾幕ゲームを楽々クリアして行く。

「意外です。神崎さんがこんなゲーム得意なんて。」

奥田先輩が声をかける。

「…黙ってたの。遊びができてもうちじやあ白い目で見られるだけだし。でも周りの目を気にしすぎてたのかも。服も趣味も肩書きも逃げたり流されたりして身をつけてたから自信がなかった。」
するとこっちを見てくる

「でも、羽川くんに言われて気づいたの。大切なのは中身の自分が前を向いて頑張ることだって。だから羽川くんありがとう。」

頭を下げてくるけど

「別に礼を言われることじゃないですよ。結局受け取りようは神崎先輩次第ですし。」

「ううん。変わったのは君のおかげだと思うから。」

すると神崎先輩が顔を上げると

「ありがとう。羽川くん。」

「まあ、どういたしまして。」

頬をかき少し横を向く。まあ実際のところちよつと照れるな。

「……そういえば羽川くん。ずっと気になっていたんだけど神崎さんと何か近くない？」

「うん。攫われたあとずっとあんな感じなんだけど……」

「俺に聞くなよ。まあ神崎先輩とは仲が良くなったのは確かだけだよ。」

「なにかあった？」

「まあな。色々あったけど。」

本当に色々あった

でも少しだけ

「……なあ。手繋いでいいか？」

「えっ？」

「なんか結局旅行はほとんど一緒にいなかったからちよつと寂しかったっていうか。」

少し恥ずかしいけどそれでも繋ぎたかった。すると二人は笑い片方の手を握ってくる。すると手の温もりが伝わってくる。

「……なんか三人で話すのも久しぶりだな。」

「うん。そうだね。」

「……もう一度来たいね修学旅行。」

「もうトラブルは勘弁だけどな。こんどは少しゆつくりしたい。」

「おじさんくさいよ。康太くん。」

「……でも三人でくるのもいいよね。」

「……まあ、とりあえず俺の安全が確保できたらまたこようぜ。安全さえ確保できたらどこでも行けるしな。」

俺は笑う。いつかそのひがくればどこにでも行ける。

今はほとんど行けなくて苦労かけているが

「そういえば、こうちゃんはいつになったら名前で呼ぶの？」

「……あくそのことなんだけどさ。正直今すぐ変えてもいいんだけど。」

「あつ？いいんだ？」

「ただ言い換えるタイミングがわからなくて。いつのまにか桃花もカエデも呼び方名前だったし。」

「……」

少し変えてみたら二人とも顔が真っ赤になる。

「本当に無言で照れるのやめて。こっちも恥ずかしい堪えてるんだから。」

「え、えっと。」

「こうちゃん本当にこれわざとじゃないんだよね？」

「何が？」

「……もういい。」

「つてか先輩つけないんだね。羽川？」

赤羽先輩がきいてたのか俺に話しかけてくる

「だってそっちの方が呼びやすいんですよ。正直あまり敬語とか使わないので。」

「じゃあ俺もカルマでいいよ。俺も康太って呼ぶし。堅苦しいから敬語もいいや」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます。」

「僕も渚でいいよ。それに羽川くんだけいつも距離感あったし」

「じゃあ俺も杉野でいいよ。」

「そうしてくれると助かります。」

「そういや、今も感情とかは読んでたりするの？」

カルマが不意に聞いてくる。

「あく俺は調節してる。さすがに桃花やカエデの気持ち読み取ったらダメですしそれにこの能力使いすぎると気持ち悪くなるんだよ。他人の気持ちなんか知られたくない人は多いだろうし基本はあまり使わないかなあ。」

「…あー。でもいつになったら使うの？」

「基本は初めてあった人とか警戒するときか交渉で相手の裏を探るときですね。後鳥間先生にもよく使います。あの人全く考えていることがわからないし。」

「……確かにな。」

「でもその能力使えばクラスメイトの好きな人とかわかるんじゃない？」

「あくたしかにわかりますが。多分使うところがないんですよ。視線や休み時間に話しかけている回数をみたりすると自然に誰が好きかわかります。」

「……まじで？」

「はい。とくに杉野と磯貝先輩、片岡先輩、岡野先輩あたりは分かりやすいですね。まあカルマと渚、それに寺坂先輩以外は多分全員の好きな人言えますよ。」

「…「えっ？」」

するとゲームをしていた女子までもが動きが止まる。

「まあ所詮クラスの中の気になる人ていどですが。」

「……ねえ羽川くん。」

「なんですか？神崎先輩。」

「それって私の好きな人も？」

「……俺神崎先輩に好きな人いるなんてしりませんよ。集計といっても修学旅行前ですし。」

「そ、そうなんだ。」

あれ？神崎先輩が顔真っ赤になってるんだけど

すると神崎先輩が走ってゲームコーナーから出ていく。

「……まさか羽川、お前」

「神崎さんまで落としたの？」

「……らしいです。」

すると全員が黙り込む。

「でも実際、羽川くんは成績よくて顔も良くて運動もできるからモテると思うんだけど。」

「渚くん。それフォローになってないよ。」

「……まためんどくさいことになりそうだなあ。」

俺はため息をついた。

「はあくどうすればいいんだよ。」

俺は風呂に浸かりながら考える。

一人風呂は至福の時だ。ひとりでじっくり考えられる唯一のころだったんだが

「悩み事ですか？羽川くん。」

「なんであんたまで入ってきてんだ死神。」

俺は泡が大量に広がっている。触手にそんな性能もあったな。

「ん、まあな。俺は案外女たらしだったってことが分かっただけだ。」

「神崎さんのことですか？」

「まあ、そんな感じ。」

俺はのんびりと風呂に入る。

泡邪魔だな

「なんか色々なモードがあるんだよ。自分の中だ。普段の時とて助ける時で全く別人みたいになるだろ？全部を覚えてるし多分モードにはいちやうんだよ。なんか知らないうちに落としてるちゆうか恥ずかしい言葉言いまくってる。」

「……自分のやりたいこと見つけた時はいつだって俺が」

「殺すよ。」

「……すみませんでした。」

タコを威圧する。

「全く逃げる方が不利ってこと忘れるんじゃないよ。あんたは油断し

なければいつでも殺せるんだ。もしあいつらを危険に巻き込んだらいつでも殺すぞ。」

「……」

「なんだよ。」

「いや、案外大切にしてるんですね。」

「あのさ当たり前だろ。俺はあの親父に痛めつけてきたんだ。……あいつらにそんなことできるわけないし俺みたいに辛い目にあってほしくないんだよ。あいつらは確かに絶望はしている。でもなまだ小さいんだ。すぐにでもやりなおせるくらいなの。対して俺の絶望はけっして小さくはない。大きすぎるんだ。相談はいくらでもできるし口ではどうにでもなる。でも起こったことはやり直せない。」

すると少し息を吐く

「これは俺の問題だ。頼ることもするし助けてもらうけど、その解決の中に俺がいないとダメだ。目を背けてもいけない。自分でやり遂げないといけないんだ。だって、自分の親父が一番に裏切ったなんて、自分の奥さんと娘を殺したなんて言えるはずないだろう。」

「……」

「……多分この教室にも現れる。いつになるかは知らないけど全員が幸せになる選択肢を探さないといけない。多分それが全員揃ったの卒業なんだ。誰一人欠けてもダメだ。もちろん。生徒に殺された以外に死んでもダメだ。俺だってもう一人じゃないんだ。恋人だって友達だって俺を想ってくれている人だっている。だから俺はこのクラス全員が生き残る道を探す。」

俺は少し笑う

「あんたも俺もクラスメイトも全員が生き延び将来みんな酒飲みあつて中学時代のことを笑って過ごせるようなことにするために。だから俺はこのクラスに逃亡術を教えあんたを助ける方法を探す。それも必ず助かる方法をな。だからあんたも全部を守る。だめか死神。」

「……羽川くん。変わりましたね。」

驚いたように死神はいうけど

「変わってねえよ。戻っただけだ。あの頃にな。」

発明で、科学で人を救い俺が守りたい人を守る。そんなふうにな。

「……本当に君がこの教室に呼んで良かったです。」

「俺も担任があんたで良かったと思うぜ。殺せんせー。」

本当に人の縁っておかしいもんだ。

1ヶ月でこんなに変わるなんて思ってもいなかった。

人は変わり続ける。

そんな世の中だ

「まあ、この一年で色々しないといけないし身の潔白も世間に証明しないといけない。」

「ちよつと待っててください。それって結構厳しい。いや多分無理じゃ。」

「いいか。死神無理って言葉はないんだよ。それにこの教室も全部使わせてもらう。」

俺は笑い

「卑怯汚いは敗者のたわ言。完全勝利してやる。このために地道に作戦を練って今まで我慢してきたんだ。殺さずに、世間を味方につける方法を。まあ最後は変更するけど作戦に支障はでないだろ。体育だって次のステップに入っただろ。受け身を1ヶ月なんて本当にクソだったからな。」

「羽川くん？本当に変わりすぎですよ。」

「だから死神違うって戻ったんだよ。昔の俺に。だからもう何も怯えないようにするために。我儘でも全部を叶えようと努力してきたあの時に。」

100億なんていらぬ。たとえ貧乏だって巧く生きれば幸せになれるのだから。

「だから全員が幸せになる授業を俺はこの教室でしていくさ。誰も傷つかないようにしていく。それがおれの回答だ。」

「満点です。羽川くん。」

死神は顔に花丸を書いた顔をしてくる。相変わらずここまでそれを扱えるとは思わなかったぞ。

「なら、せつかくだし少し飲まね？オレンジジュースで悪いけど。」
「いいですねえ。」

俺はコップの中にジュースを入れる。オレンジ色の液体がそそぐと俺の方にも入る。

「近況のこととか色々話そうぜせつかく二人になったし、ぜつかくだし昔の俺らについてお互いにあまり知らないだろ。子供の時の話とか。」

「はい。でも私たちってあまり先生と生徒じゃなくないですか？」

「まあ親友つてとこじやね？俺はあつた頃からそう思ってたけど。」

「…そうかもしれませんね。」

笑いながら昔のことを話しあう。それは渚たちが来るまでずっと続いていた。

「いや〜話した、話した。」

「ほんと殺せんせーと仲いいよね。康太。」

「まあ、昔から付き合い長いしな。」

俺は笑う。するとカルマはちよつと驚いていた。

「そーいや、殺せんせーとどこで知り合ったの？」

「えつと確か、FBIの本部かな？あのタコを変装して近づいてきたからな。」

「うわつすぐバレそう。つてかなんで康太FBIにいるんだよ。」

「だって俺インターポールの一員だし、上からの命令で見にいけつていわれてもおかしくはないだろ？」

「……は？」

「……ん？インターポールつてこつちじゃちがうつけ？」

「ちよつと待った。そこじやない。インターポールつてICPO？つて国際刑事警察機構だよな？」

「ああ。あれ？言つてなかったか？……つてああ烏間先生いるからいつてなかったな。悪いこれ内緒な。」

「……お前本当におかしいわ。」

「大丈夫。みんな思つてると思う。まあ今は監視役みたいでICPOの上数人しか知らないから国のトップもアメリカとか主要数ヶ国し

かしらないんだけどな。」

「それ俺に話していいのかよ。」

「別に今回は休暇もらってここにきてるし。まあ日本政府には内緒にしてもらってるし。これでも結構実践はあるんだぜ。まあ内緒にしとけて言われてるけどカルマなら大丈夫だろ。言ったらどうなるかはしらないけど」

「お前性格悪いな」

「今更かよ。どうせ来年の三月には公開されると思うし」

俺は苦笑する。

「そーいや康太？お前このクラスであのタコ殺せそうな人数ってどれ位だと思う？」

するとカルマは聞いてくる。

「……それは単独ですか？」

「……単独でも可能性がある人いるの？」

「……一応一人。いやがんばればもう一人います。」

それが俺が出した結論だった。このクラスにはそれほどの人がいる。

「そっか。」

「……」

多分カルマは気づいてるな。最初にいった人物は。

おの後は無言で廊下を歩き続ける。そして大部屋を開けると

全員が輪になって集まっていた。

「何してるんですか？」

「あく羽川は体験ないから知らないと思うけどみんなで恋話してるんだよ。」

「恋話？」

「好きな女の子のことについて話すんだよ。」

あーなんか嫌な予感するなあ

「おくカルマ、羽川良いところ来た」

「おまえらクラスで気になる娘いる？」

「羽川はあの二人以外な。」

逃げ場も塞がれたか

「うーん。奥田さんかな」

おく両想いだ。と心の中で思う。恋愛ごとには手出しするのはやめておいたほうがいいだろう。ってことはこの中だったら3組かな？

「羽川は？」

「えーっと。」

少し考える一番に思いつくのは神崎さんだがそれ以外はあまりつかない

「……あまり思いつかないですが唯一思いうかぶのは神崎先輩くらいですね。」

「……また羽川ハーレムに一人追加されるのか？」

「マジでシャレにならない冗談はやめてください。ってか羽川ハーレムってなんですか？」

「……実際そうなんじゃない？」

「……だよな。」

と俺が前を見ると

「……でもこの話先生のいる前でやってよかったですか？」

「えっ」

俺が指さすとその話をメモってる死神がいた。そして逃げる。

すると男子全員が死神を追いかけていった。

ってかメモ見ると桃花、あかりも上位にいるんだな。そして神崎先

輩トップだし

あれ？これ俺結構ヤバくね？

倉橋先輩は烏間先生のことが好きだし

「……すげえなこの教室。」

改めて思うしかも3人は嘘ついてるし

すると一人ぼっちになったので俺は仕方なく廊下に出る。就寝時間ではないけどまだ眠くないし少し誰かと話したかった。

俺は教員室に行こうと考えたが烏間先生に叱られる可能性がある。

外に出ようか。

そう考えた。俺は一階に降りようと歩くと

「羽川くん。」

すると神崎先輩に話しかけられる。

「はい?」

「えっと、ちよつといいかな?」

「別にいいですけど?」

「羽川くんは私のことどう思ってるのか聞いていいかな?」

「……はい?」

「あの攫われた時に大切な人は守る。だからまずは私を守ってくれ
るって言ってたから。」

そんなこと言ってたか?

おれは少し思いだしてみる。

間違えてもいい。失敗しても何度でも立ち直れます。俺も一度大
切なものを失いました。家族も財産も、大切な人を失いました。

でももう同じことは繰り返さない。今度は絶対に全部守ってみせ
る。一度間違えたならまた同じ失敗を繰り返さなければいいんです。

……だからまずは神崎先輩を守ります。嫌な思いはさせません。
だから少し待ってて下さい。すぐに終わります

あ、これ俺が神崎先輩を大切な人だと言っているように聞こえるな
「……すみません。多分俺のせいですね。大切な人は神崎先輩もクラ

スの一員として大切な人っていうことです。」

「……そうなんだ。」

「……」

「……」

互いに黙り込んでしまう。

気まずい。

「……でも、羽川くん。私は羽川くんのことが好きだよ。」

そんな中でも神崎さんはちよつと悲しそうにしていた。

俺は考える。俺はこの人をどうしたいのかを。

神崎先輩は嫌いじゃない。どちらかという好きなタイプだ。

でも桃花ともあかりがいる。

「それって告白ですよね。」

「うん。私も羽川くんの恋人にしてほしいの。」

私もか

もう本当にクズみたいなことになってるな。

自分でもそう思うから余計に辛い。

どうしよう。嫌いじゃないし多分二人がいなかったら承諾してるんだろう

……でもここは

「……正直なところ、二人がいなかったら了承してたと思います。でも俺は二人のことが神崎先輩以上に好きなんで、神崎先輩の告白は」「こうちゃん。」

するとあかりが叩いてくる。

「なんだよ。ってか聞いてたのかよ」

「うん。でもこうちゃん私たちは別に構わないんだけど。」

「……は？」

あかりの回答に困ってしまう。

「だって今更でしょ。康太くんが最低なのは。」

桃花も聞いてたらしくため息をついてくる。

「でもちゃんと私たちのこと考えてくれていたし、それに康太くんが何をしたのか神崎さんに聞いたの。」

「……マジで？」

「うん。どうせ無意識にいったんでしょ。本当にこうちゃんは気をつけた方がいいよ。」

「……はい。」

はあ。もういいやどうせ何言ってもこいつらの意見は変わらないしどうせ言い返される。

俺ほんといつからこんなこの二人に弱くなったんだろう。

「神崎先輩。」

「う、うん。」

少し神崎先輩も引いてるし

「正直彼女二人いますし正直そんなクズですけど。そんな俺でよけれ

ば、お願いします。」

「はい。お願いします。」

これでまた彼女が3人になったのか。

「……………どこまで堕ちるんだろう。」

「あの、迷惑じゃなかった？」

「いや、普通に嬉しいですし好きだからいいんですけど。優柔不断な俺が本当に嫌になってくるんです。」

正直最低すぎる。

本当この後どうなるんだろうな俺は。

夢物語

「……で、結局こうなるのか。」

俺はダンボール箱を見てため息をつく。

「うん。これからお願いします。」

目の前には神崎先輩が立っている。

はぁ部屋がどんどんなくなっているな。

元々4LDKあったのはいいんだけど、なんでこんなことになった。

「……えつとなんで住むことになったんですか？」

「えつとね、昨日自分のお父さんと進路のことで大げんかしたんだけど、その時に家を追い出されちゃって。」

「……それであかりねえから誘われたつと。なんだかすごく策略を感じるんだが。学費とかはどうするの?」

「お母さんが高校までは出してもらえるみたいだけど……」

「大学までは難しいと」

すると神崎先輩は頷く。まあ俺も生活は厳しいなあ。まあいいか

「そのお母さんは名義も貸してくれるのか?それだったら一応払えるけど?」

「えつ?」

「最近臨時収入があつて5億手に入ったから1億ぐらいなら出せるけど。」

確か大学に行けるお金が文系だったら100万〜300万くらいなので十分足りるはずだ。

「えつと羽川くんなんでそんな大金?」

「防衛省からくすねとつた。」

すると神崎先輩が絶句してる。

「修学旅行の案件あっただろ、あれで生徒の安全を考えずに暗殺を決定したなんてひろまれば防衛省どころか世界中から非難される。それをコネにして大金を貰った。」

「……」

「まあ正直神崎先輩も分け前の半額は貰うべきだからもう5億は後から渡すつもりだけど。」

「えっと。羽川くん総計どれ位貰ったの？」

「まあ理事長の分とあわせて15億。危険な目に合わせたからもつとたかろうと思えばたかれたけど烏間先生のことを考えてやめた。」

「……」

「つてか多分100億くらいなら日本政府から脅せば幾らでも手に入るし明日くる転校生を使えばもつと稼げる。」

ついでにマンションもこの一室は俺が買い取ったし、隠蔽費に理事長に一億払ったし自分の間は大丈夫だろう。

「……まあそんな大金すぐに神崎先輩に渡したら大変なことになるしそれにちよつと暗殺教室で安全性を守る為に3億ほど使わないといけないから。自分の利益は少ないけど。」

「……えつとその3億って何になるの？」

「マツトとか命綱そんな感じのものだよ。個人名義で買わないといけないからめちやくちや高い。これから高度な訓練をしないとイケないから安全性を兼ねてな。国家はそういうやつ結構払わないから俺に負担がくるんだよ。あと防犯カメラとか。殺し屋が授業の邪魔したらいい迷惑だろ。だから半径1kmと裏山全体に監視カメラ設置するんだよ。」

「……なんだか普通だね？」

「俺のことなんだと思ってるんだよ。おかげで俺の利益50万しか残ってないんだぞ。あとPCももうメモリーがないし新しく買い換えないと。」

本当にお金があってもあつてもすぐに消えていく。

安全性を考えるとしようがないのだが

「なんかすごく大変そうだね。」

「まあそれをあかりと桃花いないところでやってるからな。余計に大変なんだよ。」

「あかり？」

「ああカエデのことだよ。あいつ諸事情あつて偽名使ってるから。……つてか全部話さないといけないかな？」

「あつ？そのことなんだけど。私聞かないでいいかな？」

「……気にならないの？」

「ううん。気になるんだけど、でも今が大切だから。」

なるほどな。桃花とあかりは聞くつて答えたけどそういう考えもあるか。

「了解。じゃあとりあえずあかりのことさえ黙ってくれたらいいから。一応バレたらかなり面倒くさいことになるし。」

「うん。わかった。」

「なら、片付け手伝える範囲で手伝うよ。さすがに女子だからあまり触らない方がいいものがあると思うけど。」

「うん。ありがとう。羽川くん。じゃあ、ゲームとかお願いしてもいいかな？」

「……家庭内ゲームはもってくるんですね。」

少し呆れてしまう。親の縁もいつかは修復させればいいか。

「そういえば、神崎先輩。名前どうしますか？」

「えっ？」

「いや、有希子って呼んだ方がいいですか？それとも神崎先輩って呼んだ方がいいですか？」

あの二人の時は少し文句言われたし先に決めといた方がいいだろう。

「え、えっと。」

すると顔が真っ赤になる

「……名前で呼んでほしいな。」

……なるほど、全く違うタイプの人だな。

あかりも桃花もどちらかという恋愛には積極的だからな。

「……わかりました。でも俺はどっちでもいいので有希子のペースで大丈夫です。」

「うん。」

「後この家毎食イリーナが遊びにくるのでそれにも気をつけてください

い。基本猥談ばつかなので。」

「……」

すると顔を真っ赤にする神崎先輩。そういえばこの人イリーナの授業顔真っ赤にしてるもんな。

……なんか可愛いな

なんかすごく守ってあげたいと思う。

「……そういえば茅野さんと矢田さんは？」

「イリーナと買物。あの先生ブランドものしか持ってないから安物をコーデイナートしにいつてる。」

なんか本当に仲良くなつたよなあいつら。

少し嬉しく感じる。

「まあ、晩飯食つてくるって言ってたから遅くなるんじゃない？多分気遣つてるだと思っけど。」

「……えっと。ってことは。」

「一応二人きりになる……」

すると黙り込んでしまう。なんかすごく意識してしまうんだけど。

「……」

「……」

お互い黙り込んでしまう。正直俺もあまり恋愛ごとには弱いんだよな。

有希子の方みると顔真っ赤だしでもなんか

「有希子」

「あ、なにかな？」

「抱きしめていいか？」

「えっ？」

驚いてる有希子にさすがにいきなりすぎたかと頭を搔いてしまう

「えっと、なんていうかちよっと可愛すぎた。」

少し顔を背けてしまう。杉野や男子から人気なのかわかった気がする。

清楚でおしとやかで美人でそして照れ屋な女の子

……やばい普通に可愛い。

「えっ？あつ？」

なんかもうすごく顔が赤くなっている。

「……無理しないでいいぞ。別に」

「え、ううん。ちよつと急で驚いただけ。うん。もちろんいいよ。」
「な、なら。」

少しだけ前から抱きついてみる。

すると軽くて簡単に引き寄せられた。

「あつ」

耳元でそんな声がする。

とても柔らかく強く抱きしめると壊してしまいそうで怖い。甘くていい香りもするし。

それにすごく暖かい。

なんか人の温かさってあまり経験がない。

だからだろうか。

恥ずかしいけどずっとこうしていたい

すると今度は有希子の方も手を後ろに回してくる。

弱々しくても確かにある手

やばい。超幸せだ。

何分抱きついていたのでだろうか

すると有希子から離してくる。俺も名残惜しいが有希子を手放す。

有希子の方を見るとお互いに顔が真っ赤になっている。

「そういうばっか飯どうしよっか？」

「あく俺作れないんだけど、有希子は？」

「簡単な物なら。私もあまり。」

「そっか。……じゃあどうしようかな？」

「……」

すると不思議そうにこつちを見る有希子

「どうした？」

「えっといつも料理が出来ないって意外って言われてたから。」

「そうか？苦手なもの一つや二つくらいあるだろ。それにあかりだつて桃花だつてやつぱり苦手なことはあるし。俺なんか一番有希子た

ちに最低な関係を持つてるんだぞ。それに完璧な人間なんて普通じゃないんだ。人前では完璧な人間でもやっぱり欠点は存在する。でもさ欠点は他の人に補って貰えばいいんだよ。今すぐに料理が出来なくたっていいんだ。ってか俺はもう任せることにした。……正直ってか料理だけは本当に無理。色々細かい工程が多すぎる。」

「……そうなの？」

「ああ。味付けとか調味料の種類とか多すぎて。……って話脱線したな。とにかく俺が言いたいのはそういう弱いところはカバーしあつていけばいいんだよ。正直最低だけど人が集まれば弱いところも補えるだろ。別に意外だとかそういうことはあつて当たり前のことだよ。俺だつて二人と住み始めてから意外なことか結構見つけてる。お互いに嫌なところだつてあるし実際喧嘩も結構する。でもなそれが当たり前なんだ。全部が好きなことなんてない。理想や想像と全く違う結果になったりもする。でも大事なのはそれが幸せなのかって話だよ。一緒にいたくて他人に気遣うことがなく言いたいことはちやんと言える。そんな家族を俺は作りたいと思つてる。」

昔の俺が出来なかつたこと。正直今まではずっと不幸だつた。

でもこいつらとならなくてもできる気がする。苦しいことや悲しいこと、嫌なところだつて絶対にある。

でもそこを乗り越えて行けると思う。俺が幸せになるには一つ一つのピースが一つでも失われたら叶わなくなる。

でも、それだから幸せになりたい。

ずっとそばにいたい。

「……まあ、理想で夢物語だけだな。でも、どれほど最低で世間に嫌われようがなんて言われようが構わないけど。絶対に有希子は幸せにしてみせる。絶対に殺されないし守ってみせる。これだけは守ってみせる。」

「……」

「だから、俺がもし困ったら助けしてくれると嬉しいかな。もう一人で抱え込むことはしないから。」

人に頼ること

ずっと俺がしてこなかったこと

助けを求めて人を人だと思つてなかつたあの頃

失敗し続けてきた

失敗しかしてこなかった

でもこの教室でしてきたことは絶対に成功だと思いたい。

そのためにも俺は俺にしか出来ないことをしたい。

「じゃあ、本当にどうしようかな？ 桃花が帰ってくるまで待とうかな？」

「康太くん。」

すると有希子が抱きついてくる。

「うお。なんだよ。」

「私康太くんのこと好きになって本当によかった。」

その時の有希子はとても綺麗でとても素敵な女の子だった。

100億の価値

機械とはなんだろうか？

俺は開発者として多くの技術、武器、防具を生み出してきた。

しかしそれは自分のためにしてきた

生きるために

信用されるために

作って提供し、危険だとわかったら自分が管理し、それ自体の作り方を完全に消してしまおう。

開発する

それは人のため。国のため。色々な使い方があるだろう。

でも俺は

自分のために使うだろうな。

「おはよう。羽川。」

「おふあようございます木村先輩。」

「どうした？眠そうだな？」

「もしかして大人の階段登っちゃったか？」

岡島先輩が急に入り込んでくる

「いや、昨日有希子に家庭用のFPSのオンラインゲームを教えてもらっていたんですけど……そしたら操作方法がわかってからちよつと嵌まりすぎちゃって、徹夜ですつとやってみました。」

「……」

「途中から有希子にもkiller数が多くなって、寝させてくれなかったっていうのが一番の原因ですが。」

「……なんか普通に中学生みたいになってきたな羽川。」

「まあよかったんじゃないの？来た当時の羽川よりは。」

「そうだな。案外面白いし弄りがいいし。」

するといつものグループが形成される。なんか少しずつ距離が近づいているような気がする。

そして席に着こうとすると

後ろに黒い長方形の物体が置かれている。

「……あつ！忘れてた。今日自律思考固定砲台が来るんだった。」

「「知ってたのかよ!!」」

「ああ、ちよつと知り合いから聞いてた。」

「……やっぱり羽川は羽川だな。」

全員が頷く。そういえば

「……しまった。せつかく作ってきたハッキングソフトを忘れてた」

「「何作ってるんだよ」」

「いや。情報は武器になり金にもなりますから。せめて研究費くらい15億はほしいなあ」

「……羽川がおかしい。15億なんて普通稼げる金額じゃねーぞ。」

「……しかも乗っ取る気満々だな。」

「だってあんなおもちゃ普通じゃ数百億円作るのに使うんですよ。昔のうちでも作れないような金額なんで、せつかくだし色々いじりたいなあって。」

「おい。今兵器をおもちゃ呼ばわりしたぞ。」

「うん。さすがにおかしいと思うんだけど。」

「ってか多分俺作ろうと思えば、同じ値段があればもつと優秀な物作れるのになあ。」

俺はため息をつく。あれ位のものなら固定するんじゃないやなく空中で動かせるようにして、さらに小型化できる自信がある。

「……おかしい。久しぶりに羽川がおかしいと思った。」

前原先輩がなにかいってるが気にしないでおこう。

「皆知ってると思うが転校生を紹介する。ノルウェーから来た自律思考固定砲台さんだ。」

「よろしくお願いします。」

「先生！改良したらダメなんですか？」

「ダメに決まってるだろう!!」

俺の質問に烏間先生は即答する。

「なんか康太くんテンション高いね。」

「だっていいおもちゃがあるのに使わない手はないだろう。せつかくの機会だし、グレードアップさせるついでに技術もパクらないと。」

「……あの〜羽川さん？」

「なんだ？」

「えつとマスターがお話をしたいと。」

「ん。繋いで。」

「「「は？」」」」

全員が驚いている。

『もしもし羽川様でございましたでしょうか？』

ノルウェー語か

『ああ。そうだけどあったことあるか？』

『いえ。お名前だけは存じています。えつとそれでなんですか？』

『農業1つと工業1つ後、漁業1つと交換でいいか？そっち10億ド

ルを日本円にして送ってくれたら嬉しいんだけど。』

『ええ。構いません。それじゃあ後々契約書と設計図、お金をいつも

のどこに入れてさせてもらいます。』

『了解。んじやまた取引しようぜ。んじやな。』

『はい。それでは失礼します。』

すると電源が切れる。

「……えつと羽川くん？」

「あ、今からそいつ俺のものになったのでよろしく。」

「「「はあ？」」」」

「ちよつと羽川？今10億ドルとか言ってたけど。」

そういえばイリーナ多くの言語話せるって言ってたけど、ノル

ウェー語も射程内だったのか。

「「「……」」」」

全員がもう声を出せなくなるくらい絶句している。

「いや、そんななんいつも取引だし、今回俺の方が損してるし」

「……羽川さん、マスターが利権や所持者を全部譲るって」

「まあやつとくさ。ちよこつと性能調べたいから後から暗殺してくれ

るか？。」

「えつと10億ドルって何億円？」

「相場で約1000億円以上」

「ちよつと待った羽川って追われてるんじゃない。」

「それ日本政府だけなんだって。こうちゃんが言ってた。」

すると騒めきだすクラスメイト。とはいっても

「まあ俺が取引するのは3年に一回ぐらいだしそんなもんでしょ。これ二回目だし。」

「いや、額が殺せんせーの賞金より高いんですけど。」

「でも今回は多分100億ドルは損してると思うぞ。技術一つと三つの交換だし、名声とか合わせるとそれくらいは余裕で超えるぞ。」

「……ちよつと待って、羽川くんってまだ全然本気出してないの？」

「なにを今更。元々おれの研究が技術の開発が本職だからこの程度は余裕。ただお金の額が大きすぎるからな。取引先が国だし。それに俺も100億のターゲットっていうことみんな忘れてないか？」

するとみんなが思い出したようにしている。完全に忘れてたな。

「ってまあこういうこと。正直なところ、俺はこういう研究とかに關してはかなり強いから。多分先生なら簡単に殺せるくらいに。」

「……」

みんなが呆然としている。まあそうだろう。

「……それではマスターご命令を。」

「あ、俺基本手を出さないから。自分で判断してくれ。」

「……それは自分で判断して行動すればいいということですか？」

「今はね。ソフト作ってないしそれに性能も確かめたいしな。ちよつと世界の力見てみたいし。その代わり授業中じゃないこと。後今日は先生の本気もみたいな。」

「にゅや？」

「……殺意に触れることなくどれ位までアップデートできるか勝負してみないか？先生。」

俺は笑う。

「期間は今日から2日間。俺は多分今からお金下さないといけないから一日かな。それくらいの手元あげても大丈夫だろ。あんたもこういうことは案外できるし領収書は俺宛で構わない。まあちよつとしたお遊びだよ。別に勝ったって負けたってどうでもいい

だろ。こいつをちゃんとした生徒にするためには。」
すると死神はこつちを見る。

「どういうことですか？」

「今の所コミュニケーション能力はこいつ皆無だろ。単独暗殺にするための軍事兵器と言っている。たぶんお前を殺すために銃を形成し、自分で分析して成長し続ける銃なのだろう。でもそいつはずっと卒業までにずっと打ち続けた、ら殺せる可能性は90%以上だと考えているんじゃないのか？」

「……はい。その通りですが。」

自律思考固定砲台は首肯する。まあ機械だし当たり前か

「でも、本当は10%もないと思うぞ。こいつだって勉強する。自分が失敗したことをきっかけに自分の強化を試みる。知ってるか？実は天才なんていっぱいいるが、その一握りしか自分の才能に気づかず、に一生を終えるんだ。さらにまたその中の一握りが努力をし続けて、英雄とか神とか言われ始める。」

死神、天性の才能を持った殺し屋。しかし殺し屋になってからも訓練を怠ることはなかったらしい

そんな死神が今の立場で努力してないわけがない

「……まあだから俺とそのタコが教えてやるよ。クラスメイトと協力して殺す方法と仲間の大切さっていうのを。」

そして二日後

「……ファゝ眠い。」

「どうした？ってそりゃ眠いはずだよ。矢田から聞いているぞ。ほとんど不眠不休でソフト作ってたんだろ。」

「まあそうですね。」

「しかもちゃんと3人が寝てから作り始めたって言ってたけど……」

「結局桃花は分かっていたそうで夜食とか色々作ってもらってました。」

「……いゃ、そうじゃなくて別に一日くらいソフト作りに集中していても美味しかったし」

「……いや、そうじゃなくて別に一日くらいソフト作りに集中してよ

「かつたんじゃねーのか？」

「あく全員に確かに言われましたけど断りました。」

「なんで？」

「だってこれ遊びなんですって。もしあいつらとの時間が失われるんだったら、俺はこんなこと絶対しませんよ。」

「そうただの遊びだ。自分がやりたくてやるただそれだけ。」

「だから自分の日常が悪化するんだったらすぐに辞めてる。大切なものを失うのは嫌だしな。」

「……なんか憎つたらしいけど、羽川がもてる理由わかるな。」

「うん。でも殺せんせーに勝てるか？」

「ほとんど無理。六時間で三つしかできなかつたし結構簡単なものばかりだし」

「やっぱり思う存分とはいかなかった。だから改良点はまだまだあるけど、とりあえず今はこれだけだ。」

「……なんのためにやったんだよ。」

「自立思考固定砲台のためかな。さすがにあのままだったらクラスに馴染めないだろうし、なによりあのままだったら絶対ボツチ確定だぞ。せつかくの楽しい学校なのに、一人寂しくボツチっていうのはやっぱりかわいそうじゃないですか？」

「機械のためってお前やっぱりすげえよ。」

「ってか先生は昨日の夜中に改良工事終わらせてるんですよ。なのに俺追い出されてるんですか？」

「カエデと桃花が教室に入って様子を見にいったきり戻らないし」

「まあ、ちよつとな。」

「さすがにな。あれは。」

「ちよつと言わずらそうにしている菅谷先輩と木村先輩」

「……まあいいですけど見れば一発でしょうし。」

「ああ。でもびつくりすると思うぞ？」

「こうちゃん入っていいって。」

「するとあかりが呼びにくる。でも戸惑っているらしく少し動揺がみえる。」

「……」

あかりねえで動揺するって結構やばいぞ。

まあ渋つてもしょうがないのでいくか

俺は少し覚悟を決めながら歩く。

そして教室前に着くとクラスの中から誰の声も聞こえない。

俺は一息いれ決心して入ると

「おはようございます。マスター。」

「……は？」

俺は完全に固まってしまう。理由はいくら何でも

「変わりすぎだろ。」

全身が映り、柵ヶ丘の制服を着ている少女が画面に映り、無表情

だったのが表情豊かになってるし。

「……なんか。思っていたのと違う。」

「うん。多分全員がそう思ってるから。」

「それで強調の暗殺要素は？」

「はい。加えてありますよ。クラスメイトと協調した射撃性能アップ

を加えてさらに色々なデータを詰め込みました。」

「……なるほどなあ。じゃあ多分これ俺の勝ちかな。」

「「「えっ?」」」

「うん。私も康太くんの作ったもの見たんだけど……さすがにやりす

ぎだと思っただけど。」

桃花が呆れている。まあ

「見てもらった方が早いか。じゃあ一つ目と二つ目。先生まだメモリ

に10G入れられる余裕ある?。」

「はい。大丈夫ですよ。」

「んじやダウンロードしてくれないか?。」

そして自律思考固定砲台はダウンロードを始める。

そして終わったとたん。

「……?何も変化はおこっていないと思いますか?。」

「……まあまあじゃあ最初に三つ目からかな?。」

俺はかばんからあるものを取り出す。

するとみんなは不思議そうにそれを眺める。

「えつと？妖精？」

「そうだな。妖精のロボットだよ。自律思考固定砲台。一回シャットダウンしてみて。」

「はい？」

「いいから。」

そしてすると大きな機械の画面が黒くなった瞬間。

「えつ？なんで」

その妖精が動き始めた

「えつ？どういうことですかマスター。」

「これは一応成功かな。まずはこのフェアリーについてなんだけど、だれかSAOを知ってるやついるか？」

「ちよつと待っててください。もしかして羽川くんはユイを作ったんですか？」

「「はい？」」

竹林先輩の言葉に頷く

「まあ、そんなかんじですね。まあ似せたものですけど。ソードアトオンラインというラノベの中に、ユイっていうまあNPCかつ主要キャラがいるんですけど、そのAIと自律思考固定砲台のプログラムと似てたので作ってみました。まあ他にも色々なプログラムを組ませてありますが…まあ色々組ませてあります。自律思考固定砲台、説明書理解してたら飛べるよな？」

「……ちよつと待って下さい。えつと」

すると羽を上下に動かし始める。すると宙に浮き始め飛び始める。「移動方法にもなったはずだし、その前にこれ食って。」

俺はポケットの中からクッキーを一つ取り出す。

「……はい？」

「いいから。」

すると自律思考固定砲台は近づきクッキーを受け取る。そして食べ始める。すると一口食べるとまた驚く。

「……甘くて美味しいです。」

「よし。成功。」

「「……」」

すると全員が唾然としている。

「えっと、どういうことですか？」

「五感と痛覚のプログラムと、好みと意志をランダムに決めるプログラムを打ったんだよ。例えば高いところから落下したら人と同じように痛いって感じるし、他にも眩しい、うるさいとか美味しいとか好きだとかそういうものを自動設定してある。もちろん俺にも何が好きで何が嫌いなのか全くわからないけど。」

「ちよつと待って、それって私たちとほとんど」

不破さんの言葉に頷き。

「ああ同じだよ。この状態はほとんど俺たちと同じ。一人の妖精として作ったものだよ。制作費は全部自作で約900億円」

「「はあ？」」

「ちよつと待って、それをたった一晩で仕上げたの？」

「まあ本当は人型作りたかったんだけど、材料費も時間もなかったからそこがダメだったかな？」

「「十分すごいわ!!」」

全員が突っ込む。

「えつとマスター？」

「ん?どうした？」

「あの、この技術かなり危険じゃないですか？」

「まあ危険だろうな。だってこの技術さえあれば普通にクローンや人が作れるんだし。材質も人の体と似た様なもので作ったから表情も作れる。それにさつきクッキー食ったろ。あれを腹の中で燃やして小さな火力発電機を作ったから、食事を取り続けたら無制限に動けるわけだし。まあ飲み物とかの液体状のものを与えたら一発で壊れるけどな。まあそうしたら自動的に本機、つまりこれに戻るようになる。」
「ってかこれが漏れたら戦争が起こってもおかしくないな。」

「……あとLAIMにアプリアップしたからダウンロードしてほしいんだけど。そのアプリは自律思考固定砲台が見た情報を共有できる

ようになつてるから。ついでにGPS付き。二代目死神という殺し屋のスキルを奪って手の人差し指から先生の動きを1秒止められる神経針、まあ人間だったら3分間効くんだけど、それも詰め込んである。まあこれは暗殺つてより自分たちの防衛に使えるしな。」

「……なんか殺せんせーの技術が霞んでみえる。」

「しかもこれを遊びつて。」

「羽川くん一体どんな頭の構造してるの?」

全員がもう突っ込み疲れたようにしている。

「えつとマスターなんでこんなことを。」

「まあ。クラスメイトのためだよ。お前はあのままだったらただのプログラムされた兵器だったろ。でも痛みがあり味がわかり感覚がある。そしたら感情が生まれてお前が作られた意味ができると思っただよ。まあクラスメイトと仲良くする方法は先生が考えてきてると思つたから、俺はお前に幸せになつてほしくてこれを作つたんだよ。」

「幸せ?」

「そう。幸せ。俺の目標はクラス全員が幸せに笑つて卒業するのを見送ることだからな。だから誰一人欠けたらいけないんだよ。機械にだって幸せになれる。自分がやりたいことを見つけたい。ただそれだけ。」

そう。俺には誰も欠けたらいけない大切な人だ。絶対に守り、一緒に楽しむ。それが俺の願い。

「……だから今度はなにがやりたい?何をしてほしい?やりたいことやってみたいこと全部叶えられるわけじゃないけど。できるだけ協力する。だから言つてごらん。次は何が欲しい?」

「……えつと、マスター、家族と名前が欲しいです。」

すると自律思考固定砲台はいってくる。

「……そうだな。名前か。なんかいい案ある人いない?」

「「えつ?」」

「俺ネーミングセンス全くないから誰かつけてくれると嬉しいんだけど。」

するとみんなは一斉に考え始める。

「えつとじゃあ元の名前から一文字とって律は？」

不破先輩がいう。

「安直〜」

「お前はそれでいい？」

「はい。嬉しいです。」

前原先輩の言葉に頷く。

「じゃあ律と家族になりたい人いる？」

「二「はい。」二」

寺坂グループとカルマ以外全員が手を挙げる。てか死神まで挙げている。

「……じゃあこの中から選んでいいぞ。」

「えっ?」

「だからお前には意志があるから選んでこい。ちゃんと受け入れられてるしちようどいいだろ。」

「……はい!!」

すると飛んでいき少しホツとする。みんないやつだし大丈夫だろう。すると律は少しだけ飛んでいき。

「渚さんのお家にお邪魔してもいいですか？」

「えっ?」

「はい。」

どうやら渚のところを選んだらしい。多分大丈夫だろう渚なら。

「じゃあこれから潮田律なお前の名前。」

「はい。」

その笑顔は紛れもなく嬉しそうだった。

幼馴染

梅雨

雨は多く降る季節

みんなが憂鬱そうに歩いてるが昔は雨は好きだった。

雨の時はあかりがよく遊びに来てくれた。

撮影が中止になるときてくれた。

そしていつも遊び、話してくれる。

それがとても嬉しかった

でもいつからか嫌いになってしまった

全てはあの日から始まったからだ。

「……こうちゃん。」

「ん？」

起きるとあかりが立っていた。

「あれ？ここは？」

「教室だよ。珍しいねこうちゃんが寝ちやつてるって。」

「……ああ。寝てたのか。」

「うん。ずっと寝てたよ。殺せんせーが起こしても起きなかつたくらいに。」

「そっか。」

「そっか。」

俺は少し思い返す。そういえば最近あかりと二人きりの時間って

全く取れてなかったよな

「……なあ。今日一緒に帰らないか？ちよつと昔話したいんだけど。」

「ど。」

「……えっ？」

「二人きりの時間取れてなかっただろ。せつかくだし美味しいとこ教

えてくれないか？」

「……いいの？」

多分外食することについてだろう。一度誘われた時も何度も断つ

てきた。

「うん。もう怖がってばかりもダメだしなんかデートしたかったんだ

よ。修学旅行の時もうやむやになったし。それに初デートはあかりといきたいんだ。」

全ては俺が言い出せなかったから。
だからあかりと二人きりになれなかった。

桃花とは律の開発の時ぐらいだからとってやりたいけど

あかりねえと最初のデートは行きたかった。

「……うん。いいよ。」

「そーいやみんなは？」

「もうみんな帰ったよ。今何時だと思ってるの？」

時間をみるともう四時を回っていた。

「そっか。桃花も有希子ももう帰った？」

「うん。二人とも友達と遊びに行くって。」

「そっか。ならあかり。」

「何？」

「キスしてもいい？」

するとあかりが顔を真っ赤にする。

「こ、こうちゃんな、なにを？」

「……なんかさ。雨の日だと少し寂しくなるんだ。なんか今でもあの日のことを思い出してしまっただけ。」

土砂降りの中ずっと走り続けたあの日。ずっと前のことなのに嫌でも雨音を聞くと思い出してしまう。

「なんか。ずっと怖い。怖いんだよ。あかりと桃花と有希子と離れることになるような気がして。いつもは強く見せられてもやつぱりトラウマがずっと残ってる。……だから」

「こうちゃん。」

「なん」

声を出す前にあかりの顔が近づき口に柔らかいものが当たりすぐに離れる。

「……」

「……」

たった一瞬だったけど確かにキスしたよな。

「……こうちゃんが弱いところみせるのって私にだけだよ。昔から。」
「……最近では死神とかにも見せてるけど。でもやっぱりあかりがいい。なんかすごく安心する。」

いつもはかっこつけ強い自分を見せているけどやっぱりこういう時は昔からずつとあかりがいる。

「なあ、もう一回だけダメ？」

「……はいよ。」

すると今度は俺から近づき唇をくっつけ舌を入れる。

「っ!!」

どうしても離したくなかった。手放したくなかった。自分の全部を受け止めて欲しかった。

あかりは抵抗することもなくただずつと大人しくしている。

子供の頃とは違う

もう二度と手放したくない。

そして5分くらい経ってから息が続かなくなり一度離れる。

「……」

「……」

お互いに顔が真っ赤になり見合わせる。

「……こうちゃんのバカ。」

キスのことではないことはわかっていた。多分もつと昔のこと

「……ごめん。」

「なんであの時相談してくれなかったの？」

「……巻き込みたくなかった。あかりねえには迷惑かけたくなかった。」

でも心配も迷惑も悲しいことも全部負わせてしまった。

辛い思いをさせてしまった。

辛いことにもあった。でもそれでも

「また会えて良かった。」

「うん。私も。」

「……さつき甘えさせてもらったから今度は」

あかりを抱きしめる。言葉はもういらぬ。

多少の言葉はなくても、それでも伝わる。

あかりねえが何をいいたいのか。

あかりねえが何をしたいのか

でも、気持ちだけは共有できない

どんなことであつたのか

どういう気持ちでこの教室にきたのか

どのいう気持ちで触手に手を伸ばしたのか

あかりねえが泣き始めると同時に思う

全部の気持ちが知りたい

あかりねえの気持ち、昔何があつてどんな気持ちになつたのか

あかりねえだけじゃなく全員の悩みを解決したい

苦しみを全部受け止めてあげたい。

理解することはできないだろう

でも少しでも解決することができるのならそれでいいじゃないか

「……本当に美味しいな。」

「うん。私のオススメの店なんだ。」

あかりと二人でケーキを買い食いすることになった。

「……でも本当にいいのか？カフエとか入らなくて。」

「うん。こうしてこうちゃんと二人で歩くのが夢だったから。」

「そっか。」

すると

「あれ？茅野と康太じゃん。」

すると後ろには杉野と渚、律と岡野先輩がいた。

「杉野たちなにしてるの？」

「このケーキを律に食べさせてあげようと思って。」

「はい。どれも美味しかったです。」

「どうやら律は甘党みたいなんだよ。それで辛いものが苦手らしくて。」

もう何回か味覚について調べてたんだな

「なるほどな。んじゃ今日はもういくわ。」

「えっ？どうしてですか？」

「岡野先輩。律に説明しといてください。」

「わかった。」

「カエデ行こうぜ。」

「う、うん。」

俺は手を引いて歩く。

「……よかつたの？」

「まあな。言っただろ。二人で帰ろって。……誰にも邪魔されたくないんだよ。この時だけは桃花にも有希子にも。」

ずっと夢見てた。二人で学校生活を送りたいって。学年も違うし学校にも行けなかったあの頃。

「それにあかりには言っただけでなかったよな。俺の気持ち。」

言葉はいらなかつたけど言わないとダメだろう

「ずっと、好きでした。別れる前からずっと大好きでした。」

「うん。私も好きだよ。」

ずっと言えなかつたこと

やつと言えた

一番最後だったけどやつと言えた

……ただ

「じゃあ帰ろつか。」

「うん。」

時にすれ違い、時に間違えることもあるだろう

いや、もうすでに間違えてるのだけれども

まあこれでいつか

完璧な人間

殺し屋

それは命を狩る者であり俺の敵だ

しかし元々殺し屋は職場でトラブルに巻き込まれた人たちが集まっている。

そういう人は本当は優しく話のわかる人ばかりだ

後は紛争地で親族を亡くしてしまった人など多くの理由がある。

その中でも一番多いのは金銭的な問題だ。

借金のための暗殺が一番怖い

自爆や他の犯罪を恐れずにやってくるのだから

後は復讐

それはただいくつか目的のためだけにやるのだから

俺は一度ある人を殺すためだけに日本に来たと思っていた。

でも本心はただ二人の好きな人に会いに来ただけだとわかった。

そしたら昔殺しにきた暗殺者に殺しに来てくださいと言われ

幼馴染と再会し

彼女が3人できた

なんか不思議な人生だ

可笑しすぎて笑えてくる

でもずつと消えないこの憎しみは

どこに晴らせばいいのだろうか？

「……えつとどういう状況だこれ。」

「羽川くん気にしないでもいい」

「いや。ロヴロが俺じゃなく烏間先生を狙ってるっていうのが一つ。

二つ目それにイリーナまで烏間先生を狙っていること。三つ目はあんなに隠密行動下手でしたか？」

俺が授業で逃走中を（ハンターは作成した）やっている途中に烏間

先生に話しかける。

「……まあ。ちよつとな。」

「ふーん。ところで子犬のチワワの写真見ますか？最近散歩してたら

見かけたんですよ。可愛くないですか？」

「……見せてくれ。」

「了解です。あつ。一応授業中なんで写真LAIMで送りますね。」

「ああ。しかし、なぜ逃走術なんて教えるんだ？受け身から急に裏山をエリアを設けたおにごっこって。」

「そりゃ、多分一流の殺し屋なら。まずは100%生徒を狙うからですよ。」

俺がというと烏間先生が驚いている。

「どういうことだ？」

「囮として使われるんですよ。俺と先生を殺すための。……烏間先生俺が見つけられない暗殺者は基本俺しか狙わなかったんですよ。少しでも調べたらあかりとめぐりさんと交友情報があるのに。俺ならまずそれを狙います。」

「……」

「そうすると俺もまだ精神的なダメージが大きかったときなんで一番効果的な殺し方だったんです。でも誰もそこを狙わなかった。あの死神でさえも。」

「……もし羽川くんはその二人を使って脅されていたら。」

「多分死んでる。いや99%死んでる。佳奈が死んでいるってわかった時自暴自棄になった時以外はな。」

精神病によって発狂死していたと思う

「……一応このことは誰にも言っていないけど二代目死神暗殺準備に入っている。初代よりは腕も爪も甘い。でも多分最初に狙われるのはクラスメイトだと思う。それか先生以外の先生方。つまりはイリーナと烏間先生あなただ。」

二代目死神はスキルの質は雑だがスキルの多さで殺していく。殺し屋。それも一流のだ

「だから本来なら先生たちにも参加して欲しいんですがレベルが違いすぎるので。でも俺狙いでしょね。100%二代目死神は。でも正直生徒の安全性はそちら側に言ってるのに全く聞いてくれないんですよ。地球とクラスメイトどっちが大事なんて世間的にみれば地

球だってね。本当にふぎけてるんですよ。たった27人の命の保証もできないのに……先生を殺せるはずなのに。」

「一応俺もいるしあいつもいるが……生徒全員を守ることなんてほぼ不可能だろうな。」

「そして世界トップクラスの暗殺者が来た時は流石に俺も全員を守ることはまず無理です。だからみんなにはこう伝えました。完璧な人間だと思ったら即逃げろって。近寄りやすい今の俺みたいな人間がいたら即逃げろ。そういう奴は今のお前らでは勝負にならないと。」

すると烏間先生は驚いてる。

「知ってますか？完璧な人間なんていないんです。完璧な人は基本演技。どこか黒い一面を持っている。俺だってやっぱりその一面は隠してる。あかりにも誰にも言っていない。だから本当なら先生は俺を恐れないといけないんですよ。お腹見てください。」

烏間先生は下を向くと

「……いつのまに刺したんだ。」

対先生ナイフが刺してあった。

「いつって最初からですよ。話始めてからずっと烏間先生が気づかなかっただけです。俺が一番怖い暗殺者は何一つ冷静で殺気を一切みせないこと。いつ刺されてたのかも、わからない。そんな殺し屋。……そして唯一俺がそれを認めた暗殺者が初代死神。つまりあのタコです。だけでも俺はめぐりさんを知っているから。助かりました。熱心で優しくスタイルもいい。でも欠点も多い。それが本当の完璧な人間だ。……今の死神みたいに。」

「……！」

「……だってもう死神はこの学校の先生として馴染んでる。俺でさえもな。だから怖くていつも警戒しないといけない。」

俺はタブレットを烏間先生に渡す。

「……この授業を始めてからの結果をみてください。これある人だけ全くおかしな結果になってますから。」

「……これは？事実か？」

「ええ。律に記録を頼んでいるんですが。気配も全くない。実際のと

ころ防犯カメラで見てるんですがただずっと隠れてるんです。ひたすらに逃げもせず。隠れもしない。」

俺は少しだけ息を吸い

「ただ渚だけ。この逃走中一度も捕まったことがないんです。」

暗殺者の資質

このクラスには3人の天性の素質を持っている人がいる

一人目は死神。殺すために生きてきた人間。親も女も誰も信用ができないところで育った殺し屋

二人目は俺。羽川康太。平和な国で生まれ一度裏切られ全員から見捨てられ全員を信じられないようになったターゲット

三人目は渚。潮田渚。平和な国で過ごし家で少し悩んでいるが比較的普通に育てられた学生

それぞれに殺し屋の素質があった。

そしてそれぞれに想い、考え別々の道がある

でもそれがこの教室で交わった

「康太くん何してるの?」

すると急に後ろから有希子の声がした

「有希子か? ちょっとした考察を書いてるんだよ。」

「……考察?」

「そう。考察。例えば俺と先生のこととか考えてた。あまり見ないほうがいいぞ。昔のこととか書いてあるし。」

「そうなんだ。ねえFPSしない?」

「悪い。今日はパス。…あいつらは?」

「もう寝ちゃったよ。最初トランプしてたんだけど。」

「そっか。」

俺は時間を見ると夜11時を回っていた。

「そういえばイリーナご機嫌だったな。」

「だって烏間先生にナイフ当てられたんだよ。すごいよね。苦手なこととに立ち向かえるのって。」

「……そうだな。」

俺は少しだけ思う

「……なあ。有希子。もし俺が人を殺したら嫌だよな。」

「えっ？」

「……本当に殺したい奴が近頃あの教室に来るんだよ。全ての元凶であるやつが。先生を作った奴が。」

俺は今どんな顔をしてるのだろうか？

怒り。憎しみ。恨み。妬み。

負の感情が巻き起こってくる

「……でも復讐したいし殺したいけど。殺したくない。」

一緒にいたい人ができた

守りたい人ができた。

「……なのに今奴をどう殺してやろうかしか考えられないんだ。全てを殺すための道具にしか。先生もあかりも桃花も：有希子も全部全部奴を殺すための布石にしか。」

憎悪。ずっと会いたくて会いたくなかった人物がやってくる

「……そんなことしたくない。まだ人間でいたい。破壊兵器になんかなりたくない。人を殺したくない。でも殺さないといけない衝動が抑えきれない。」

俺は自分の異変に気付いていた

死への喝欲

殺すって快感に飲まれてる

もう自分じゃ止められないほどに

殺したい

殺したい

殺せ殺せ

殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

「……助けて。」

狂気

ずっと待ち望んできたこの時

来て欲しくなかったこの時

殺意が全て生み出し体がいうことを聞かない

憎悪が悪夢がすべて破壊を

悲しみや苦しみが死を求め

血だらけの自分を見て思うのだ

やっと殺せたと

……本当にそれで正しかったのか疑問に思いながらも

「ごうちゃん。今日どうしたの?」

「……お前ら今日何回目だよ。」

「だって今日の康太くん怖いよ。」

桃花とあかりがずっと朝から言い続けている。

「……別にいつもどうりだろ?」

「今の康太くんは私もちよっと」

「そうか?別に怒ってはないんだけど。」

あるのは殺意と憎悪のみ

ただその時まで時間を延ばして殺せればいい

今日は殺る側だ

「……そうか?別に変わったところなんて。何一つないような気がするんだけど?」

「うん。私もそう思うけど。」

木村先輩と倉橋先輩が不思議そうにしてる。そうだ。そう思ってくれると助かる

また少しずつチャイムの音が近づく。

「ごうちゃん?」

時の流れが遅く感じる

緊張

心拍数が早くなっていくのを感じる

もう誰が話しているのかも、何を話してるのもわからない

そうだ。全てを破壊しつくせばいい。
全てを生み出した元凶に制裁を

苦しみを

死を与えろ

全てを壊し

全てに死を

俺が味わった苦しみを味合わせたい

俺が味わった悲しみを

俺が味わった痛みを

佳奈、めぐりさんが味わった全ての感情をそいつにぶつけろ

殺せ。殺せ。殺せ、殺せ

どれだけ時間がたったのか今何をしてるのかもわからなくなって
くる

もう誰の言葉もわからない

そして待ちわびて来た声

「ごめんごめん驚かせたね。」

心拍数が一気に上がる

憎しみ。憎悪

負の感情がずっと押しつぶす

早く殺したい

早く絶望した姿をみたい

………だれか。助けてほしい

すると少しずつ視界がはれ周囲の状況が見えてくる

「ねえ。堀部先輩。負けるのが怖いのか？」

思ってもいない言葉を口に出している

何も聞こえない

やばいもう

止まらない

おにい\$&#%#”#%

こう\$#&’&%\$%&’

どこからか声が聞こえる

でも邪魔でしかない

ただ一つずつと信じてきたこと

そうだ、殺せばいいんだ

手に手応えがある

感触的に誰かを殴り飛ばしたんだろう。

「あーもううるせえな黙ってる。」

俺は胸から何かを取り出す

そして聞こえる発砲音

そつか。俺は銃を撃つたんだ

そして静まる教室に嫌悪感を抱く

何かぶよぶよしたものが俺に当たる

邪魔だ切り捨てよう

俺はナイフを取り出し切り捨てる

そして肩が急に熱くなる

でも関係ない

目の前にあつたものを壊し

目の前にたつたものを殺せばいい

全てを壊せばいいんだ

「あーもううるせえな黙ってる。」

急に後ろから温かいものが抱きついてくる。

邪魔だしうるさいから払いのけよう

俺はその方を向くと

口の中に何かが入り込む

なんだろうか

すると少したつて視界がひらけてくる

すると泣いた有希子の姿があった。

「あーもううるせえな黙ってる。」

俺は胸から何かを取り出す

そして聞こえる発砲音

そつか。俺は銃を撃つたんだ

そして静まる教室に嫌悪感を抱く

何かぶよぶよしたものが俺に当たる

邪魔だ切り捨てよう

俺はナイフを取り出し切り捨てる

そして肩が急に熱くなる

あれ？

俺が守るんじゃないかったのか？

それなのに

それなのに

助けられた

教室の壁には大きな穴と触手を持った人間と一緒に逃げていく白

い服の姿、触手を全て失った死神がいた、怖がるクラスメイトと

泣いている三人の彼女の姿だった

そして理解してしまった。自分が何をしたのか

取り返しのつかない大きなことをしてしまったことを

そして意識が少しづつ落ちていく

もし、起きたのならば真っ先にみんなに謝ろう

そう決心しながら

過ち

目が覚めると俺はもう見慣れた天井

「……起きたか。」

それと痛々しい顔をする。烏間先生がいた。

また、あの症状ですか？

俺はそう言ったつもりだった

「……大丈夫か？」

はい。俺は大丈夫です

そう答えたつもりだった。

「……羽川くん。何か答えてくれると助かるんだが？」
えっ？

おかしいと思った俺は立ち上がり何か紙と筆を探す。すると目の前に宿題だった英語のプリントと赤ペンを取る。

「どうした。羽川くん？」

おはようございます

そういったつもりだった

俺はペンと震えた手で書く。肩が痛くてどうしてもうまくかけない。

そして書き終わると烏間先生にそのプリントを見せる
聞こえましたか？

すると烏間先生が顔面蒼白になる

「いや。何も聞こえなかったが。」

そしたら分かってしまった

俺は声が出せなくなっただと

教室のドアを開けると全員がこつちを見る。

クラスメイトの人々の視線は後悔と懺悔そして恐怖

そんな視線が痛々しい

「大丈夫ですか？羽川くん。」

死神の言葉に頷く。

そして左手でチョークを持ち黒板に書き始める

迷惑かけてすみませんでした
するとみんなが不思議そうにこつちを見る

「どうしましたか？羽川くん」

俺は気にせずに書き続ける

みんなに報告することがあります

「羽川？なんで黒板に書いているの？」

みんなが不思議そうにしている。

俺はそれでも書き続ける

これから書くことは事実です。心して見てください

書くことがとてもつらかった。

しかし書かなくちゃいけない。この教室に残るにはそうするしか

ないのだから

「康太くん。……もしかして？」

桃花が泣きそうな声で俺を見る。

俺は一回深呼吸をしてそして

声が出ません

書き終えた。

クラスから悲鳴が上がる。目線を反らせたり震えてる人もいる。

「嘘だろ。」

岡島先輩が苦しそうに俺を見る

嘘じゃないです。

たったそれだけを書く。

もう一度声を出そうとしてみる。

あかり。桃花。有希子

そして

先生。

すると全員の反応はない

やっぱりダメか。

少し悲しくなってしまう

「……そう言ってそれも嘘なんじゃねーのか？」
えっ？

「俺たちを騙そうとしてただ出せないふりをしてるんじゃねーのか？」

寺坂先輩が言ったことが頭に入ってこなかった

俺は死神の方を見る

すると不安感がある

クラスメイトの方をみると不信感を持っている人がほとんどだった

俺なんていったんだ？

俺は黒板に書き始める

律転入生が来た時の映像見せてくれないか？

「いけません。律さん。羽川くんに見せたら。」

マスターからの命令だ

多分そうしないと律は見せてくれないだろう。するとスマホにとあるデータを送られてくる。

俺はダウンロードし映像を見る

最初は本当に普通に話していた

そして白い服を着た人と

触手持った転校生がいる。

そしてHR中

「ねえ堀部先輩、そんなに強さを求めるんだったら俺も殺せるんだよね？」

俺がそう言ってる

「……ああ。」

「じゃあ勝負しようぜ。本当の殺し合いで。」

するとクラス全員が俺の方を見る

「……お前みたいな雑魚に興味はない。」

「へえ〜逃げるんだ。ねえ堀部先輩。負けんのが怖いのか？」

その一言は覚えている。

すると転校生がが触手を使い攻撃するのを俺はナイフで切り落としていた

「そんだけ？」

俺は転校生を睨みつけている

「旧型がなにしているの？なんで俺が自分の開発して技術に負けると思ったの？バカじゃないの。」

「羽川くん一体何を。」

「復讐だよ。今まで俺と佳奈。あぐりさんを傷つけた復讐。」

するとクラス全員が驚く

「……五年間何度も、何度も死にかけた。食べ物に毒は盛られ、薬と渡されたのは睡眠薬だったり。自爆特攻するやつまでいた。でもよかった。生きてて。地獄のそこからやってきてやったぞ。シロだっけ？まあどうでもいいか。」

「……羽川くん？」

「ねえ？先生どういうこと？何が起こってるの？」

「おい。イトナそいつを」

「あーもうるせえな黙ってるろ」

俺はポケットの中から拳銃を取り出し上に発砲する。

「ゴミどもは黙ってる。もう使い捨てるお前らには興味はねえんだよ。」

「羽川くん」

「だから邪魔だっけってんだろ。」

すると次の瞬間死神の触手を全部切り取ってしまう。

「邪魔したらあんたも殺すぞ先生。」

するとシロと俺の間に通路があく

その道をひたすらに歩いていく俺

俺はその地点で見るのをやめた。

スマホを落とし座り込んでしまう

そっか

「……」

そっかこんなことしたんだ。

涙が溢れる。大事だと思っていたものを傷ついた。

二度とやり直せない。

そっか俺はもう

いなくなればいいんだ

俺は立ち上がる

そして黒板に一言

二ヶ月間楽しかったです。ありがとうございました。

そして俺は教室のドアを開けようとする

確かこの付近は崖があつたはずだ。

そこから飛び降りれば

するとパチンと音がなる。

目の前にいるのは桃花だった

「……康太くん。ふざけないで。」

叩かれたままたちつくす。

痛い。やめてくれ

「康太くんは話してくれたよね。見てくれること心配してくれることが嬉しいって。」

俺は何も言えないただ聞いているだけだ

「……それに本当は助けて欲しかったんだよね。生きたいって思ってたんでしょ。私たちを守ってくれるんじゃないの。」

するとちくりと胸が痛む

「……本当は謝らないといけないのは私たちの方だよ。康太くんはずっと強いとばかり思い込んでいたんだ。ずっとみているつもりが見ているふりをしてたんだよ。私たちが一個年上なのにいつも守られっぱなしで。」

「……」

違うって言いたかった

でも声が出ない

「……でも、さっきのものを見て思った。康太くんは本当は苦しんでいた。でも誰にも。カエデちゃんにも私にも神崎さんにも相談することができずに。」

「……」

「本当は私たちが君を守らないといけなかったのに。私たちは何もできなかつた。」

桃花が言う。でも違う俺が全部

「康太くんは優しすぎるんだよ。今まで責任も危険も康太くんが負つてた。弱いところを見せず強くしようと思つていたんだよ。今回のだつてずっと康太くんがおかしいのは分かつてた。でも大丈夫だからって全然大丈夫じゃないのに答えてた。」

「……」

「わたしもこうちゃんに甘えてた。5年前消えてからずっと会えなかつたからっていつてそのぶん甘えようとしてたんだ。」

あかりもいつのまにか俺の近くに来ていた。

「本当は私が止めないといけないのに。結局あの状況でこうちゃんを呼び戻したのは神崎さんだもん。私はお姉ちゃんみたいにできなかつた。」

俺はあかりの頭を軽く撫でる。

ごめんといいたかつた

悲しいことだとわかつていた

でも辛いんだ

この力があること自体が

怖い

この力をみんなに振るうことが

「……康太くん。」

そして有希子が話してくる。

ただニツコリと笑つて

「ちゃんと前に進めれば人は美しくそして強くなるのだから。この言葉を私にいったのは康太くんだよ。」

……懐かしく感じる

そうだな。前向きにならないと

弱い部分はもう見られたんだ

もういいよな。楽になつて

俺は自分の席に戻る

一度失った信用を取り戻すのは時間がかかる
でももう一度やり直そう

ノートをとりペンを走らせる

ありがとう。そしてごめんなさい。今は信用してもらわなくていいのでこれからもおねがいます。

そう書いた

信頼

「……」

声がでない

好きと言いたいのに

ありがとうと言いたいのに

伝えられない

感謝も好意も

言葉にできない

数ヶ月前までは覚悟はしてたのに

実際起こるとショックは大きかった

精神的な苦痛

これが一番厳しいものだった

でも、自業自得だろう

だって俺は彼女たちを傷つけたのだから

終始無言の教室

全て自分のせいだろう

それでも死神は授業を続けている

俺のせいだ

全部俺が

「羽川くん。違いますよ。」

すると死神が頭に触手をおく

「……本当は君が弱いことを、知っておかないといけなかったのは私です。本当は数日前から羽川くんらしくからぬ言動をしていたことは感じてました。」

死神は改めて俺にいう。

「本当は私が相談にのらなかつたのが間違えだった。ちゃんと君のこ
とを見れてなかった。そこは先生の責任です。でも当然君の責任も
あります。」

うん。分かってる

俺はペンを取り出し走らせる

信頼できる人がいないことですよね

全員がこつちを見る。

信用と信頼

たった一文字

でも大きな違いがある

それは信じていることができるかという大きなことだ

「どういうこと?」

「……羽川くんが五年前に逃亡生活を送ることになったことは、誰もが知っているとありますが。君達はどれだけですごくいいことかわかりますか?」

全員がわからないように首を傾げている

「私は地球を破壊すると言う目的で100億円という賞金がつけられています。マツハ20の怪物ですが、たった13歳の少年が100億の懸賞金をかけられているのにもかかわらず、今も生き延びてる。それがどれだけですごくいいのかわかっていませんでした。でも私はアメリカ軍から軍事ミサイルを、政府から暗殺者を送り込まれています。それと同じような殺し方をされても羽川くんはおかしくはない。」

「えっ?」

「でもよ。殺せんせーは来年地球を滅ぼすんだぜ。それと羽川じゃあ違うだろう。」

俺はペンを走らせる。たぶんこれは今知らないといけないだろうから

その触手は俺が考えたものだと言ってもですか?

「えっ?」

「ちよっと待って。羽川くんどういうこと?」

俺はまたペンを走らせる

俺が国から追われるようになったわけは、その触手を奪ったことを隠蔽するためです

俺はそれでも書き続ける。

触手以外にも色々なものを理論として実現しています。律が実際その一つです

実際に自分の超人さはわかっており、自分の身体能力の高さは薬によるドーピングによって作られたものです

触手だって材料さえあれば簡単に作りだせますし

人類を滅ぼすことも簡単にできます

すると全員が黙り込む

全部事実だ

実際その奪われたもので地球を破壊すると言っているわけで、自分が作ったものに変わりはない

100億の力とはそういうことだ

「そんなの。ひどすぎるよ。」

誰かが呟く

俺はまたノートを開き

それが真実です。

そう書いた。

「羽川くんは生きていることさえ奇跡だと言っていていいでしょう。でも実際それがいつまで続くのかわからない。それが明日かもしれないし、今すぐに殺されてもおかしくはない。実際今日の羽川くんは因縁の相手に自我を忘れるほどの殺意でした。誰よりも憎み、恨み、苦しんできた羽川くんとしては当然のことだと思えます。」

死神は俺の頭を叩く

「……羽川くんは優しすぎます。他人に迷惑が掛からないように、自

分の気持ちより他人のことを優先してしまう。愛されたことがなく、優しくされたこともない。みなさんがあたりまえだと思っていることさえ羨ましいと感じてしまう。でもちゃんと君の異変に気づいた人もいるんですよ。それは矢田さん、茅野さん、神崎さんだと君は分かっていると思います。なぜなら君達三人は最初から羽川くんがいつもと違うことに最初から気づいていたのだから。」

記憶の片隅に少しだけ覚えている。

たしかにその三人だけはおかしいと言ってくれた

気づいてくれた

見ていてくれたんだ

「羽川？」

目元が熱くなる

視界がぼやけてくる

もう今年何度も経験していることだからわかっている

また俺はないているんだ

ごめん

ごめん

気付かなかった

気づいてやなかった

自分のことばかり考えていた

好きなのに

大事なのに

生きているのに

なんで俺は気づかなかったんだ

見てあげなかったんだ

わからなかったんだ

愛してされていたのに

好きだって言ってくれたのに

嫌だ。

嫌だ

嫌われたくない

離れたくない

生きていきたい

ずっと一緒にいたい

なんで俺は

「康太くん」

「こうちゃん」

「康太くん」

三人の声が聴こえてくる

「大丈夫だから。安心して。私たちは康太くんの味方だから。」
すると誰かに抱きしめられる

でも温かい

「怖かったんだね。苦しかったんだね。」

一言一言が心を自分を不安から取り除いていく

「…でもね。私たちが君を守るから安心して。」

三人の声を聞きながらすがりつく

甘えたかった

見てもらいたかった

心配してほしかった

理解して欲しかった
守られたかった
そう守られたかったんだ
自分が守られたかったから
みんなを守りたかったんだ
それが一番嬉しい事だと知っていたから
あかり、有希子、桃花
愛してるっていいたい
大好きだって言いたい
ありがとうって言いたい
でももう言えないから
信じさせてくれ
守ってくれるって
愛してくれているって
俺のことが好きって
だから次目覚めた時は
思いつきり甘えてもいいよね？

人生

もしも人生がやり直せたら

俺はいつからやり直すのだろうか

生まれた時から？

いや違う

五年前から？

これも違う

この教室を始めた時？

多分全部違う

人生は一度きりなんだから

やり直したら意味がなくなる

だからどれだけやり直せるとしても

誰も今よりも幸せになることはないのだろう

目の前にあるのは温かいご飯

「康太くんおいしい？」

桃花の声が聞こえる。

俺は頷く。本当に美味しい。

言いたいけどいえない。

「こうちゃん？」

『ううん。なんでもないよ』

「そう？ 困ったことがあったならいつてね？」

『そうさせてもらうな。』

「康太くん。後からFPSしないかな？」

『もちろん。でもみんなであそびたいかなあ』

「……じゃあ人生ゲームでもしよっか。」

うん。

普通なら声に出して話すことなのに

もういえない

話せない

たったそれだけ

でもいつもよりもしつかりみえる

「……羽川」

するともううちの家族みたいなイリーナがこつちを見る

「悪かったわ。私も先生でありながら羽川のことを見てあげれてなかった。」

『違います。本当は俺が言わないといけなかったことです。俺がただ』

「……あんたね。本当に優しすぎるわよ。他人に気を使いすぎて何か気持ち悪い。」

『酷くないですか?』

「……もしかしたら私たちが間違えてたのかもしれないわね。今日は帰るわ。お休みガキども。」

『あ、おやすみなさい。イリーナ。』

すると玄関のほうに向かっていくイリーナ

さて俺も食べ終わったし皿洗いでもしようかな

キッチンに向かい水を流す。すると水の流れや冷たさが手に伝わってくる。

今までは感じたことのない冷たさ、感覚に少しだけ驚く

なんでこんなことでさえ忘れていたのだろう

人と触れ合う楽しさ

悪口を言われた痛み

すべてが初めてのよう感じてくる

あそぶことも

全てが新鮮に感じる

本当になんで気づかなかったんだろう

俺はペンを走らせる

『ありがとう』

ただ一言だけ書く

「ううん。礼を言われることじゃないよ。私たちがやりたくてやっているんだから。」

桃花の言葉に首を横にふる

そうじゃなくて言葉を付け足す
こんな俺のことを好きになってくれてありがとう
俺がノートを見せるとみんなが笑う
そしてまたノートに想いを書いていく
本当に迷惑をかけたけど
本当は謝りたいけど
ただ一言だけ伝えたかった
そう

『俺は二人のことを愛しています』

口だったら恥ずかしくて言えないけど
紙に書くことくらいならできる

『大好き』

ただそれだけ
それだけなんだ

これからも迷惑や心配させることもあると思う
泣き虫で臆病で強がって
時には傷つけちゃうかもしれない
でも

『これから先も一緒にいてくれませんか？』

すると全員がノートから俺の方を見る
「えっとそれは」

「プロポーズだよね。」

俺は頷く。

『まだ早いけどダメかな？』

「ううん。ダメじゃないんだけど。」

「ちよつと急だから。」

俺はペンを取る

本当はちゃんとしたいんだけど

『ごめんな、でも怖いんだ』

「……怖い?」

俺は頷く。

『うん。なんか怖い。いつかみんなが離れてしまいそうで』

「……えっと。」

「こうちゃん。私はいいけど…どうするの?」

『どうするって?』

「だって結婚するには一人しかできないんだよ?」

……そうだけどその前に

『俺户籍消されてるから今俺生きていないことになってるんだけど』

「あ、そっか。事故で死んだことになってたんだったよね。」

俺は頷く

だからそこからどうにかしないといけない

「それに殺せんせーを殺さないと来年の三月で地球が滅びちゃうわけだし。」

全員が黙り込む

「こうちゃん。神崎さんに話してないの?」

「えっ?」

『俺たちの過去にどうしても触れることになるから話してないんだよ。』

「……えっとね。みんなには内緒にしてるんだけど…もうほとんど地球がなくならないの。」

「えっ?」

「奥田さんの作った液体化する薬なんだけど…あれはこうちゃんが研究してたもので。」

「……もう1%も爆発することはないって。」

すると有希子が絶句している

『ついでに話してない理由は先生が望んでいないからであぐりさんと先生との約束が関係してるんだよ。』

「ちよっと待ってみんな。ごめん。理解が追いついてない。」

それもそうか

『みんなには内緒で来年三月になっても地球がなくならないってことだけ理解してたらいいよ。』

「う、うん。」

『できれば先生にも内緒にしてほしい。それが先生も望んでると思うから。』

すると頷く有希子

『ありがとう』

「じゃあ遊ぼうか?」

『でもそれより宿題しなくていいのか?』

「あっ!」

すると二人は思い出したようにしてる。

『勉強するぞ。英語のプリントと数学のワークやってからな。』

「宿題かあ。」

「こんな時くらい殺せんせー宿題ださなくても。」

『ぐずぐず言わないでやるぞ』

「はーい」

「わたしは終わらせてあるからお茶入れるね。」

……きつちりしてるな有希子は

少しだけ苦笑してしまう

まあ色んな苦労があったのだろうけど

これも人生だし仕方ないだろう

でも今だけはこの三人に伝えたかった

助けてくれてありがとう

関係

「おはよう。康太。」

杉野が挨拶をしてくると

俺はペンで紙に書く

『おはよう。杉野』

「……あつ。」

すると何かを思い出したのか一気に元気がなくなる

『すみません。気を使わないでもらえませんか？正直結構辛いので。』

「あくすまん。でもなんでそんな目が死んでるんだ？」

『昨日寝不足だったんですよ。ちよつと色々あります。』

「えつと他にも何かあったのか？」

『正直な話、ちよつと声を無くしたことよりもきつかったです。』

「本当に何があった？」

俺はため息をつく

『もう。本当に気にしないでください。真面目にみんなが知ったら最低だと思いう行為をしたんですから。』

「えつと康太？本当に大丈夫か。」

なんで俺こんなことばかりトラブルがおこるの？

しばらく歩くと教室がみえる。

うわー行きたくねえ

昨日とは違う意味で行きたくねえ

絶対俺が責められる

でもそんな時間はすぐに経つもので、すぐに教室についてしまう

そして入ると一気に視線がこつちを向く

「お、おはよう。羽川くん。」

『おはようございます。倉橋先輩』

するとなんだかすごく痛々しい顔になってる。

当たり前だ

だって昨日俺と話していたのに、全く気づかなかつたのだから
でも今日の方がまずいんだけどなあ

席に着くと同時に死神が入ってくる

「おはようございます。みなさん。では出欠を取ります。」

するとひとりずつの名前を呼んでいく死神。でもそこには三人の返事がなかった

「おや神崎さん、茅野さん、矢田さんがまだ来てませんね。羽川くんなにか知っていますか。」

その言葉にドキッと胸が痛む

『えつと。言わないといけませんよね。』

「はい。もしかして何かあったんですか？」

不安げな死神に首を振る

そして俺は震えながらペンを走らせる

『えつと、三人とも歩けないほどの腰痛で休みです』

するとクラスの空気が凍る

「は?。」

クラス中の視線が痛い

「えつと羽川?それって」

「まさか。」

俺は視線をそらす。

「「「なにやっつてんだよ!!!」」」

『本当にごめんなさい』

クラス全員からの罵声を受ける

『でもこれにはちよつと色々ありました』

「なんだよそのわけって」

『えつとですね。昨日イリーナの帰った後に、まあちよつとプロポー

ズしたりとか色々ありました。』

「おい今さらつとプロポーズしたつて書いてたぞ。」

『そして遊んでいたらいつの間にか就寝時間になったんですけど、離れるのが怖くて一緒に寝てほしいって頼んだんです。』

「……えつともしかして羽川。それって」

『はい。俺からは添い寝してほしいってことだったんですけど』
するとクラス全員が黙り込む

『あの。多分自分にも非はあったんですが。そうつもりで言ったわけじゃなくて。』

「……分かってる。分かってるけど」

「なんか気にしてたのが馬鹿みたい。」

『本当にごめんなさい』

謝ってすむことじゃないけど謝る。今までで一番まずいことをしたのは明白だった

「……つてかさりや恋人同士が屋根の下で一緒に住んでいたらそうなるわ。問題はそれが誰の責任かってことだよね殺せんせー。」

するとギクリと反応する死神

「この一件、正直殺せんせーの責任っていつでも過言ではないんじゃないの?」

「にゅや?」

「つてかなんで羽川ばかり責められないといけないんだよ。実際悪いのは俺たちだし。」

「そうだね。でも一番の責任は」

「あのシロつて奴だよね。」

すると全員から殺気が漏れる

「でも羽川、お前触手を奪われたつて書いたよな。」

『はい。』

「それに雪村先生の名前も知つてて、しかも復讐つて言つてた。」

「ねえ?羽川くんは何者なの?そして殺せんせーは何のために生まれてきて…何を思つてE組に来たの?」

……

『それは言えません。それは唯一の先生との契約ですから』

「えっ?」

『ただ一言だけヒントを出すと、先生は被害者であることです。それ以上は先生を殺してください。』

俺は書いていく

『殺し屋とターゲット。それが先生と先輩方を繋ぐ証であり、俺と先生を繋いだ証ですから。』

俺は書き

『その時は俺が全部の真相を話します。それでいいですよね?』

「はい。大丈夫ですよ羽川くん。」

『多分。不満もあると思います。でも、まだ全てを受け入れられるほど先輩方は強くない。だから、ちゃんと受け入れる時までには、俺が守っておきます。』

俺は少し息を吸う

『じゃあ授業を始めてください。この話は終わりです。』

「ええ。授業を始めます。」

すると死神は授業を始める。

そうだろ死神

殺し屋とターゲット

その二つでこの縁は繋がったんだ

それだけでいいだろ

怖い

イベント

それは本来なら楽しみなイベントだろう
しかしここはエンドのE組
ただ事ではないのは分かっていた

「康太くん本当に謝るから」

「ほんとにごめんね。」

「こうちゃんごめん。」

『だからもういいって。』

俺はため息をつく。

『桃花もカエデも有希子も気にしすぎ。そのことはもう気にしないで
て言っただろ』

「……でも」

『それじゃカエデは初めてが俺じゃ嫌だった？』

「……」

「康太くんそれはずるいと思うけど。」

『嫌じゃないっていつてるんだからこの話はこれでおしまい。』

「羽川なんか大変そうだな。」

すると前原先輩が前を通りがかる

『見るんなら助けてくださいよ』

「でも本当に羽川つてモテるよな。」

『前原先輩もですよね？』

『まあそうだけどさ。』

「認めちやうんだ。」

「でもよ。なんで修羅場にならないのか不思議なんだよ。俺は前やら
かしちやつてさ。」

聞きたくなかったよその情報

「えっと、その後どうなったの？」

「まあ二人とも本命じゃなかったから」

『あの、俺が言える立場じゃないんですが、最低ですね。』
「まあな」

「でもこうちゃんは誰が一番好きとか決まってるの？」

『分かってたらこんな最低なことしてないぞ。』

「そうなの？」

『俺本当に信用ねえな』

「一度大きな事件起こしてるし当然だと思っちなあ。」

『有希子的確なツツコミはやめて結構きつい』

でもあの事件は向き合わないといけないだろうな。

実際怖がらせたしそれよりも

信用を失ったことはかなり大きかった

外は蒸し暑くもう夏が近い

先生の暗殺期限まで後9か月

それが勝負のしどころだ

球技大会か

黒板を見ながらため息をつく

一応参加は認められているのだが三年E組としてエキビジョン
マッチという見世物であるのだが

正攻法での勝つ可能性かなり低くないか？

「康太くんどうしたの？」

『野球でちゃんとした試合で勝つ方法はないかなあって』

「えっ？」

『せっかくならちゃんと言いたいじゃん。だからなんとか裏道を探し
てるんだけど。さすがにないよなあ。』

俺はため息をつく。

杉野いわくどうやら超中学校級のピッチャーがいるらしく普通
じゃ勝ち目がないらしい

ということになると

切り札の存在が必要になってくる。

『まあ俺も練習混じってくるか。そっちも女子バスケット頑張れよ。応援
したいけど時間がほとんど被ってるからな。』

「うん。康太くんの応援は試合終わったらいくね。」

『まあ期待せずにな』

俺は手を振ると少しため息をつく。

まあ一応頑張るけど相手が相手なんだよなあ
バントで点数稼げるとしても結局数点どまり

力も経験もあっちの方があ

それなら何で勝つか

策略しかない

もし俺が声が出せたのなら

いくつか方法はあったはずなのに

さて、もう前のことを悔やんでもしかたがない

どうやって勝つかだ

でもただ勝つだけはだめだ

……また一人で考えてるな

はあ。自分の悪い癖だな

それで一度失敗してるのにこの有様だ

今まで自分のことは自分でやってきた

そのつけが今になってやってくる

苦しいな

頼りにできないことが一番苦しい

とりあえず死神にいわないと仕方ないだろう

俺は校庭に向かうと

死神が九人に分裂し守備についていた

えっと何をやってるのだろうか？

近くにいた渚に聞いてみるか

渚の肩を叩きペンを走らせる

『なにしてるの？』

「えっと野球の練習みたいなんだけどそうはみえないよね。」

俺は頷く。

「そういえば羽川くんは野球は？」

『アメリカ軍で少し休憩時間でやったぐらいです』

「……えつと多分経験がないってことだよな。」
俺は頷く

話せないのがやっぱりきついな。

『でも、三村先輩は三振した後に赤面しているんですが』
「えつと。」

さすがに戸惑いを感じる渚

「おや、羽川くんも練習ですか?」

俺は頷く

「なら打席に立ってください。後打っていないのは羽川くんだけですよ。」

なら遠慮なく

俺は転がっていたバットを手に取りバッターボックスで構える

元メジャーリーガーの誰かわれたけど言われたことを思い出す

速さも球種も関係ない。ただ

来たボールをうてばいいんだ

するとボールが近づいていく

そのボールが来るのをギリギリまで引きつけてから

振り切る

するとカーンと金属バットからいい音が聞こえる

「にゅや?」

するとボールはどんどん伸びていき裏山に突き刺さる

「ほ、ホームラン。」

「す、すげえ。」

えつとどうすればいいんだっけ?

たしかベースを反時計回りに一周だよな

まあとりあえず走ればいいのか

俺は一周まわり

ホームベースをもう一度踏む

「えつと羽川くん?なんであんなに速いの打てるの?」

『銃弾よりおそいのでコツさえわかれば』

「……そっか。」

すると渚は複雑そうな顔をしてる

『どうしたんですか』

「羽川くんは自分のその力になれてきたんじゃないのかな？」

急な正論に俺は少し固まってしまふ。

「羽川くんはなんでもできすぎるんだよね。だから本当に困った時に相談できないんじゃないのかな？」

その通りだった

急に凶星を突かれ戸惑ってしまふ

「……ごめんね。こんなこと言っちゃって。」

『いや。結構痛いところを言われてちよつと驚いてしまっただけで。』

俺はだからかと思ってしまう

やっぱり似ているな

俺はため息をつく

この先輩はどこか油断できない

そう感じてしまふ

潜伏以外ではクラスでもほとんど最下位に近く、勉強もそこまでい
いわけじゃない

でもなにかをずっと隠し持っている

得体の知らない何かを

「……康太？」

急に話しかけられ驚いてしまふ

そこには赤羽先輩がたっている

「大丈夫？ 震えてるけど。」

『大丈夫です。ただちよつと怖くて』

「怖い？ 渚くんが？」

『はい。なんだか敵に回したら直感がまずいつて感じているので。』

俺はため息をつく

『ただ、他のことで勝っていてもなにか不気味なものを持っているつ
ていうかなんだろう？』

ただそれだけが妙に気になる

怖くないことが怖い

なんであんなに殺気を持っているのに
ずっと殺気が漏れてないのがおかしい
なんでそんなに平気なのか

わからない

そうわからない

強さが見えないのが怖い

いつぐらいだろう

俺がこんなに人をおそれたのは

球技大会

球技大会当日

俺らは本校舎の球技大会で野球をすることになったのだが

『えつと。本当にこんな差別されるんですか?』

「そういえば羽川はこういうところ出るの初めてなんだっけ?」

『はい』

するとすぐく気合いが入っている野球部。それを応援してる他の生徒がいる。

『それでなんで俺がこんなアウエーの中で最初のバッターにならないといけないんですか?』

さすがにいやなんだけどなあ

「一番 センター羽川くん」

『まあちよつこと打ってきます。』

「ああ。」

俺は息を吸う。

バッターボックスに立つと俺よりも10cmは高いだろう身長にマウンドから見下げてくる視線

あ、完全になめられてるな。

俺は死神の方を見ると

白白黒

初球から打っていいらしい

つてことになる

最初の初球は

ストレートをど真ん中に

俺は思いつき踏み込みスイングをする

カーンと金属音がいい音が聞こえ

バックスクリーンに直撃した

まあ。こんなものだろ

俺はゆっくりと一塁へと走りだす

「は、入った。初球先頭打者ホームラン」

解説が驚いているが当たり前だろ

コースも球種も分かっているのになんで打てないんだよ
するとざわめきだす全校生徒

……なんか気持ちいいな

少しそう感じる

実際のところ俺は超人だからあまり気にしたことはなかった
でもなんか気持ちいい

「ナイスバツティング。」

俺は頷く。

「でも迷わず踏み込んだよな狙ってたのか？」

俺はメモ帳を取り出し

『舐められているので多分次も真ん中にストレートですよ。』

「……おう。」

木村先輩が打席に立つ。

俺は息を吐く

するとコツンと金属音が聞こえる。

多分バント作戦が発動したのだろう

そして渚と磯貝先輩もそれに続きランナーは満塁になる

さすがにあの死神の練習を受けているだけあってバントだけは凄
いよな

300kmのストレートにマツハ20の守備だしな

140kmくらいならバントくらいは楽勝だろ

まあそれが普通の玉ならの話だけど

俺は杉野の後の前原先輩の肩を叩く

「どうした？羽川。」

『もし理事長先生が出てきたらピッチャーも野手も見ずに思いっきり
振ってください。』

「えっ？」

『多分バンドシフトで外野手も内野の守備につくと思いますのでバン
トはたぶんつかえません。』

俺は前原先輩に告げる。

「えつと？なんでそんなこと分かるんだ？」

『俺と理事長先生はちよつとは違うけど教え方はほとんど同じなんです。勝ちにこだわりやれることならなんでもやる。多分教育理念の違い以外はほとんど同じだと思っうんで。多分E組はバントだけで野球部に勝とうとしてる。だけど俺と杉野は別と考えるでしょう。』

そう本当に考えることは同じなのだ。俺だったら絶対そうしてる。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

『いつもマツハ20をみていますが俺たちは野球の訓練はしていません。だからここからは楽しんでください。』

「楽しむ？」

『はい。勝つ負ける関係なくただ普通の野球をしましょう。多分向こうの進藤先輩は将来プロで活躍する選手です。だから三振して当たり前です。でも、腰が引けたバッティングしたらかつこ悪いですよ。』
すると向こうからカーンという音が聞こえてくる。杉野が打ったのだろう。

すると前原先輩がこつちをみる。

『えつと、なんですか？』

「なんか、当たり前なことを改めて言われるとなんか落ち着くな。」

『じゃあ、もう一つだけ。』

俺は笑う。後ろから声が聞こえてくる

「さて男子はどーなってるかな？」

「凄い野球部相手に勝ってるじゃん」

E組の女子たちが戻って来たらしくグラウンドに全三年生が集まった事になる

『ここで打ったらカッコイイですよ。』

カーン

前原先輩の打球は誰もいないライトに飛んでいく。前原先輩の足ならランニングホームランだろう。

「すげえ。前原。」

「あのボールを打つかよ。」

『まあマツハ20のボールで速さにはなれているので緊張を緩和した

だけなんですけど。』

俺が書くともみんなは不思議そうにこつちをみる。

『どういうことだ?』

『人は相手を格上だと思うと萎縮したり、緊張したりして本来の力を出せないんですよ。例えば俺たちはE組って肩書きがあるでしょ? だから本来できることもE組だからって諦めている人この中にもいますよね?』

すると全員が黙り込む

『でも本当は違います。できないと思うからできないのであってやれられる失敗してもまたチャンスはあるんです。俺は前このクラスで一度大きな失敗をしています。それでも先輩方はちゃんと話しかけてくださいますし。正しいと思っただことはちゃんと信じてくれる。失敗してもやり直せばいいそれが先生が教えたいことじゃないんですか?』

俺はあの人が一番言いたかったことを書いた。

多分今それが一番大切なことだから

『だからまず自分にできること考えましょう。そして勝ちましょう。泥臭くても、失敗してもいい。自分がダメでも結果が全てです。ナイゲームとかは敗者の言葉だ。ただ勝てばいいんです。身体能力でも頭脳でも負けていません。負けているのは経験と勝とうとする気持ちです。それを俺はあの三人から学びましたから。』

俺はあの事件のことはいまでも気にしている。渚の言ったことだつて心に響いている。

でももう迷わない。

自分が正しいと思っただけだ。

それは言葉じゃ絶対に伝わらない

でもそれは俺の一番伝えたいことでもあるからだ

「……なんで俺たちは後輩にこんなことで怒られてるんだろう。」

木村先輩がぼそりと呟く

あの。怒ったつもりはないんですが。と書こうとしたら肩に手を置かれる

「羽川、ありがとう。目が覚めたよ。」

「そうだな。時にはやれるってことを本校舎のやつに見せつけないな」

「ああ。まあ後輩に言われるなんて一番ダサイことだけだな。」

すると一気にムードが高くなる。バントシフトでどん底だった空気をリセットさせたのだ。

「ねーえ。これズルくない理事長センサー？こんだけジャマな位置で守ってるのにさ、審判の先生も何にも注意しないの？一般生徒もおかしいと思わないの。」

カルマが打席に立つ。あいかわらず挑発するのうまいなあ。

でもこれでやりやすくなった。

でもなんだろう

勝っているのに、

なんでこんなに嬉しくないんだろう

そしてその後はカルマも三振で終わりスリーアウトチェンジになる。

守備につくとセンターから全てが見える

ベンチもクラスメイトも観客も全てが見える

でも、どこか気持ち悪い

なんだこの試合

なんでみんな楽しそうにしてないんだ？

勝つことにこだわりすぎているんだ？

俺たちがやっていることは本当に正しいのだろうか？

あの後二打席目にホームランをうったり守りでファインプレーをしたが気持ちがいられることはなかった

なんだろうこの違和感

ずっと試合が終わった後も考え続けていた。

みんなは喜んでいてるがこっさり俺は離れる。

勝ったのに勝てたのにこんなに嬉しくないことは初めてだった。

疲労感はなく感じずあるのは違和感のみ

正直なところ負けた方がすつきりするんじゃないかと考えていた。

自分が今まで考えの勝つことが本当に全てなのか？
考えるが具体的な答えは出ない
でも

間違っているということだけは分かっていた。

矢田 桃花

なんでだろうか

結果が全てだと思っていたのに

勝てればいい

そんなふうに考えていたのに

最近じゃ違うんじゃないかと考えている

「康太くんどうしたの？なんか悩み事？」

すると桃花が話してくる。有希子とあかりは球技大会の打ち上げに行っているけど俺はどうしても気分が乗らず断ったのだ。

『まあ、ちよつとな。』

「もし、よかつたら私が話聞こうか？」

……少しだけ聞いてもらおうかな？最近溜めすぎてあんなことが起こったわけだし

『気持ち悪かったんだよ』

「えっ？」

『なんか今日の試合見てたらなんかつまらなかったっていうかみんなが喜んでるのが気持ち悪かった。なんかいつも見ていたみんなと違う気がしたんだ。どんな手を使っても勝とうとしたのは分かったんだけど、なんだろうそれが嫌だったのかな？』

うまく伝わりづらい

『今日の試合両方とも勝つことが目的だったんだけど、俺今日初めて負けたって思ったんだよ。何かが違う。でも、相手を見てるとそれもまた気持ちが悪いし何かが違うって。』

「……康太くん、もしかして間違ってたら違うって言って欲しいんだけど、もしかして今回の殺せんせーのやり方が嫌だったんじゃないのかな？」

『どういふこと？』

「私ね。野球部の姿を見て思ったの。康太くんがシロとイトナくんが来たときに似てるって。」

……えっ？

「狂気で本当の気持ちを理解してないって。多分だけど康太くんは多分好きなことを弱いものを殺す道具として使ったことが嫌だったのじゃないかな?」

俺はハツとしてしまう。

「私たちのクラスのこととも気持ち悪いと思ったのはそのことに便乗して野球で強いものを潰そうとしたからじゃないのかな?多分だけど康太くんは普通の策略じゃなくて戦略で勝ちたかつたんじゃないのかな?」

『どういうことだ?』

「つまり先生たちに使われる駒として動くことが嫌だったんじゃないかな?」

俺は少しだけ思う。

今日俺がしたのはホームランを最初に打った時はとても嬉しかった。

それはキャッチャーとピッチャーが配球をきめ舐められたとはいえ自分たちで決めたからだ。

しかし二打席目に打った時は理事長先生が配球を決めていた。

……そっかそれが嫌だったのか。

人を物扱いされるってこういう気分になるんだ

それで改めて気づく

俺なんてこと言ったんだろう

あの一言でどれだけの人を傷つけたんだ

信じてくれたのに

たった一言

それだけで俺は信用がなくなった

でもそれは当然の事なんだ。

そしたら気になった

『なんで桃花たちは俺を信じてくれるの?』

すると桃花はクスリと笑う

「だって康太くんが裏で何をしてるのか私たちはちゃんと知ってるから。」

俺は首を傾げる。すると桃花は俺の頭を撫でてくる。

「康太くんがみんなのことを気遣ってるのは多分クラス全員が気づいてるんじゃないかな？だって一番私たちの安全を考えているのも分かってるよ。最近殺し屋がクラスに近寄らないようになったのは学校の周りにトラップを仕掛けに夜中に家を抜けだしたり、警備ロボットを作ってるからだよね？」

……バレてるし

「それにこの逃走中に使ってるコースって土が軟らかく毒性の植物も元から生えてないとこでしょ？烏間先生が驚いてたよ。でもみんなは少しだけ怖いんだよ。やっぱりどこかで裏切られるんじゃないかって。私だって少しは思ったもん。」

だよな。じゃあどうして

「でもね。私はそれだったならそれでいいと思ってるの？」

その言葉に驚く

「私は康太くんの過去をみんなより少しだけ知ってる。それでまだ康太くんが苦しみ続けていることも。康太くん時々寝ながら泣いてるんだよ。もしそれが嘘の康太くんならショックだけど、でも私はそうだとは思わない。確かにあの言葉は私は嫌だったよ。本当は泣きたかった。でも信じたかったんだ。康太くんを。だって好きな人の言葉なんだもん。」

桃花が手を握ってくる。

「多分ね。康太くんがみんなのことを信頼してないことも私のこともまだ怖がっていることも全部わかってる。今までそういう生活をしてきたんだもん。でもね、私のことを今じゃなくてもいいから信じて。私は康太くんの味方だから。でも間違っていると思ったときは止めるけど。でももう守られっぱなしは嫌なの。私だって康太くんを守りたい。だって私は康太くんの彼女なんだよ。少しくらい背負わせてよ。」

すると泣き始める桃花。

……そうか。

桃花も見て欲しかったのか

自分は見ていると思っていた。

でも本当は見えてなかった。

そっか見るってこんな難しいことなんだな

それに話せないのも慰めることも謝ることもできない

いや。でもここは謝るところじゃないのかもしれない

感謝の気持ちを伝えたい

俺は桃花を泣き止むまで頭を撫で続ける

声を無くしたことがこの一週間でどれだけ辛いかわかった。

本当に伝えたいことが伝えられない

でも何度も桃花には救われてきた

弱いところも全部見られてきた

弟の看病もあるっていうのに

凄いな女だよ。

三人の中で一番忙しいのが桃花だ。

家事に勉強に家のこと

全てちゃんとこなしてる

本当にもつたいないよな俺には。

でも好きって言うってくれる

どれだけしんどいのか、どれだけ大変なのか知らないけど

少しは俺も力になりたいな

本当に好きになってくれてありがとう

大好きです

限界

暴力

その一文字

俺が一番嫌いだ

死ぬよりも恐ろしい言葉に今でも震えてしまう

子供の時に植えつけられたトラウマ

それはなによりも著しく残っている

失敗したのも

不機嫌なことも

全ては俺にぶつけて来る

謝ることもできない

謝っても許してくれない

母親も助けてくれない

殴って、蹴られて

涙が溢れてくる

やめてほしい

助けてほしい

でも佳奈に当たるから

俺が受け止めるしかない

他の誰かに当たるくらいなら

……俺が痛い思いをしたほうがマシなんだから

「……」

「…康太くんまたあの夢を見たの？」

俺はただ頷く。

最近じゃ夜中に吐き出すことが多くなっていた。

「大丈夫なの？」

「一応病院に行かせたいんだけど、戸籍も住民票も保険証もないし。」

『悪い。迷惑かけてしまった。』

「ううん。気にしないで。でもこれ以上ひどくなる前に。」

すると三人が頷く。

「でもどうして昔の夢を最近になって見始めるようになったの？」

『分からない。こんなこと本当に初めてで。』

「……もしかして私たちが住み始めたから？」

『いや。それはないと思う。それなら住み始めた時からこんなことになっっているだろうし。』

「それならやっぱりシロっていう人が現れたのが原因なのかな？」

俺は少しだけ考える。

なんとなくだがそれは違うと思っていた。

いや、その件も絡んでいるだろう

大体もう予想できていた。

『多分怖いんだ。みんなが俺を殺すための囹として使われるのが怖い。』

「……」

震えながらも俺は書いていくでも伝えないといけない

『俺はみんなを失うことが怖いんだ。俺のせいで傷ついたり死んじやうんじやないかって思うのがすごく怖い。最近になって烏間先生に全部の体育を引き渡しただろ。でもちやんと最後まで教えたかったんだ。逃げるってことを。本当に傷つけないんだ。でも離れたくない。みんなと一緒にいたい。』

「こうちゃん……」

もう限界だった。ストレスが溜まって。嘔吐はその一つだ。涙もろくなってるし後ろ向きになってる。

なんで俺がこんな目にあわないといけないんだよ。

なんで普通の生活さえできないんだ

もうどうしようもない。

なみだが止まらなくなっている。

助けてということもできずに

はあ。最近おかしい

よく夢を見るのだが虐待される夢をよく見る

なんだろうか？

「大丈夫ですか？羽川くん。」

死神が隣にくる

『大丈夫にみえるか?』

「いいえ。」

だろうな。みんなは気づいていないけど結構まずい

とにかく元気そうに見せてるのがとにかく辛い

「身体的にストレスや睡眠不足で顔色が悪いです。安全のチェックを律さんに任せ自分は寝ようとするけど全く寝られず最近では食事をしても悪夢を見続けると茅野さんたちから聞いてます。精神状態がかなり衰弱してると思われます。」

そんな自分の体だから分かってる。

「だから早く治療を」

『頼む。もう少しだけ黙っていてくれ。』

「さすがに今回は見過ごせませんよ。」

『頼む。後少しで全て終わるんだ。後二日それが終わればそれで終わる。』

「えっ?」

そう、本当に全て終わるのだ。

『二日前内通者から政府のコンピューターから羽川建設が無実って証拠が見つかったって連絡がきた。その人が発表するのが明後日。さらに隠蔽している証拠も全部秘蔵ファイルの中に隠してあつたらしいから二日乗り切ったらとりあえず一区切りつく。』

俺は苦しげにVの字を作る。

「……」

嬉しそうな死神。まあ当たり前か。

結構本気でなんとかしようとしてくれたもんな。

『その後一旦烏間先生の紹介で精密検査を受けることになってるけど。記者とかに囲まれることになるから二週間はこつちで通常授業を受けることになってる。だから期末には俺は参加できないけど。』

二週間後期末テストは完全に無理だ。精密検査に一週間かけるため俺は

「えっとか烏間先生も協力してくれたのですか?」

『つてか今回の件は俺はほとんど何もしてない。いつのまにか決まっていたんだよ。まあ去年から浅野先生が動いてくれていたのが大きかった。』

俺は少し息を吐く

『だから後二日多分それが終わったら少しは楽になる。だから頼む。』
「……」

するとふうとため息をつく。

「分かりました。ついでにこのことはみんなには。」

俺は首を横に振る

情報はどこで漏れるかわからない

多分死神も分かっているはずだ

「しかし学校を休むくらいのはしたら。」

『普段通りしてないと怪しまれる。あっちだって慎重に行動するわけだし。』

たった一瞬でも気を抜いたら失敗する可能性がある

でも後二日っていうだけで気持ちには楽になった

『んじや少し体動かしてくる。さすがに今日は模擬戦だろうし少しくらい動かないとまずい。』

「え、ちよつと羽川くん。」

止めんなよ先生

案外あの人と手合わせするの楽しいんだから

「……強すぎるだろ。」

俺は一礼し座り込む。

「烏間先生が一度も当てられないって。」

「……羽川くん、ちよつといいか？」

『はい？』

「……いや、ちよつと気になることがあってだな、後から相談に乗ってくれないか？」

別に構わないので頷く。

「羽川って本当に戦闘面に限ったら化け物だよな。」

「勉強もできるし気遣いもできる。」

「なんだろう。全てにおいて負けてる気がする。」

あの、そういうことは俺がいないとこで行ってくれませんか？

けど正直なところもう隠しとおせる気がしないんだよな

クラスメイトの前では平気な顔しているが結構まずい

後二日

いやもう一年は警戒しないといけないだろう

「それまで！今日の体育は終了。」

烏間先生の号令で授業が終わる。

「こうちゃん。大丈夫？」

すぐにかけてくるあかりに俺は頷くとりあえず今日の授業はこれで終わったのでひとまず安心だろう。

でもあかりの肩に少し体重を置く

結構歩くだけでもしんどかった。空腹と睡眠不足でかなりフラフラだった。

「……やっぱり無茶してるよね。」

頷く。さすがに結構堪えていた

筆も重いがメモ帳に少しだけ書く

『烏間先生の相談が終わったらちよつと一緒に帰ってくれないか？さすがにちよつとやばい。』

「無理して体育するからでしょ。ほら。」

素直に肩を借り教室付近まで歩く。

本当に悪いな

……でも

なんか嫌な予感がする

いや、絶対にこの後に何かある

自分の経験がそう言っていた

着替えてみんなが戻ってこないのので校庭を見に行く
するとみんなが大量の甘い物のまわりで集まっていた

不思議に思いながらも近づいてみると

「おう、君が羽川か」

その声を聞いた瞬間わかってしまう

今まで見てた夢

ずっと感じていた嫌な予感

そしてこの温かそうで冷たい声

「や、俺の名前は鷹岡明今日から烏間の補佐としてここで働く。よろしくな。」

そうかこの人は

俺の父さんと同じタイプの人間だ

そう思ったとたん警戒しようとする

どこからか声が聞こえてくる

まだやるつもりなのか

もちろんだと頷く

お前はもう限界だ

それはどつちの意味だよ

つい問いかけてしまう

自分で分かっているんだろどつちもだよ

誰かが答える

それももう分かっていた

でもお前は変わった

誰かが言う

自分のためから人のために、人の願いから自分のために力を使うようになつた

我は最初は弱くなったと認識した

だがそれは逆だった

誰か、いやもう何かなんて分かっている

その逆だろ

人は守られるほど強くなり

守りたいものがあるほど強くなる

ああその通りだ

もし裏切られたなら

その時はその時だろ

お前だってもう気づいてるんだろ

死んだ命よりも今ある命

もう過去は取り戻せないことも

だから力を貸せお前は今の俺いやこれから先絶対に俺には勝てない

絶対なんてないんじゃないのか？

絶対なんてないに決まってるだろうでも

お前は俺に勝てると思ってるのか？

今まで苦痛も苦しさも全部耐え抜いてきた

何度も負けそうになってきた

でも、助けてくれた人がいる

好きになって、薬も何も使わずお前の意志に勝ってる

それでもなおお前は俺に勝てると言うのか？

お前が表に出た時助けてくれた女の子を見てもお前はそう言えるのか？

今の俺を見てもそう言えるのか？
弱くなつたんじゃない。

弱さを受け入れて、補つてくれる人を見つけたんだ
だから確かに俺自身は弱くなつたのかもしれない
まあお前に頼みこんでるくらいだしな
でもまだやれる

その一步を烏間先生と浅野先生が作ってくれた
まだ立てる

まだ生きているんだ

最後まで全員揃つて卒業するんだ

だから力を貸せ

もうお前には負けない

負けても

彼女が

仲間が

先生が

親友が

俺を守ってくれる

だからお前も俺を助けてくれ

五年も俺の体の中にいたんだからわかるんだろう

俺がもう限界だつてことを

今誰が俺の操作をしてくれてるかは知らない

でもお前は見えてるんだろ

全部俺の願いは

恨んでいる

今でも確かに恨んでいる

でも

もう負けない

逃げつつつけていたターゲット生活ももう終わる

あとは残党線だ

もう数年はずつと狙われ続ける

でも

もう一人の命じゃないんだ

今でも確かに俺は強い

でももつと強くなりたい

あかりを桃花を有希子を

浅野先生を烏間先生をイリーナを

先輩方を

死神を

そしてこれから出会う縁を

全てを守る力を

はあ、最初は威勢のいいガキだと思っていたのに立派になりあがつて

悪いな

では力を、生きて全てを守る力を置いていく

どう使うかはお前次第だが

大丈夫さちゃんとうまく使うさ

俺は笑う。もう声は聞こえなくなっていた

そしたら体の中が光に包まれると少しずつ光が粒となり自分の体から出ていくのを感じる

それは一度見たことがあった

触手細胞が役目を終え分解されたとき

そっか

役目を終えたのか

そして視界が晴れていく

するとさつきと同じ景色

たった数秒のことだったのだろうか

鷹岡、先輩方の姿が見える
死神の姿も

後ろにはイリーナと烏間先生

みんなの表情

みんなの感情

全てが見える

そうだ

俺は全てを守り抜くんだ

でもそれはみんなを傷つける結末は望まない

まあでもとりあえず

俺はポケットからペンとメモを取り出し俺は鷹岡に見せる。

『その強化外骨格みたいになつらやめてくれませんか？気持ち悪くて反吐が出そうです。』

この敵からみんなを守ろう。

弱み

一瞬の静寂が包まれる
すると

「何を言ってるんだ羽川。俺たちは家族みたいなもんだろ」
家族、家族か

そんな気持ちを持っているのに家族か
『とぼけるんならいいんですけど。まあ一つだけ忠告です。別にこの
クラスのみんなを傷つけるようなことをした場合。あなたのことを
徹底的に潰しますから。覚悟してくださいね。』

俺は後ろを向き教室に戻ろうとする

「ちよつと待てよ。」

右だな

俺は左に二歩横にずれる。

すると肩を掴もうとしたのだろう。鷹岡は何もつかめずにただ空
を切る

俺は避けながらメモをかき

『そういえば俺、烏間先生に呼ばれているので。じゃあみんな。』
全員に見せる。

俺は少し殺気を出しながら歩いていく。

そして校舎の方にいる烏間先生にメモを見せる

『どういうことですか？確か防衛省の中でも危険人物ですよね？』

鷹岡明

俺はその名を知っていた。

「ああ、ちよつとそのことで話したい。」

まあそうだろうな

「マスター」

すると律が飛んでくる。

「なにか用ですか？」

『鷹岡について調べてくれないか？写真でもなんでもいい。俺のスマ
ホに送りこんでくれ。ついでにマスターはやめろ。羽川でいい。』

「はい。分かりました」

結構まずいことになりそうだし一度相談したほうがよさそうだな。

翌日

「おはよう、羽川。」

磯貝先輩の挨拶に会釈する

言葉で返したいが返せない

やっぱりきついな

俺はため息をつく

「それで羽川、昨日の写真のことなんだが、あれ本当か？」

俺は頷く。律から届いた写真には鷹岡の育てた自衛官の背中があらざだらけになっているものだった。

『律と鳥間先生の部下の人が言うにかなりやばそうです。でもまだこのクラスでも同じ行為に動くわけじゃないんで動き方が難しいんですよ。昨日もぎりぎりの線まで攻めましたけど解決まで行く方法はかなり厳しそうなんですよね。』

証拠がないのが一番辛い。この写真も過去のだけで安全な訓練をしてくれるのであればそれはありがたいんだけど

「でも、羽川が相談しに来るって珍しいな。ずっと一人で抱え込んでいたのに。」

俺はペンを走らせる

『前はそれが一番いいと思っていたんですけど、自分はそこまで強くないんでやめました。それに前溜め込みすぎてこんなことになりましたし。だから少しだけでもいいから助けてもらおうと思いましたが。』

「少しだけなんだな。」

苦笑している磯貝先輩に頷きまたペンをとる

『はい。本当に困った時に助けてもらうのはちゃんとお互いに信用している者ができる特権ですから。正直なところまだ俺に不信感を持っている人は結構いますし、俺が信用しているって言っても信じてくれる人はまだ少ないですから。』

実際のところそれだけのことはしてるしな

『でも、俺はここが好きです。自分の命に価値があることを教えてくれたから。俺を信じてくれる人がいるから。守ってくれる人がいるから。だから守りたいんです。信頼されたい。それがこの教室なんです。』

俺はみんなから物として見られてた。肩書きでは天才。でもだれも人として見てくれなかった。

でもちやんとここでは一人の人だと見てくれる。

弱いところも全て受け入れてくれる。

そんなE組が大好きだった。

ここが俺の居場所だと思うほどに大好きなんです

「……なんか羽川って変わった奴だな。」

『よく、言われます。』

「……羽川は証拠があれば鷹岡を撃退できるのか？」

磯貝先輩がそういうのが俺は首を振る

『一応名目上は先生としてやってきているので多分烏間先生が鷹岡より優秀だと認めさせないと。俺は武力解決なので、ちよつとみんなを怖がらせることになるんで。』

「羽川は安全に解決したいと。」

『そういうことです。でもやっぱり最低限誰かを傷つってしまう作戦しか思いつかないんですよ。』

「ふーん。じゃあ俺がその役引き受けようか？」

するといつの間にか前原先輩が会話に入ってきていた。

「ごめんな、昨日羽川から連絡来た時に前原もいてさ。」

「ああ、それで鷹岡の本性を引き出せばいいんだろ。それなら俺がなんとかするさ。」

俺は少し慌ててしまう。俺は急いでメモに書いていく。

すると後ろからメモを取り上げられる

「康太くん。やっぱりまた私たちに隠し事してたんだね。」

後ろには桃花が立っている。

「本当にこうちゃんは優しすぎるんだよ。私たちが傷つかないようにこうちゃんが全部痛みを引き負ってるんだもん。たまには私たちに

も頼ってよ。」

あかりが呆れ顔でこつちを見てくる

「でも優しいところが康太くんのいいところだから。」

有希子がクスリと笑う。

何もできないのでただみんなの方を見るしかない。

「どうしたの?」

「それがさ、羽川がこんな写真を見かけたんだよ。」

片岡先輩がかけてきて前原先輩は磯貝先輩のスマホを片岡先輩に見せると頭を抱えている。

「それで、磯貝くんに相談していたと。」

「えっと多分見せただけだと思う。昨日こうちゃん久しぶりにちゃんと寝れたから。」

「「……えっ?」」

「多分このことを予知夢として見てたんじゃないかな。こうちゃんは昔DVされてたから。こういうったことに敏感なんだよ。」

「そういえば茅野って昔から羽川のこと知ってるのか。」

「うん。幼馴染。」

「そうだったの?」

片岡先輩が驚いてる。

「こうちゃんが隠そうとしてたけどそれは私の安全を守るためだったんだ。……本当に優しすぎるんだよ。」

「本当にな。」

「なんで私たちに相談してくれなかったのかな? 一応頼りないかもしれないけれどクラスメイトだよ。」

「それに康太くんは無茶しすぎ。たまには頼ってよ。」

俺はノートを取り出し書き始める

『すみません。じゃあ少し俺の考え聞いてもらえますか?』

すると頷くみんな。

『とは言っても結局は普通に受けてもらえればいいんですけど…でもおかしいと思ったら逆らってください。そしたら俺が写真を撮って理事長のところ交渉しにいきます。E組のシステムとはいえ暴力

ぎたはさすがに問題視されるので。受け身のスキルはみんなかなり高いレベルなので怪我をすることは無いと思います。』

「そういえば羽川が教えてくれた受け身ってなんで教わったんだ?」

前原先輩の質問に話はかなりそれるが答えたほうがいいだろう。メモ帳二ページを使って書く

『受け身は全ての基本なんです。多分鳥間先生から習うことになると思いますがフリーランニングというスキルには必ずと言って必要になるんです。それに安全な暗殺をするにはやっぱり施設がよくてもちゃんと受け身をとらないと骨折したりする可能性が高くなるんです。だからこれから暗殺も厳しくなるとすればまずは自衛する方法をまずは身につけないといけません。』

『だから最初に受け身を教えることだったんですけど。』

「……なんか凄く考えてくれたんだな。」

『当たり前ですよ。俺も鳥間先生もプロとして最低限度の生活に支障が出ないように心がけていますから。』

逃走のプロと実践のプロ

俺たちはそういう関係を保ってる

『ちゃんとみんなの安全を考えながら行動し実行する。それが当たり前のことなんです。でも、その当たり前を保証できないのであればそれはもう三流以下ですよ。』

それはなによりも俺らが気にしてることだ。

『鳥間先生も忙しい中で色々と考えてくれてるんです。だから俺だって信用してる。多分俺たちのためなら先生を殺せるチャンスがあってもそれを捨ててまで俺たちのことを守ってくれますよ。』

「あれ?今日の体育最初から羽川いるの?」

杉野が不思議そうにこつちを見る。

『少しある情報を掴んだんで。……ちよっと化けの皮を剥いでやろうと思って』

俺は磯貝先輩と前原先輩の方をみる

すると二人が頷く

決着の時間が近づいてきた。

すると鷹岡が降りて来る

「よーしみんな集まったな！今日から新しい体育を始めよう。」

本当に冷たい声だよな

話す内容は生徒の心を掴む為に行っているけど

ずっと聞いていてそう思う。

「さて！訓練内容の一新に伴ってE組の時間割も変更になった。これをみんなに渡してくれ。」

俺は隣からプリントを渡されるとそれを見てやっぱりそうかと思う

「嘘…でしょ？」

「十時間目…」

「午後9時まで…訓練…？」

これしかも最悪な奴だ。

訓練が長いほどみんなは強くなれる。

本当に暗殺のこと考えるのであれば一点集中型ではなく平均して育てたほうが暗殺できる可能性が高い。

やばいここまで無能だとは思ってなかった。

「こうちゃんどうするの？」

『今の所カメラ回し始めてる。』

スイッチを入れる。

「ちよっ…待ってくれよ無理だぜこんなの。」

前原先輩が声を上げる。

「ん？」

「勉強の時間これだけじゃ成績落ちるよ！理事長もわかって承諾してんだ!!遊ぶ時間もないしできるわけねーよ。」

すると鷹岡の手が動くその瞬間俺は走り出す

やばい。このままだつたら溝に入る。

俺は前原先輩の襟を引き後ろに下げる。すると頭を掴んできた引き寄せられ溝に鷹岡の膝が入る。

「「羽川」」

「できるんじゃないやるんだよ。」

そんな声が聞こえる。痛みがないが吐き気がする。

やべえ。まともに攻撃喰らったの何年ぶりだ

でも、こいつに弱いところは見せられない

俺は立ち上がろうとすると

「羽川くんは下がって。」

片岡先輩が命令される。

確かに下がった方がいいだろう。俺は少し後ろに下がる。

「こうちゃん大丈夫。」

あかりの言葉に頷く。一応この程度だったら我慢できないこともない。

「おいおい。その犯罪者の息子の肩を持つのか？」

犯罪者の息子

その一言がはつきりと言われるとやっぱり来るものがある

しかもあらがち間違っていないっていうのは余計にくる

俺は立ち上がる

「おいおいまだやる気かお前の弱点は全部お前のとうちゃんから聞いてるんだぞ。」

その言葉に体が一瞬固まる。するとクラス中がざわめく。

やっぱり父さんは日本政府の方にいるのか

「…羽川、どういうことだよ。」

『父さんは日本政府専属の殺し屋なんだよ。そして佳奈を殺した張本人だ。』

「「えっ?」」

「おい。そこまで知っているのか?」

確かこいつも隠し玉扱いされてたしな

多分それ繋がりで知る機会があったんだろう

こいつ本気で俺を潰しにきているな。

俺の弱点は露見していないだけで結構ある

とくにその一点だけはほとんど致命的と言っているいいほどの大きな弱点だ

多分そのことが露見している

ちよつとまずいかもな

「なあ、羽川勝負しようぜ。」

すると鷹岡がニヤニヤと笑いこつちを見る。

「お前らもまだ認めていないだろう。このままだったら父ちゃん不用意だ。羽川も少し体育教師をやっていたんだろ。そこでこうしよう。こいつで決めるんだ。」

すると対先生ナイフを取り出す鷹岡。

だいたいやりたいことがわかった

血の気が引いていく

「康太くん？」

「羽川、お前かお前と烏間が育てたこいつらの中でイチオシの生徒を一人選べ。」

やっぱりそうくるか

「そいつが俺と闘い一度でもナイフを当てられたら…烏間の教育が俺より優れていたのだと認めよう。その時はお前に訓練を全部任せて出てつてやる。男に二言はない。」

俺は寒気と冷や汗が止まらない。何故ならば

『ナイフの種類って本物か？』

俺が紙に書くとき鷹岡がニヤリと笑う

「もちろんだ。殺す相手が人間なんだ。使う刃物も本物でなくちやな。」

俺は心拍数が上がる。まずい。本当にまずい。

すると視線が俺に集まる。

多分俺に期待してるんだろう。

でも、俺は本物のナイフが持てないんだ。

「おいおいどうした？怖いのか？人を殺すのが。」

「羽川？」

「そりゃ、そうだろうなあ。だってお前は人を傷つけることができないんだからな。安心しな寸止めでも当たったことにしてやるよ。」

鷹岡の言葉を聞き流しながら俺は考える。

正直模擬戦なら多分俺に叶うものはいない。

でも実戦では違う。

簡単だ。だって俺はまだこの状態で人を傷つけたことがないんだ。正直実戦では俺はこのクラスで一番最弱と言っている。

でも、このままだったら

……でも、一人だけチャンスがある先輩がいる。

殺し屋の才能がこのクラスでもずば抜けており俺が単独で殺せると思ったたった一人の人物

でも、

「羽川くん。」

すると烏間先生の声が聞こえる

「……大丈夫か、冷や汗がすごいぞ。」

『正直結構厳しいです。可能性があるのが二人いるんですが……その先輩を危険に巻き込んでいいものか。』

「……あいつが言ってた人を傷つけることができないって本当なのか。」

俺は頷く

怖い

ただ怖い

多分あいつは昔俺が受けていたことをするんじゃないかって思うだけで寒気がする。

『本物のナイフも銃も練習だったらどんな条件でも外さない自信があるんですが。実際の状況になると震えが止まらなくなるんです』

そう俺の唯一の弱点

誰かが傷つけるのを極端に嫌うのだ。

体が言うことを聞かず手が震える

それが殺し屋であっても如何にかして助けようとしてしまう。

俺は周りを見る。油断している鷹岡。不安げな先輩方。

そして一人だけ色が混じってる先輩

多分俺よりも殺せる可能性が高い

でも、

「こうちゃん。私がやろうか?。」

あかりが不安げに俺の方を見る。違う。あかりがやっても無理だ。

そして何度も考えながら決めた

俺はみんなの方を向く。震えた手で書く。

『すいません。俺じゃ殺せません。』

するとみんなが目を逸らす。軽い絶望感が見える。でも

『先輩の中で可能性がある人が一人だけいます。』

俺が書いてみせる。するとみんなが驚いている。

『でも危険なことに巻き込んでしまう可能性が高くて正直迷っています。』

「……」

全員が俺が書くのを待っている。

『でも、この中で一番殺せる可能性があるのは渚です。』

すると全員が俺を見る。でもこれが間違っているとは思わない。

『みなさん。言いたいこともあると思いますがこの条件なら俺は誰に何でいわれようとも渚を指名します。正直自分勝手なお願いではありませんか助けてもらえますか？お願いします。』

俺は頭を下げる。これは俺が招いたことだ断ってくれた方がありがたかった。

「俺もこの条件なら渚くんを指名する。」

すると鳥間先生が俺の肩を叩く

「返事するまえに俺の考えを聞いてほしい。これは羽川くんも聞いてほしい。」

すると鳥間先生は真剣な顔つきになる。

「地球を救う暗殺任務を依頼した側として：俺は君たちとはプロ同士だと思っている。プロとして君達に払う最低限の報酬は当たり前の中学生生活を保障することだと思っている。それは羽川くんにも同じことが言える。みんなは知らないと思うがこの教室の中で一番の負担がかかっているのは羽川くん。みんなは中学生生活を守りながら指導し私達の暗殺任務の協力や情報収集や環境設備に購入に管理その他にも多くのことをたった一人の中学生がやっている。自分のこと

もあるのにだ。」

すると全員に見られる。注目されるのに慣れていないので少し逃げたくなる。

「なんでそこまでして」

「羽川くんは普通な生活が一切無縁の生活を送ってきた。だから不安なんだろう。いつどこで殺されてもおかしくない生活をしているんだ。それにこのクラスで唯一国からではなくあいつから依頼されるんだ。もしこの教室であいつがいなくなれば羽川くんはどうなる？」

本当にこの先生は的確に不安を言い当てていく

「……」

「多分羽川くんはあいつが殺されて自分がなくなったら、それにもし自分のせいでみんなが殺し屋に殺されたら。もしこの教室が終わったら。羽川くんにとったら初めてできた居場所なんだ。失うのが怖いに決まってる。それに羽川くんは今殺されそうになってるんだ。親からも見捨てられ、ずっと殺し屋から狙われてきた。死地を切り抜けていた。でもそれを褒めてくれる人も優しくしてくれる人もない。ずっと孤独に、ひたすらに生き続けてきた。理不尽なことでも、本当はただの中学生になりたかったんだろう。」

事実だった。ただ怖かった。この場所を失うことが怖かった。

だから慎重になっていった。完璧であろうとした。なんでもできる羽川康太を演じていたんだ。

それでも楽しくて居場所にしようとした。多くのことをしてまで俺はこの教室にいたかった。

夢だったから。

学校に行くことが夢だったから

「もしどんな結末があろうとも。羽川くんを責めないでやってほしい。」

すると全員が頷く。

「そして渚くんも無理に受けとる必要はない。その場合俺が鷹岡に頼んで……『報酬』を維持してもらえよう努力する。」

正直な話それが一番ありがたかった
受け取ってもらえなければ
それで怪我をしないでもらえれば
でもそれは

「やります。」

俺の手からナイフを受け取った渚の一言で断ち切られた。

ありがとう

俺がアメリカ軍の訓練を受けていたとき

俺を狙った暗殺者がいた

それは医者に紛れていて俺が精神的に元から弱かったのでよく不眠症の治療に行っていたところを狙ったらしい。

確かに正しいことだ。俺が薬学にも詳しくなかったららの話だが。

俺はすぐにその薬が渡された薬ではないと気づいた。

俺はその時に取り乱してしまった。その時はまだ佳奈が殺されたと分かってすぐだったので当然だった。

その病院は政府と内密で応対も良く安心できると言われていた。なのでアメリカ全土でも知れ渡るような病院だ。

でもそれは俺が来ただけで変わった。

その時は各国で保護命令が出されてると知っており多分一番警戒されていた時期だったと思う

薬を渡した暗殺者は目の前で射殺され、その後その時病院にいた全員を殺した。

その時の報道は人気病院で起こったテロ事件と解釈されていた。

その報道を見た時俺は泣き悔やんだ。

自分のせいで数百人の命が失われたのだ

たった一人の命

でもその価値はそこにいる数百人の命より重いと言われたんだ

俺さえいなければ救えた命

それがたった数時間で亡くなった

しかもそれは俺の頭脳が欲しいだけで誰も俺自体を気遣ってくれることもなかった。

頭脳がお金になる。

そんな考えのやつばかりと出会ってきた

国の利権や自分の出世ばかり考えている人ばかりで気持ち悪かった

いつしか俺は殺し屋の対処とその対応に慣れてしまった

その間に何千人との犠牲者が出た。

だから俺はいつしか人は物だと、そう思い始めていた。全部思い通りになる物だと思っていた。

暗殺者も全て思考が丸見えで面白みがなかった

でもたった一人の暗殺者が変えてくれた

死神

そう呼ばれた殺し屋が

唯一俺に致命傷を負わせた殺し屋だった。

確かに油断も慢心もしていた

でも致命傷を負わしてくれた

その時始めてそいつに会ってみたいと、話してみたいと思った

俺はこっそり死神の拠点を割り出し会いに行った。

その時、始めてあったときにバカなんですかって言われたっけ？

でも始めて俺が依頼をした

俺を殺してくれたって

殺してくれたら稼いだ1億ドル全てやるって

その代わり逃げ切ったときは友達になってくれって

そしてあんたは笑いながら了承した

一億ドルなんかいらんかいいながら

だから死神が降参って言うまで全力を使って逃げ続けた。

一週間の間に何度殺されそうになったことか

でも逃げ切った

そして会いに行き降参と言う2文字を聞いた時始めて思った

生きていてよかったと

こいつに会えてよかったと

そして二年経ち

俺と死神は教師と生徒という関係になった

あんたを慕ってくれる生徒がいて、俺をちゃんと羽川康太として見

てくれるクラスメイトがいる

でも俺は今、あんたの一人の教え子を危険にさらそうにしている

俺が勝手な行動をしたせいで危険にさらそうとしている

相手は軍人

こちらはたった三ヶ月の初心者だ。

もしちゃんとした状態なら、渚は80%の確率で寸止めにいけると見ている

でももしそれが誤っているとしたら

それにあつたとしてその20%に当てはまってしまうたら

本当に俺は

すると誰かが手を掴まれる。

「羽川くん。」

その声が死神の声だと認識する

「大丈夫です。私でもあの条件ならば渚くんを指名してます。」

でも死神、俺はあんたの生徒を、渚を危険に

「君は本当に優しい。自分のことを考えず他人の心配ばかり気にしてる。でも本当は自分のことを大切に思うことです。」

俺は首を横に振る

そんな価値なんていらない

もう何人も俺のために死んだり殺されてきた

でも本当はそんな価値はないんだ

俺だって一人の人間だ

天才とかそんな価値はいらないんだ

たった一人の人間

俺のために死んだり殺された人たちと同じなんだ

特別扱いなんかされたくない

普通の中学生だ

俺だって普通の人間で

死んだ人と同じ命なんだ

それを俺一人が生きるために

俺が生きてしまったために

「羽川くん。」

大きな声で名前を呼ばれる

「……君は誰よりも命の重さ、平和という意味を理解していると思

ます。でも後ろ向きになってはいけません。生きないといけません。君には大事な人がいるのでしよう。」

でも

「……大丈夫です。勝負は一瞬で決まります。君も見ないといけません。君が信じた渚くんのことを。」

すると渚がナイフを構えて立っている。

そして向こうは鷹岡。やっぱりナイフ相手の格闘に慣れているらしいが油断している。

怖いが見るしかない

俺ができないことを自分から頼んだのは始めてだった

それもその人の身をかけた暗殺

見たくない

でも初めて頼ったんだ

前にあかりと桃花に言ったこととは違う

自分の安否をかけたことをお願いしたんだ

断つてもおかしくない

でも引き受けてくれた

だから前を向こう

渚を信じてみよう

するとナイフを見ていた渚が笑った。

そして歩き出す。普通の少年のようにただ通学路に歩いている男の子のように

ナイフを振る。練習と同じく綺麗なフォームで

そして鷹岡が体勢を崩したので、服を引っ張り鷹岡を転ばせ

後ろから回り込み

仕留める

練習通りみたいな俺にはない才能

本番に物怖じしない才能

俺が暗殺の才能で唯一足りてないもの

それが渚にはあることは見抜いていた

だけど本当は気づいていたのだ。

それは俺と同じ自己犠牲からくるものだと
でも俺は臆病だからその才能はない
みんなが歓声をあげる。

俺はその姿をただ見ていた。
でも本当に良かった

渚が無事で

俺も近づく。本当に嘘みたいだった

俺は震えた字で聞く

『渚、怪我はないですか?』

思考が安定しないでも不安で押しつぶされそうになる。

「えっと、羽川何て書いてるんだ?」

杉野が聞いてくる。でも

「うん。大丈夫だよ。」

笑顔で答える渚。すると自然と涙が出てくる。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

怖い思いを

危険な目に合わせてしまつて本当にごめんなさい。

「羽川くん?」

力が抜けて座りこんでしまう

もう何度も迷惑をかけてしまった

もう何度も我儘に付き合わせてしまった

「……怖かったんだ。羽川。」

俺は首を横に振る。怖い思いをしたのは渚だ。今回俺は何もして
ない。

「……ごめんな。いつも助けてもらつて。」

違う。違う。俺が助けてもらつてるんだ。

俺のせいでみんなが

「そうだよ。羽川が一番怖いんだよね。」

「ううん。多分こうちゃんは違う。迷惑かけてるのはこうちゃんだと
思つてると思うよ。」

「……そっか。そういうえげつと言ってなかったよな。守られるのが、安全に暮らせるのは全部羽川が頑張ってくれてたんだから。」
「そうだよな。羽川。いつも守ってくれて」

「「「ありがとう（な）」」」」

その一言が聞こえたときとたんとても嬉しくなる。
涙が止まらない。

もうどうしたらいいのかわからなかった。

でも伝えたい。

感謝の気持ちを

本当は声に出して伝えたい。

でも

伝えられない

口で何度も言おうとするが

何度も息を声を出そうとするが出てこない

だからせめて

ちゃんとメモに書いているかわからない

だけど伝えたい

『「「「「こちらへこそ助けてもらってありがとうございます」」」」』

そうメモを見せようとするとき背中になにか重い衝撃がぶつかり前に吹き飛ばされる

「「「羽川（くん）」」」

「てめえ。よくもガキの分際で。」

どうやらさっきのが鷹岡の攻撃だと気づくでも正直痛みも何も感じない。

今までずっと助けられた

ずっと困らせてきた

でもその度助けられた

さつきだつて俺のことを助けてくれた。

守ってくれた。

そのことが嬉しかった。

だからもう俺はこの先輩たちを信じよう。

困った時はいつでも助けてくれるって

だから俺もできる限りのことはする。

命をかけてみんなを全員を守るんだ。

だから一旦泣き止んでみんなを鷹岡から守る

「このガキ」

俺は立ち上がり鷹岡に向かい飛び蹴りをする。その奥では烏間先生が肘を鷹岡の顔面にぶつける。

「「烏間先生」」

「「羽川」」

そんな声が聞こえる。

「俺の身内が：迷惑かけてすまなかった。」

『みなさんご心配かけてすいませんでした。』

メモに俺は書く。

「羽川くん大丈夫か？」

俺は頷く。もう俺のことよりそいつを追い出すことに集中してもらおう。

「後のことは心配するな。俺一人で君達の教官を務められるよう上と相談する。いざとなれば銃でも脅して許可をもらうさ。」

「その必要はありませんよ。」

すると浅野先生がやってくる。あ、そういえばカメラ回してるんだつた。

「羽川くん大丈夫ですか？」

『まあ。でも一応解雇する証拠はちゃんと撮れましたよ。』

俺は小型カメラを投げる。

「羽川くんいつのまに？」

『授業中ずっとです。本当は先生方以外に伝えていたんですが。』
「そういえば。」

「カメラ回すって機具がそう言ってたわ。」

まあ俺も痛みで忘れてたし人のこと言えないけど

『完全に忘れてたらしいですね。だから渚、断つてくれてもよかったです。』

「ごめん。ちよつと血が上ってしまつて。」

『いえ。正直嬉しかったです。改めてありがとうございます。助けをありがとうございました。』

「ううん。どういたしまして。」

するとクスリと浅野先生が笑つたような顔をしたが

「……鷹岡先生、あなたの授業はつまらなかつた。教育に恐怖は必要です。が、暴力でしか恐怖を与えられないのなら……その教師は三流以下だ。自分より弱い暴力に負けた時点でその説得力は完全に失う。」

と解雇通知を書き、倒れている鷹岡の口に入れる。

「解雇通知です。以後あなたはここで教えることは出来ない。」

上手いなやっぱり恐怖を操るのは

「柵ヶ丘中の教師の任命権は防衛省側にはない。全て私の支配下であることをお忘れなく。ああ、それと」

俺の方を見て

「お疲れ様。羽川くん。六年間頑張つたね。そしておめでとう。」

……えっ？

「……どういうことだ？」

みんな不思議そうにしてると

俺は少し考えてから

一つだけ思い浮かぶことがあつた。

俺は急いで教室に戻る。

「康太くん？」

もしかしてあの先生

俺は教室に着くと急いでノートを書き妖精の律に見せる

『律、テレビ中継どこでもいい繋いでくれ。』
「えっ？」

「こういう時話せないのがもどかしい
『いいから。』

「は、はい。」

すると妖精姿の律は渚の机につきその後本体を起動する。そして
ら

「……えっ？」

インターネットに接続したのだろう律が驚きの表情をしてる。

「……今すぐつながります。」

すると律の表示が衛生放送のニュース番組に繋がる。

そこには

内閣総理大臣の会見で

政府職員不正内部告発

とだけ書かれていた。そしてテレビの中の総理大臣が

「なお、羽川康太くんが生存していることを隠蔽していたことおよび、
政府関係者の卑劣な行為により命を狙われていたことを謝罪します。
申し訳ありませんでした。」

「……康太くん」

テレビの音がかき消されてるように桃花の声が聞こえる。

クラスみんなが集まってくる。

ただ全員が俺を見つめている。

俺はずっと待ち望んできた。

たつたずつと待ち続けていたのに

表現したらいいんだろう

ただ、

「こうちゃん。」

あかりの声が聞こえる。

長かった

「お疲れさま。」

その言葉が聞きたかった。

その声がずっと聞きたかった。

もう声が出せないけど

ただいま。

そう言ったつもりだった。

すると笑って

「おかえりなさい。こっちゃん。」

涙目のあかりが抱きついてくる。

もいい。

やっと終わった。

全部終わったんだ。

よかった。

心配かけた。でもまだ油断はできない日が少しの間続く。

俺はみんなの方を見る。すると優しく微笑みかけてくる。

でもすこしだけ今日だけでいいから

思いつきり泣こうか。

説明

『お見苦しいところを本当にすみませんでした。』

俺が謝る。すると

「いいけど……なんかあつさりど解決したよな。」

「うん。なんかもつと長引くものだと思ってた。」

「普通最終回で解決するのが感動のエンディングじゃないの？」

「不破さんメタいよ。」

苦笑してしまう

『俺も一応明日だと鳥間先生から聞いていたんだけど、さすがに俺も騙されてた。』

「二「知ってたの？」二」

『一応ってか知ったの数日前だし。』

「えつとついでに何日前？」

『確か言ってきたのが五日前だったかな？』

「ああ、その認識であってる。」

「それって。」

「康太くんが体調を崩し始めた日だよね。」

俺は頷く

『正直この配慮はありがたかった。逃げるのってゴールがわかると一気にプレッシャーをかかるんだ。あと少しだからと言って気をぬくとやられることがある。まあ爪が甘いつてことだ。』

「このことは俺と羽川くん、そして浅野理事長しか知らなかった。どんなところから情報が漏れるのか分からないからな。」

『まあ、先生には伝えただけだな。本当はみんなには伝えなかったけど、鳥間先生に前に盗聴器仕掛けられたことがあって、もしかしたらの可能性から伝えることができなかった。』

「……なるほど、私は体育の時間に伝えたのは、唯一校庭で二人きりになれる時間だったからですか。」

死神が頷く。俺の家も盗聴器対策はしているが、監視カメラが仕掛けられていたら厳しい。だからあの日はあえて死神がよく遊んでい

る砂場の近くの木の下で座っていたのだ。

「それにわざと羽川くんは体育の時間サボらせていたんだ。本当だったら羽川くんがサボるわけないだろう。本番では使えないが指導力もかなり優秀だった。しかも希望者にはちやんと補習までしている。それも戦術や逃走術は我々も驚くほどだ。暗殺する立場ではない逃走する意見は貴重で、全部最終的な判断は羽川くんがするほどだ。そしてその的中率もかなり高い。」

「……そういえば康太くん、私が最初に私たちの暗殺を見てないのに射撃の欠点を見抜いてた。」

桃花が同じく納得したように頷く。

「同じく教えることに関しても俺よりも上手く、そして弱点はあるものの技術的にも経験でも俺よりも上だ。多分弱点を克服したら、あいつなんて本当にすぐにでも殺せるだろう。」

その弱点が一番の弱みなんだけどなあ。

苦笑してしまう。

「だから本当はいち早く暗殺に参加してほしかつたんだが……今回の件は本当に俺たち防衛省が悪かったのはわかりきっていた。一応理事長からも金銭の他に羽川くんの安全を保護することを条件にしていたのだが、一度うちが暗殺者を雇ってしまった。」

すると少し納得がいった。あれ以来俺目当ての殺し屋はいなかったのだ。それは理事長のおかげだったのか。

「だから羽川くんと個人的に交渉した。羽川くんの安全、そして身の回りの人、つまり君達の安全を守ること。またできる限り暗殺に協力をする。つまり今回の証明がそのうちのひとつだ。その条件を俺と浅野理事長、首相と羽川くんの契約としたんだ。元から羽川くんは暗殺の協力はすると言っていたが。」

『こういうところ堅いですしね烏間先生。』

何度違う条件でもいいと言っていたのにな

「……まあ羽川くんの暗殺の協力で、かなり暗殺できる可能性が上がる。そして今までの報酬がこの結果だ。」

「でもいつ取引を。まさか最初からじゃないだろう?」

もちろん最初からじゃない

『修学旅行前に結んだんだよ。あかりには言っただろ、浅野理事長と飯を食いにいったって』

「……あつー！」

思い出したのか驚いている

『本当は正直ここから離れるつもりだったんだよ。でもカエデと桃花と付き合ったり、なんだかんだ居心地が良くてずっとここに居たかったんだよ。だから俺は少し無茶して四人の面談に取り合わせたんだよ。』

「ちよつとそんなことすぐにできるわけが。」

「いや。俺達が合わせるしかなかったんだ。あの時の内閣とは違って羽川くんが生きているのを知っているのは、全くと云っていいほどいかなかったんだ。それで俺も、誰も裏で執行されている暗殺依頼を取り消すことができなかった。」

「……」

「それに他国では羽川くんは大きな功績を挙げている。それも国の危機や紛争を平和に解決したり多くのことをやってのけた。そして一番大きかったのは羽川くんがICPO、国際刑事警察機構の一員だったことだ。」

「「はあ。」」

『交渉役としてだけだな。機密事項や国際指名手配犯の隠蔽を調べることもしてる。まあこれにて解任だけだな。』

「つまり羽川くんは世界中を味方につけたんだ。それに日本が対応できるわけがない。つまり事実を認めないといけなかったわけだ。」

まあそういうことだよな。

『正直な話トントン拍子に決まりすぎて逆に困惑してたんだけど。俺でもこんな早く決まるとは思ってたし。俺でも最速で九ヶ月くらいはかかるんだけど。』

するとみんなは頷く。死神でさえ頷くほどだった。

「でもこのままじゃ終わらないんだろ？」

寺坂先輩の言葉に頷く。

『最低一年。長くて二十年くらいですが、恨みや妬みで殺しにくる人がいると思います。俺がずっと恨んでいたように。だから本当は身を潜めて暮らしたいんですが、さすがにここまでやってくださって契約を破るわけにもいかないのです。それにもう少し先輩方と過ごしたいので。』

「なんか羽川って案外子供っぽいところあるよね。」

否定できない。ってか甘えたことないから少し甘えたいのが事実なんだろうなあ。

『でも先輩方も、もうちょっと人を疑うことを覚えた方がいいんじゃないでしょうか？さすがにちよつと純粹すぎるってか烏間先生でさえも、俺が生きてるって言った時疑ったのに。』

「でも嘘言ってるわけじゃないんでしょ？」

本当にズバツとくるよなこの先輩方

すごくやりづらいんだけど。

「それに今更羽川がこのクラスのみんなを物扱いしてるだなんて思っ
てないぞ。」

「最初の頃と本当にキャラ違うからね。」

「少し怖かったし。それに烏間先生と同じように近づきにくかった。」

全部正論で言い返せない。それに軽く烏間先生を近寄りにくいつ
て言ってるし。

「……でも羽川はこの後どうするの？殺す側に回るの？」

「そーいやどうするの？」

『俺は基本的暗殺にはノータッチです。俺はちよつと烏間先生側に回
ろうかと。』

今まで通りサポートすることかな。この後烏間先生も忙しくなる
だろうし

『暗殺のアドバイスや訓練は、アメリカ軍やFBI時代に鍛えられた
のである程度はできます。まあ薬品とかトラップが本職ですが。そ
れに実際作りましたので弱点は知り尽くしています。』

「そーいえば羽川が作ったんだっけ？この生物。」

「でも羽川が味方につくってことは、今まで以上に暗殺が捗るかも。」

「でも羽川はなんで先生を狙わないんだ？」

あくそういえば言つてなかったな。慣れた手つきでノートに書き写す。

『それもちよつと昔のことと被るんでちよつと』

「そっか。契約か。」

「私は殺しにきてくれていいんですけどね。」

バカを言うな親友を殺せるはずないだろ。それにあんたが殺しにきた方が断然楽しいぞ。

『それに、俺いつでも協力するって言ってたけど、誰も相談しに来なかつただけなんですが』

「そういえば。」

「ちよつと待つて。それじゃあ私たち、今まで一番殺せんせーに詳しい人がいたのに、何も情報を聞き出せてなかつたってことだよね？」
すると全員が黙り込んでしまう。

「なんでこんなこと気づかなかつたんだろ？」

「渚、殺せんせーの弱点羽川から聞き出しといて。」

「えっ？」

渚に任せつきりかよ。でも

『でも悪い、今日はもう帰らせてくれ。今日くらい仕事を忘れて少しゆつくりしたい。』

「そういえば羽川っていつ仕事してるんだ？」

『睡眠時間削ってる。元々不眠症だし』

「それ本当は危険だよね？」

みんながわいわい騒いだりしながらずっと気がかりになっていた
……でもみんなやっぱり安心してるけど

さつき渚格上相手に暗殺成功してるのに

だれも警戒していないんだ？

「こうちゃん？」

俺は首を横に振る

『なんでもない。』

でも内心すごく怖かつた

平然と笑っている渚が。

欲

『先輩方大丈夫ですか?』

「大丈夫じゃないよ。」

「あつい」

みんなが机にへばりこんでいる

「つてかなんで羽川は平気そうなのよ。」

『暑いのは砂漠とアマゾンで慣れてるので。それに元々暑さには強いんですよ。』

「うん。やっぱり羽川くんはおかしいと思う。」

まあ色々行かされたしなあ。

『でも砂漠は結構好きですよ。夜になると星が綺麗なんです。明かりもないので満点の星空が見られるんですよ。』

「そうなの?」

俺は頷く

「でも羽川つて星見るんだ。ちよつと意外。」

『景色を見るくらいしか楽しみがないんだよ。それに星とか景色は人間のドス黒い感情を持ってないし。』

「うん。羽川くんの闇が深いことはよくわかった。」

本当に綺麗なんだよ。人間の薄汚い感情とは違って純粹だし。

『でもみんなはプール入れるからいいですね。俺は手話できる人いな
いから入れないんだよ。』

「か、話せなくなるからダメなんだ。」

「私は少しはできるんだけど…まだ日常会話くらいしかできないし。」

「でも、治る可能性はあるんでしょ?」

俺はあの後精神科に行つてストレスの具合だけ調べてもらったんだが

『一応な。でもやっぱり期間がどれ位になるか分からないって言つてた。ストレスによる失声症だつていわれた。』

「やっぱりかなりストレスが多かつたらしくて、シロの時にストレスと狂気が爆発したんだと思うつて鳥間先生がいつてた。元々鬱の前

兆もあつたししばらくはかかるって。でも普通じや一週間の治療で治るらしいんだけど…」

「康太くん、この後も暫くの間は狙われ続けるから長くなるかもって言ってた。」

「そうですね。でも一応治るんだ。」

頷く。まあそれは嬉しいんだけど

『でも、話せないようになって結構気付けたことも多かったから。正直な話かかってよかったとは思う。多分あのままだったら今みたいになってないと思うし。それに素直な気持ちは紙に書いた方が伝えやすかったし。』

「まあ羽川はいつの間にか女子を落とすこと多いしな。」

前原先輩には言われたくないんですが。

ってか本当に気をつけないと

俺このクラスの人みんな好きだから。あまり傷つけたくないし

でも渚も将来的俺みたいになりそう。

結構俺に似たところあるしな

『話戻りますけどプールってどこにあるんですか？俺この辺りでプール見たことないんですが？』

「ああ本校舎まで行かないとないんだよ。」

マジかよ。片道1km歩かなくちゃプールに入れないってどんな

……そういや

『もしかしたら、プール裏山に作れるかもしれませぬ。』

「「えっ？」」

『裏山に小さな沢があるんですけど、夜中に水をせき止めると水が池みたいになるんです。俺よくそれを使って魚をとってましたから。今日は無理ですが数日あれば多分作れます。』

「そういや羽川って、この山に住んでいたことあつたんだっけ？」

俺は頷く。

昔よく作っていたし暑い日は入って軽く泳いでたりしてた。

「羽川くん。その必要はありませんよ。私昨日のうちにやっておきましたから。」

「「は？」」

今なんて言った？

「昨日沢の水を止めておきました。羽川くんが前にやっていたのを聞いて応用してみました。容積を広げ25mました。」

うわあ。暇人かよ。

そんな暇あったらクラスの射的パターンの確認でもしてろよ。

まあ俺が言える立場じゃないけど。

でもクラスのみんなは喜んでるな。

でも死神、お前泳げないくせに作ってよかったのか？

先輩方がプールで遊ぶ声が聞こえる

俺はただずっとそれを眺めていた。

……俺も遊びたいな

俺は見ながら思う。

そう言えば警戒するとは言え、もうほとんど遊べるようになるんだよな。

学校だって高校に櫛ヶ丘で行ける

俺身元なんて今ほとんどない状態だし、高校は櫛ヶ丘とはいええ大学とかはさすがに厳しいだろうし。

……うーん。あたりは女優業に戻るって言ってたよな

俺は少し考える

将来か

今まで考えてこなかったことだ。

今まではここで働くことばかりだと思っていたけど

でも教師ってより、今は烏間先生みたいになりたいんだよな。

どんなことでもまっすぐで

自分の道を貫く

それが追われていた俺でもちゃんと一人の生徒として見てくれたし

なによりも守るべきものは守る

そんな烏間先生は本当に格好いいと思う

でも、防衛省か。

自衛官になったからって立場違いすぎるし。

でも浅野先生にも恩返しをしたいし

でも、ここに来てからなんか助けられてばかりだな。

本当に優しさが暖かく感じる

ここに来てよかった

守られていて守ってる

いつもそんな関係を保っていた。

本当は自分の命をかけて復讐するつもりだったんだけどな。

もう本当にどうでもよくなっていた

だけどここは暗殺教室だ。

絶対に何か起こる。

……考えすぎてるな

でもそんな大切な人達ができたってことだよな

その中でもやっぱりあの三人は特別だな。

そういえばどこかのラノベにあったよな。

本物

それは俺も手に入れたのだろうか

その答はだれもわからない

でも

もう手放さない

絶対に離さない

この場所もみんなも

……なんか独占欲もつよいな

俺ってこんな欲張りだったんだな

やりたいこと

欲しいものがいっぱいある

頑張れば手に入れられるかな。

そう思えるようになった。

自分を出せるようになった

自分のことを知ることができた

いつから自分が自分じゃなくなっていたんだろう

生きる意味を手に入れてから全ての景色が変わった
結局何を考えているんだろう
自分が自分でわからなかった
その中で俺がたった一つ気づいたのは
今、俺は幸せってことだ

「康太くん。」

そんな声が聞こえる

「康太くん、起きて。もうプール終わったよ。」

目を開けると俺を先輩方が俺を見ていた。

あれ？

俺寝てたのか？

軽く目をこする

そしてあくびをしてしまう。

すると一気に体が重くなった気がする

何もする気が起きない

なんだろうか？

「どうしたの？こっちはちゃん？」

俺はメモを取ろうとしたらなんだかすぐ体が熱い

でも、なんか寒気がする

そしてなんか眠気に覆われて

何も見えなくなった

病院

目覚めるといつもの教室や家ではなく真っ白な天井だった。体を起こすと三人が寝ている。

それもそのはず外は真っ暗でもう夜なのだ。

「起きた？」

声をした方を見るとイリーナが座っていた。

「あんた疲労で倒れたのよ。精神的な疲れなのか肉体的な疲れかその両方か」

その両方だろうな。今まで倒れてなかったのがおかしいのだ。

今まで睡眠不足で夜中まで仕事していて、身の回りをいつも警戒している

そんなの普通耐えられないぞ

前兆はほとんどなかったな。

あれば誰か気づいてたしほとんど同じだった

メモを書いて伝えようとする

あかりが右手の上に寝ていたおかげで手は動かせない。

さすがに起こしたら悪いので、反対の手であかりの頭を撫でる

……ごめん。また怖がらせちゃったよな

俺は一番怖がりなあかりを撫でる

優しいし明るく見せてるけど、一番怖がりな寂しがりやな性格なのだ

多分俺が何かあつたら

……本当にアホか俺は

大事な人なんじゃないのか？

心配かけてどうするんだよ

「私も帰るわ。しっかりと三人で話しなさい。」

俺は頷く。

ありがとうございます。

その気持ちを込めて一礼する。

そして出ていった。

……さすがにもう少し寝ようか。
なんかまだ眠いし

……さすがに死神相手を今したくないからな
俺は寝転びもう一度寝ようと瞼を閉じた。

おやすみ。あかり、桃花、有希子

目が覚めると医者みたいな男がドアから入ってきたところだった。
どうやらあかり達はいない。学校に行ったのだろうか

「おはよう。目が覚めたかね。」

俺は頷く。すると医者は顔には出さないが驚き、そして少し緊張して
いた。

そりやそうだろう、医者じゃないんだから

俺は警戒を強める

殺し屋ブラッド

薬品暗殺に優れていて、仕事件数は19件

やつと一流と言われるような件数だった

……なんでこんなに殺気だしてるやつに殺されないといけない
だよ

俺は隙だらけな奴を見てため息をつく

さてどうしようか。

逃げるのは簡単だが…

もし医者にあいつらが聞きにいったのなら

ここで再起不能にした方がいいな。

俺は笑う。適当に話しかけながらあることに気づく。

……烏間先生が近くにいる

匂いが近づいていることがわかる。そして

あかりたちもまだ病院内にいる

つてことは

……すぐに行動に移すか

俺はメモを書く

『すいません。ちよつとトイレに行ってきていいですか?』

「えっ?だ、ダメだ。」

慌て出すブラッド

なんでこんなやつに本当に殺されないとダメなんだ。
もういいや。

ちよつとストレス発散させてもらおう

俺は油断の顔をした瞬間に、顔面に一発拳を入れる。

すると急に殴られたので後ろに仰け反ったので、その隙に立ち上がって腹に拳を入れる

……一丁上がり

するとその殺し屋は前のめりに倒れ、気絶する。

伊達にずっと逃げ続けたわけじゃない。

舐められたのはいつぐらいだろうか？

さすがに苛つく

とりあえずそいつが持っていた注射薬を奪い取ると、やっぱり最初から液体が入っていた。

毒だな。

すぐに分かる。経験上感覚で分かるようになっていた。

とりあえず簞巻き簞巻きと

俺は簞巻きにすると

コンコンと二回ノックの

「羽川くん起きてるか？」

俺は怒りで乱雑に開けてしまう

「ごうちやんどうした……ってなんで医者縛られてるの？」

どうやらあかり達も戻ってきたらしく、驚いているが、烏間先生は俺を見て

「殺し屋か？」

俺は頷く

するとあかり達は全員だまりこんだ。

『殺し屋ブラッドで間違いないと思う。』

書くのが面倒くさくて乱雑に書いてしまう

「康太くん落ち着いて。なんで怒ってるのかはわからないけど。」
桃花が少し慌てている。

……まあ仕方ないか
深呼吸を二回してとりあえず落ち着く
とりあえずスマホを抜き取り、パスワードがかかっていたのでポケットに入れといた。

……
なるほど、衣服が俺のものじゃなくなっている。
これで気づかなかったんだな。

『先生俺の衣服は知ってる？』

「俺は知らないが。」

「えっとお医者さんから着替えるように言われたから。」

ちよつとまづいかもな。俺は急ぎながら書き上げる

『やばいかもな。雇い主がわからなくなる可能性が高い。こういった場面のために、俺はすぐに解析できるようにツールを隠して持ち歩いてるんだよ。それに俺の服は基本防弾や薬品から守るために、触手の脱皮の皮の発酵分解するのを抑えた奴を塗り込んであるから身の安全が危ない。』

「……えっはどこから突っ込めばいいの？」

「その話は後だ。ってことはこの病院にいることがバレていて…元政府関係者が狙っていることで間違いはないか。」

俺は頷く。正直もう脱出したほうがいい。

それと

『ごめん。心配かけた上に迷惑かけた。ちよつとさすがに治療しないとまずいんだけど。精神的に結構きつい。そうしないと寝れないし安心できない。』

イライラしてるのがその一つだろう。なんか色々ありすぎて精神的にも結構まずそうだな

「そうだけど……こうちゃん一日何時間寝てるの？」

「私達ほとんどこうちゃんが寝てるどころ見たことないんだけど……」

正直に言った方が良さそうだな

『全く寝てない。なんか離れてしまうのが怖くて全く寝れなかった。』

寝不足に慣れてる分、全く自分でも疲れてるのかわからなかった。多分あかりも最近寝れてないと思うけど。』

「……バレてたの?」

『俺が吐いて眠れなかった時、一番最初に来るのはあかりだしな。正直なところ、あかりもかなり精神的に辛いと思ってる。この中で一番辛いのはあかりだからな。同じ痛みを味わって俺とほとんど同じような生活をしてる。多分この中で一番心配しているのは完全にあかりだ。』

授業中も同じだろう

かなり辛いはずなのに結構無茶している。

多分もし何かあった時あかりはほとんどの確率で発狂死すると思ってる。多分明るく見せてるのは弱みを見せたくないから。

……逃げるよりも先に

『烏間先生、桃花、有希子ちよつと二人きりにさせてくれないか?』

「……うん。」

「ああ。」

「私はお医者さんに伝えてくるね。転院手続きとか色々。」

俺は頷く。正直この三人とも関係はまだ曖昧なままだ

多分気を使いすぎている

それは三人ともに言えることだ。

……共存しかけてるのかな

多分三人とも優しすぎるのだ

それに甘えてる俺がいる

多分この関係が続けたらダメだと分かる

俺も気を使っただけじゃないといえれば嘘になる。

一度ちゃんと話さないといけない

目を逸らしてきたけど中学生が同棲なんかすることがおかしいのだ。

自分勝手だけでも仕方ない

俺も色々しないとな。

でも有希子はどうしようか?

家から追い出されるってどんな喧嘩したんだよ。

しかも俺から言い出したことだし。

でも言わないと。

「こうちゃん。」

いつのまにか泣き止んだあたりは俺の方を見ていた。

『どうした?』

「私一旦家に帰ろうと思う。」

俺は少し苦笑してしまう

本当幼馴染ってなんでも分かるのだろうか?

『分かった。俺も言い出そうと思ってたから。でも、お前はいいの?』

「うん。それに多分甘えすぎているのが分かるから。」

『お互いにな。俺も甘えすぎた。有希子はさすがに無理だと思うけど、さすがにこれ以上はダメになれない。助けられてばかりじゃなくちゃんと自立しないと。』

「こうちゃん、まずちゃんと三人の中から一人選ぶことが大切だとおもうけど。」

『そうだな。でも、嫌だな。』

「うん。知ってる。でも決めないといけないんだよ?」

そうだな。分かっていた。

一番甘えてるのはそこなのだ

甘えすぎている

だから昔と同じように

現実的な話になってくる

「別に今じゃなくていい。でもこうちゃんは幸せになってほしい。今まで不幸だった分幸せになってほしい。それはみんなが思っていることだよ。だけどこんな関係は一年間が限界かな?」

『卒業までだ。一年間は長すぎる。それ以上は迷惑をかけられない。』

俺は書くあたりは頷く。

「うん。だから、ちゃんと胸を張れるような付き合いをしたいかな? だれか一人を選んで、それで恋人同士かそれか友達になるのか決めな

いとけない。」

友達で居られるのか？

でもあかりとはちゃんと幼なじみで居られる気がする。

それは彼女が望んでいることには違いないのだから

「でも、私はずつとこうちゃんの隣で入れたらいいんだけど……」

顔を真っ赤にして俺の方を見る。

「バカか。恥ずかしいんなら言うなよ。」

俺はそう書こうとペンを取り出そうとした時

「……えっ?」

「ん? どうした?」

「……こうちゃん声。」

「……えっ?」

俺はスマホってスマホないんだった。

とりあえず

「あかり。みんな呼んで来てくれないか?」

俺はそう伝えたつもりだった。

「……う、うん。」

するとあかりが急いで走っていく。

なんだ?

本当に声が出るようになるようになったのか?

……ってか多分声を出せなくなった訳って

この関係もストレスになってたんだろうな。

だってもう悪いと思っっているけど…

なんか体が軽い

多分気を使っていたんだろう。

ずつと気にしたことがある。

あかりと桃花は正直なところ今でも少し緊張している。

元々甘やかすのが慣れていないのだ

どんな態度で接したらいいのかわからない時がある。

だから余計に気を使っていた

多分あの中で意外に気を使わないのは有希子だ。

元々自己主張が控えめなタイプなだけあって、ゲームの時以外はあまり話しかけてこない。

話を聞いてただ笑っていることが多いタイプである

でも、気遣いができ、勉強面でも国語はあかりと俺の100点そして桃花とカルマに次いでクラスで5位

最近では的確なアドバイスや自分の思ったことを言えるようになっていた。

だから自然と話を聞いてほしいときは有希子に話しかけることが多いのだ。

聞いて欲しくない話は深追いせずその状況を冷静に判断できる

だからありのまま本音で話すことが多いのだ。

「こうちゃん呼んできたよ。」

考えてるとあかりがくる

「ああ。サンキュー。」

「「えっ?」」

「あくなぜか知らんけど、やっぱりその反応見る限りそうなんだな。」

自覚がやつと持てた

あの日から七日。ちょうど一週間

「桃花、有希子、烏間先生心配かけてごめんなさい。なんか知らないが話せるようになったんだな。」

元々いつ話せるようになってもおかしくはないと言われていた。でもまさかこんなタイミングで

…でもなんでだ?

よく考えたら怒りも結構早くひいたな。

今でも不思議になっていることだ。三人は喜んでいるのだがたった一人烏間先生だけなぜか不機嫌そうだ。

そういえばあの暗殺者の姿がないことに気づく

……:そういう俺手加減して殴ってないや

「烏間先生すいません。ついカーツとなってしまうて。あの殺し屋大丈夫でした?」

「…鼻を骨折と肋骨が折れていたらしい。さすがに過剰反応と取られ

てもおかしくないぞ。そしてスマホはあいつが取って行った。」

「ああ。……多分大丈夫だな。」

死神のことだ、すぐに特定するだろう。あの暗殺者も大変だな。

まあこの仕事を受けたことが運の尽きだな

「それと少しの間羽川くんには普通の学校生活を送ってもらおう。仕事は元々俺がやる予定のものだったから不足はない。それに期末テストの関係上俺の体育は中止になる。放課後の補修も同様にだ。」

「そういえば三人は学校はどうしたんだ？」

「……こうちゃんもう夕方だよ？」

「……まじ？」

「うん。よほど疲れてたんだよ。だからしっかりと安静にしてなきゃ。」

そういえば体は結構軽くなってるな。疲れはまだ完全じゃないけど少しは落ち着いた感じがする

「……まあ後は家に帰るか。唯一安心できるところだし。」

「でも竹林くんにはお礼を言った方がいいぞ。応急処置やこの病院も元々竹林くんの家の病院なんだから。」

「あ、そうなんですか？」

「そういえば、康太くん竹林くんと仲いいよね？」

「お気に入りアニメが同じだったんだよ。まあそれからオススメされたやつを見てるんだが……凄く面白いやつと面白くない物の差がありすぎて」

「……こうちゃんいつ見てたのさ。」

「えっと、昔から見てた奴とか結構あるんだよ。携帯でアニメ買ったりしてたから。逃走中はやっぱり暇だし。」

「暇なんだ!!」

「つてかとりあえず家に帰るぞ。でも」

俺はため息をつき一言

「もう病院には来たくないな。」